

---

# いつかあの場所で

丹羽遊星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつかあの場所で

### 【Zコード】

N4114S

### 【作者名】

丹羽遊星

### 【あらすじ】

王弟キイルは、お忍びで訪れた保養地で貴族の娘アズノエルと出会う。

それから六年、十八となったキイルは、王子のいない兄王の後継者として立太子されることとなつたが、それに伴い、他国の姫を妃に娶るよう迫られる。

キイルはアズノエルを妻とするべく、別の者を王太子に仕立て上げようと画策するが……。

『鈍色の空を溶かして』 過去編。

午後の陽気は、氣だるさと和やかさを織り交ぜている。

定例軍議のために離宮へと向かっていたキイルは、柱廊から望むことのできる庭園へと田を馳せた。そこに彼の心を留め置くものなどなにもない。ただなんとなく、そこから動く氣になれなかつたのだ。

時折、心を攫つていく虚無……。それは突然舞い降りてきて、いつの間にか過ぎ去つていき、身体中の感覚が塞がれていくような心地を彼に与える。

「いい日和で、いざこますね」

軍議の開始時刻は既に過ぎていいところに、ロベルトはキイルを急かしはしなかつた。

キイルが曖昧に相槌を打つと、ロベルトはぽつりぽつりとなにかを話し始めた。彼の言葉にはどこか泡沫の響きが伴つていたが、それを現の世界へと引き戻したのは、涼やかでありながらも雄々しい声であった。

「王弟殿下、いじこらしあつしゃつたのですか」

背後に立つ長身の男は、アシュレイ・グレンヴィル少将であった。国内屈指の伯爵家の当主であるアシュレイは、彼自身の才腕も相まって、若干一十八ながら少将の階級にまで登りつめている。

「……軍議が始まるのだったな」

遠くを見つめていたキイルは、一呼吸をおいてから言葉を返した。

「はい。皆、アイオーン離宮の“赤の間”に集まつております

「わかつてゐる」

そう口にしながら、キイルは身を翻した。少しの間をおいて、ロベルトとアシュレイもその後に続いた。

三人は無言のまま離宮への柱廊を進んでいった。途中、中庭の前を通りかかったとき、甲高い声が噴水の近くから響く。

視線を声のほうへ緩慢に向けると、そこには数人の子供の姿がうかがえた。

アシュレイが穏やかな声で呟く。

「ああ、王太子殿下がおられるのですね」

「王太子、か。私はあの王子をそのままのよつとお呼びしたくはないのだが」

ロベルトが苦々しげに応えた。日向の嫌味らしい言葉など口にすることのない男が、この件に限つては必ず悪態を吐く。

キイルはいつものことだとロベルトを咎めるとはせず、じつと子供たちの様子を見つめていた。そこには王太子ミカヤのほか、それよりもやや年少に見える少年と少女が、煌めく水飛沫の間を行き交っている。

「今日は、貴族の子弟らが来ているのか?」

キイルの問いに、子らのはしゃぐ様子を眺めていたアシュレイが、微笑みながらうなずく。

「お恥ずかしながら私の娘でござります。その隣におられるのがクラウス卿の御子息で、幼いながらしつかりした御子でいらっしゃいますよ」

アシュレイの言葉を聞いたキイルは、わずかに眉をひそめた。なんら他意はないはずのアシュレイの言葉を、キイルは不快に感じてしまつた。

あれからもう十年近く経つが、キイルの前でかの一件について話す者はいない。裏へと回れば好き勝手な噂がはこびつていて、キイルは噂などに耳を傾けるつもりもなく、なにを言われようとかまいはしなかつた。変に気を遣われるのもまっぴらで、心は頑なに他者の介入を拒み、同情や理解など求めてはいなかつた。

……だといふのに、あの子の姿を目にてしまつたからだろうか。心は情けないほど乱れていた。自身の心の弱さを突きつけられたようだ、その動搖を隠すだけで精一杯であつた。

ふとした瞬間に、胸を深く衝くような想いが振り起こされてしまう。どれほど忘れたふりをしていても、所詮は押し殺していたにすぎないのだと知る。

ロベルトの物言いたげな視線が、キイルの胸をざわつかせた。その視線に耐えかねたように、キイルはもう一度、噴水のほうへ視線を投げる。

あの少年の顔をはつきりと捉えることはできないが、遠目からで

も懐かしい面影を垣間見ることができた。

今、胸の奥に燻るこの想いが愛しさと呼んでいいものなのか、キ  
イルにはわからなかつた。

あの当時のことを見る者は多い。だが眞実を見る者は少ない。キ  
イル自身、訳のわからぬうちに物事が動いていったのだ。  
ただ一つはつきりしているのは、望みの半分は叶つたが、その望  
みのためにもつとも守りたかったものを失つたということだった  
。：

柔らかな風が吹く。

キイルは庭園から畠をそらし、柱廊を再び歩き始めた。

想いは、いつも過去へと駆け上る。

きっと私たちは、実を結ぶことのない徒花あだばなであつたのだろう。あのとき、お前に手渡した切り花のようたぐひ……。

+

「キイル殿下、もうすぐ母君の別邸にお着きになりますよ」

「デデュー公ミショルの呼びかけに、キイルは閉じかけていた目を大きく見開いた。

「コースティン王国首都エクシユールより馬車を走らせること一日、キイルはセヴァンス郡オファンへと到着した。王都とセヴァンスは隣り合つており、馬を早く走らせれば一日で辿り着くことも可能である。キイルがセヴァンスへと出かける際は、毎過ぎに宮殿を出て、その途中に王家が所有する屋敷で一夜を明かし、翌日の晩にかけて母の住むオファンへと向かうことが恒例となつていてる。

そんな一日間の移動は、広大な宮殿から出ることないキイルにとってたいそうな娯楽であった。窓を開けて馬車を走らせることがえ、王都ではありえない。窮屈な宮廷から抜け出すことへの解放感も相まって、田で見る景色だけでなく、肌で感じる空気までもが彼を樂

しませていた。

キイルが五歳のとき、王太后である母はエクシユール宮殿を去り、セヴァンスのオファンにある別邸へと移り住んだ。それから七年が経つ今も、キイルは年に一度ほど母の「」機嫌伺いにとオファンを訪れるようになつてゐる。

その別邸は母の生家であるハーシュリオン家が所有する屋敷の一つで、それほど敷地は大きくないものの、すべてにおいて母好みの趣向が凝らされた空間であった。王宮とは違い、絢爛とした金の装飾や色とりどりの壁画はなく、物々しい胸像は置かれていない。壁も家具も白や淡い色彩を基調としたもので揃えられ、ゆつたりとくつろぐことができる造りになつていた。元々はこの屋敷も煌びやかな装飾に囲まれていたそうだが、母が移り住んでから大幅に改装されていったという。

馬車から降り立つたキイルは、左右に立ち並ぶ使用人たちの間を抜け、白亜の階段の前に立つ人物に目を馳せた。そこには青磁色のドレスを身にまとう母キヤサリーゼの姿がある。キヤサリーゼが顔を綻ばせて出迎えると、キイルは足早に母のもとへ歩み寄つた。

「母上、お久しうつござります」

「ええ、本当にお久しぶりねキイル。あなたの手紙が届いてから、今日が待ち遠しくて仕方なかつたのよ」

キヤサリーゼは息子との抱擁を交わした後、キイルの背後に控えるミシユルに微笑を投げかけた。ミシユルは胸に手を当て、深く頭を下げる。

「王太后陛下、本当にお変わりなく安心いたしました」

「ミシール、そんなに改まらないでちょうどいい。」<sup>11</sup> これは王宮ではないのだから

テテュー公ミシールは、キャサリーゼの九歳年下の実弟である。ハーシエリオン家当主であるミシールはキイルの強力な後ろ盾でもあるが、比較的年の若い叔父であるため、キイルにとつては良き相談相手であった。

三人は応接間に入り、猫足の円卓の席に着いた。給仕の者が香り高いお茶を入れ、卓へと運んでいた最中、キイルは思い出したようにキャサリーゼに切り出す。

「母上、兄上からお手紙を預かってきているのです

「まあ、陛下から?」

キイルは封蝋が押された封筒を取り出し、キャサリーゼの前に差し差した。それを手に取ったキャサリーゼはほつと息を吐いた。

「なんだか陛下にはお気を遣わせてばかりで申し訳ないわね。<sup>わたくし</sup>私は自分の勝手でこの屋敷に住まおうと考えただけですのに」

今年三十一になるキャサリーゼは、十一年前、義理の息子である第一王子アルト＝ヴィジエの王位継承により王太后となつた。

キャサリーゼは先王の一度目の妃であったが、彼女が王妃の位にあつたのは十八で王家に嫁ぎ、王が流行り病で急死するまでのわずか二年の間である。親子ほど年の離れた夫には自分よりも年上の継子があり、さらにその継子に妃も子もいるところば、なんのために自分が王妃にと望まれたのかと虚しく思うのも当然であつただろう。

「そのせいか、キャサリーゼはキイルの前で父王について語ることにはほとんどなかつた。あるとすれば、眞じるにつれ亡き夫の面差しを色濃く宿すよみになつた息子に、為政者としての父の素晴らしさを説き聞かせることぐらうであつた。

波打つ赤い髪に、少し縁がかった碧眼……。

王宮に飾られた若かりし日の父の肖像は、キイルとともによく似ていた。

「兄上は、なにも母上を責めておられるわけではありませんよ。母上のことを中心なさつて私にその手紙を託されただけなのですから。近いに、お身體の調子はよろしこのですか？」

「ええ。無理をしなければ、どうといふことはないわ」

華奢な茶器を唇から離し、キャサリーゼは微笑んだ。

国内屈指の貴族で、かつてのゴースティン王家でもあるハーシュリオン家の生まれであるキャサリーゼは、息子のキイルの目から見ても華やかな美しさを持つ女性であつたが、煌びやかな宮殿を離れ、自然に囲まれたセヴァンスに住むことを選んだことからも、彼女はその容貌ほど華美なものを好む氣質ではなかつたのだらう。それならば、今彼女がやつと手に入れた平穏は壊してはならぬものだとキイルは思つ。

「といひでキイル、あなたはいつまでセヴァンスに滞在するおつもり？ もう十一におなりなのですから、あまり我儘を通すものではありませんよ」

「母上に、エクシユール宮へ一度くらうはお戻りになるつもりはないのですか？ 叔父上は、母上にお戻りいただきたいよつですよ」

「あらミシホール、あなたはキイルに私を説得させむつもつなの？」

キャサリーゼがミシェルに悪戯っぽく笑つてみせると、ミシェルは慌てたように繕つ。

「なにも私は姉上に無理強いをするつもりはないません。ギルベイド家の権勢はこびる富廷に姉上を止め置きたくはありませんからね。……私が気にしておりましたのは、殿下の後見の問題にござります」

ギルベイド家とは兄王の外戚であるが、ハーシュリオン家とともに国内外にその名を馳せる大貴族である。この二つの家は元を辿れば同一族であるにもかかわらず、いずれもがかつてのゴースティン王家の支流に当たる家で、王朝を築き上げた家柄であることから、オトワール朝が興つて五百年が経つ今もなお対立関係にある。

それゆえ、ギルベイド家出身の王妃を母に持つ王が、ハーシュリオン家出身の王太后を追放した、と富廷では噂されている。王と王太后はなんら対立関係なく、いい加減な噂にすぎないのだが、王が国政に対して自らの権力を振るうことができず、外戚の言いなりになつてているのは事実である。ミシェルは今の富廷の有り様がキイルにとつて好ましくないと考えており、王太后としてキャサリーゼに富廷に留まつてほしいと考えていた。

「キイル、あなたには苦労をかけてしまつていてるのでしおうね」

細い眉を下げる、息子の身を案じる母に、キイルは明るく否定する。

「その心配には及びませんよ。兄上は私のことを弟といつよりはまるで「自分の中の子であるかのような扱いですし、姪の王女方も私の姉のような振舞いをされる。不当な扱いなど受けてはおりません」

「陛下はあなたのこと、お亡くなりになつた王子様の代わりのよう  
に思つておいでなのでしょうね」

兄王は王太子時代にレイリア王太子妃との間に双子の王女を儲け  
ていた。レイリア妃はその翌年再び身籠つたが、不幸なことに死産  
となり、折悪しくそれが男児であつたといつ。不幸は重なるもので、  
その数日後、レイリア妃も亡くなつた。兄王の嘆きは並々ならぬも  
のであつたと伝え聞く。

「陛下はまだレイリア様をお忘れになれないでいらっしゃるのだわ。  
あれからもう十一年が経ちますけれど、決して後添いを娶ろうとは  
されませんもの」

「ですが姉上、それは良いことではありませんか。今ままでと  
キイル殿下より上位の王位継承権者が現れる事はないでしょう。  
そうなれば殿下は正式に立太子され、次期ゴースティン王となられ  
るのですから」

キイルが誕生してからほどなく、父であるゴースティン王が崩御  
した。第一王子のアルト＝ヴィジューが一十三で王位を継いだことに  
より、キイルは生後わずか一ヶ月で王位継承権第一位の王子となつ  
た。しかしその地位は、兄王に王子が生まれれば失われるという不  
安定なものでもあつた。実際その可能性が高く、周囲の者もキイル  
に王位継承者としての期待をかけてなどいなかつた。

しかしその状況は、再婚を頑なに拒む兄王の態度により大きく変  
わりつつある。周囲の思惑は年々肥大しており、キイルに重く压し  
かかりつつあつたが、それはキャサリーゼも同様であつた。

たとえ後添いであつても、王の妃ともなれば己の子を王位につけ  
たがるものであるが、静かな生活を望むキャサリーゼには、幼い息

子を権力闘争に巻き込むことをよしとしなかった。そもそも、ハーシュリオン家がギルベイド家に対抗するかのように先王の妃を輩出させたことを、キャサリー・ゼ自身が快く思っていないのだ。

「母上、今後私は自由のきかぬ身になるかも知れません。だから今のおつに羽を伸ばしておきたいと考えておりますゆえ、早くエクシコール宮へ戻れなどとおっしゃらないでください」

母の心中を察しているキイルが「冗談めかして告げる」と、キャサリーゼはその想いを受け取るよつに提案する。

「それなら明日にでも少し遠出をしてきたりいかが？ オファンも美しいけれど、アルティスには叶わないわ」

「母上はこつもなつおつしゃこますね」

「あなたはセヴァンスに来てもここの屋敷にばかりいるからわからないのよ」

「私がここの屋敷にばかりいるのは、ここが一番自由になれる場所だからですよ。私が外を出歩くとなると、近衛の者たちがぞろぞろ付いて来るでしょう？ それが煩わしいのです」

キイルが苦々しく告げると、キャサリー・ゼは複雑そうに微笑を返した。

母が王妃として過ぐした一年間がどのようなものだったのか、キイルには知る由もない。だがキイル自身、富廷は息苦しいものだと感じることがある。富廷のしきたりといつものばは、いちいち回りくどく、少々のことにも一重三重の手間がかかるため、よほど自分の手で事を進めたいと思つことじがしばしばである。生まれてこの方ず

つと王宮で暮らしているキイルでさえそつ細つだから、他家から嫁いできた母はなすことであつただろう。

キイルはちりつと窓のまづを見やる。

ほんの一日前、キイルは自室の部屋から外を眺めていた。それは入れ替わり立ち替わりやつてくる教師たちの目を盗んでのことだった。

遠出は煩わしいと口にしつつも、母が美しいと頻りに口にする場所に興味がないわけではなく、温かな光あふれる外の世界にほのかな憧れを抱いていた。

翌日、キイルは朝の十時過ぎにハーシュリオンの屋敷を発ち、アルティスへと向かった。予定ではキャサリーゼも伴つていくはずであつたが、昨晩から頭痛が続き、気分がすぐれないということで、キイルはミシェルと一人でハーシュリオン家の馬車へと乗り込んだ。

王都からの旅と同様に、キイルの乗る四頭立て馬車は近衛騎兵たちの行列に取り囲まれている。アルティス訪問はキイルにとつてお忍びの遊山であり、彼の素姓を隠す必要があるため、近衛騎兵は従僕に扮している。ただし、大型の馬車に十を超える馬が追走している様は、遠目に見ても大仰な一行であった。

そんな周囲の状況に目を馳せたキイルは、万事がこの調子だなど、そつと苦笑した。

麗らかな春の日差しの中をゆるやかに馬車が駆けていくと、目の前には幅の広い石橋が現れた。その川を隔てた先にあるのがアルティスで、周囲の風景は石橋を渡つてから大きく変わつていつた。

王都は青銅色の屋根に象牙色の外壁を持つ屋敷が主で、それらが見事なまでに整然と並んでいる。多くの貴族たちが保養に訪れるオファンは自然の多い王都といつた風であるが、アルティスには自然が多いことに加えて、家の建て方がまるで異なつていた。岩肌が剥き出しへなつた崖には、煉瓦色の屋根をした家々が密集して立ち並んでいる。オファンとそれほど距離が離れていないにもかかわらず、アルティスはどこか周囲と隔絶された空気を持つ町で、比較できるほど多くの風景を知らないキイルでさえ異質と感じるほどであった。

「まるで異国に来たようだ」ゼロさまよう?」

ずっと窓の外を見つめているキイルに、ミシェルは可笑しそうに声をかけた。ミシェルは幾度もアルテイスを訪れているため、この地の歴史や文化に詳しく、アルテイスの中心へ到着するまでの間に様々なことをキイルに聞かせた。

ゴースティン王国を含め、このアレイシス大陸のほぼ全域においてに信仰されているのは、ルドリア神を唯一最高神に据えるルドリア教である。かつて、ルドリア教の司祭たちが王よりも強い権勢を誇った時代があり、その司祭の中でもっとも強い権威を振るつたドートリッシュ一族の当主は、次第に「教皇」と呼ばれるようになつていつた。

教皇による王権への介入は何百年もの間続いたが、三百年ほど前にゴースティン王と教皇の対立が起こり、内乱の末、ルドリア教会において教皇位が廃止された。王権のもとに下つたドートリッシュ一家は、ゴースティン王国内の一貴族となつたが、教皇の流れを汲む直系子孫たちは「教皇一族」と呼ばれ、世俗権力も教会権力も有しないものの、依然として強い畏敬を集める存在であり続いている。

「ああ、そろそろ見えてまいりましたよ」

ミシェルが示す方向には、高い崖の上にそびえ立つ城があつた。遠目では判然としないが、白亜の城はなにやら教会堂のような莊厳さをまとつている。

このセヴァンスの地は、かつて教皇領の一つであった。三百年前に一旦王領となつた後、ドートリッシュ家の当主へと下賜され、教皇一族がひつそりと暮らすようになった。一族が暮らす城は、かつて教皇の夏の離宮と呼ばれたアルテイス城である。城主はエルディスという三十そこそこの若い男で、同族内から妻を娶り、一女を儲

けたが、既に奥方は亡くなっているといつ。

城のほうへ馬車が進むにつれて、周囲の風景がまた少し変わってくる。見晴らしの良い丘陵地には、見たこともない白い花が一面に咲き乱れていた。

「あの花は？」

「シユーベランで」やこます。春と秋、一年に一度咲くという珍しいという花でして……」

ミシールの説明を聞きながらキイルは少しだけ窓から身を乗り出す。シユーベランの敷きつめられた丘の向こうには、遠くの山の麓まで広がる湖があった。

「では、あの湖は？」

「エルド湖で」やこます」

湖面に光が乱反射し、きらきらと輝いている。アルティスには叶わない、と告げる母の言葉を思い出し、キイルの口元に笑みが浮かんだ。

「止めてくれ。少し一人で歩きたい」

馬車が止まり、恭しく扉が開けられる。馬車を降り立つとともに、アーリー遠くへ行かないようにとミシールが念を押す。そんな呼びかけを受け流しつつ、キイルは草地の上を歩き、湖のほうへと進んでいった。

歩くたびに伸びた草が脚に絡みつく。エクシユール宮の庭園は芝

が均一の長さに刈り取られ、歩行を妨げなどしない。植木も庭師の手によつて幾何学模様に刈られている。計算し尽くされたその配置は、バルコニーから見渡せば圧巻の風景であるが、どこか無機質にも感じられる。母の住む別邸にしても、一見、自然のままが残されているようだが、あえて自然の風景を人工的に作り出したものである。今、目の前に広がる手つかずの自然は、何人も踏み荒らすことが許されないような莊厳さが感じられた。

前方には大きな樅の木があり、それより先はゆるやかな下り斜面になつて、シユーゼランの咲く湖畔が広がつてゐる。さらに歩みを進めたキイルが樅の大木を回り込むと、湖に向かつて立つてゐる少女の後ろ姿があつた。

「ベルチエ、あなたにしては早かつたのね」

そう口にしながら少女が振り返つた。

いきなり声をかけられキイルは面食らつたが、それ以上に少女は驚いていて、小さな手の中から白い花が零れ落ちていつた。少女は紅潮した頬を両手で押さえて、必死に言葉を紡ぐ。

「『ごめんなさい。わたくし したら、人違いをしてしまつて……』」

キイルと年のころは同じぐらいだろうか。

淡い青地に細かなフリルのあしらわれたドレスを身にまつた少女は、腰のあたりまで届く長い亞麻色の髪をそよ風になびかせている。

「じたなところで、なにをしている？」

「久しぶりに外を出歩いてみたかつただけなの。……でも、早く戻

らないといけないのだわ」

キイルは崖の上の城を指差し、少女に問う。

「お前の帰る場所とは、あの城か？」

「ええっ！」

先ほどから少女は驚いた顔ばかりをキイルに見せていて、白い肌が紅く染まり、本気で動搖しているようだった。

「ど、どうしておわかりになつたの？」

どうしてもなにも、身につけているものを見れば一目瞭然だった。たとえ粗末な衣装であつたとしても、身のこなしや言葉遣いで村娘でないことはわかる。

（なにより、この顔……）

ドートリッシュュ一族は、王都エクシユールに住む本家をはじめ、国内のいくつかの領地に分家が暮らしているが、そのいづれの者たちもよく似た容貌をしているという。それは血族間による婚姻が多いためで、一千年以上続く家系にもかかわらず、それほど血族が拡散していない。

本家人間は宮廷に出入りしているため目にのる機会も多いが、教皇の一族はアルテイス城から出ることは滅多になく、外界とは切り離された存在と認識されている。先ほどミシェルからその話を聞いていたため、このようなところでの一族の者と見えることになるなど、キイルは思つていなかつた。

「ねえ」

呼びかけられ、キイルがはっと顔を上げると、少女のにこやかな微笑があった。エルド湖と同じ色彩の翡翠の瞳と、それを縁取るけぶるような睫毛が美しい。

「あなた、どこからこらしたの？」

「……オファンだ」

「本当はエクシユールからでしょう？」オファンに来られている貴族様の「子息なのね」

当たりかしら、と言つて、少女はくすくすと笑う。

「私の母がオファンで暮らしている。叔父は母にエクシユールに戻つてもらいたいようだが、母にはその気がないらしい」

「あなたは、お母様に戻つていただきたくないの？」

「苦労されること」が田に見えていたのだな」

キイルが苦笑まじりに呟くと、少女は小さく相槌を打ち、エルド湖へと視線を投げた。

微妙な沈黙に居心地の悪さを感じ、キイルは少女の横顔を見やる。

「……あのね、お父様がもうすぐお亡くなりになるの」

少女が突然呟いたものは、なにやらおかしな言葉だった。聞き間違いではないのかとキイルは耳を疑つたが、少女の暗く沈んだ顔を

見ていると間違いないようだつた。

“お父様”というのはアルティス城主エルディス卿のことだらう。エルディスが病氣であるとの話は既に聞き及んでいたが、もうすぐ亡くなるといふのはどうしたことなのか。

「お父様、ずっと『病氣』いらしたのだけれど、ここ数日、お父様から感じる魔力の波動がとても弱まつてしまつてゐるの」

少女は腰をかがめ、足元に散らばつたシユーゼランの花を一輪拾い上げる。

「この花、お父様とお母様の思い出の花なの。小さくてさやかな香りしかしないけれど、一番好きな花だつてお父様はおっしゃつていたわ」

「あの城の庭に、この花は咲いていないのか？」

「もちろん咲いているわ。でも、ここに咲いているものでなくではだめなの」

細い弧を描いた眉を寄せ、少女は悲しげに笑む。

「この湖からはね、強い魔力の波動を感じるの。安らかで、穏やかな気持ちにさせてくれるような、そんな波動……。お父様、今とても苦しまれているの。だからこの湖畔に咲いているシユーゼランをお届けしたいと思つてここに来たの」

キイルは少女にかける言葉が見つからず、視線を足元に落とした。少女の手から零れた白い花。病床の父を想い、その手すから摘み取つたものだつたのだ。

「……手伝おう」

キイルは瞬きを繰り返す少女をまっすぐに見つめる。

「私が驚かせてしまつたせいで、せつかく摘んだものを駄目にしてもしまつたのだろう?」

そう告げるとともに、キイルは少し腰をかがめ、足元に咲く花を摘み始めた。五本ほど摘み取ったとき、それを鼻へと近づける。王宮に咲く花は大輪で、色が濃く、香りも強いものが多い。丹念に生育された花の園は美しく、あたりに芳香を漂わせているが、どこか大仰でもある。

この花の涼やかな甘い香りは、佗やかでありながら深く胸に染みわたるような心地がした。

キイルの左手にはこれ以上持ち切れないほどの花束ができていた。片手いっぱいのショーゼランを、はにかむ少女に手渡そうとしたとき、背後から高い声が聞こえた。

「姫様!」

少女よりもやや年少に見える少年が、息を切らせて走ってくるのが見えた。あまりに急いでいるせいか、草に足を取られ、幾度か転びそうになっている。少年が走ってきた方向に視線を馳せると、そこには赤茶色の一頭立て馬車が止まっていた。遠目にも豪奢な馬車で、あの城から出されたものだとわかる。

「あれがベルチェか? ズいぶんと小さな下僕がいるのだな」

キイルがからかうように口を開けると、少女は走るベルチエを微笑ましげに見つめながら呟く。

「あの子、私の弟なのよ」

そう言われて注視してみれば、顔立ちも、髪や瞳の色も少女と同じものだった。しかし従僕のよつたな簡素な衣装を身につけており、姉であるはずのこの少女を“姫様”と呼んだ。少女のもとへ辿り着いたベルチエは、荒い息を呑み込みながら主人をたしなめる。

「姫様、お一人で出歩かれないとください。皆、どれほど心配いたしましたことか！」

「『めんなさいね、ベルチエ。すぐに戻るつもりだったのよ』

「それにしても、『うわせつてこんなところまで来られたのですか…』

「いつも城に出入りしている馬車があるでしょう？ ちょうど街に戻つていいくところだったから、それに乗せてもらつたのよ」

少女は謝罪しながらベルチエの乱れた髪や服を直してやつていた。弟を労わる少女の素振りは、姪の王女たちの姿をキイルに思い起させた。

ベルチエに急かされ、馬車へ向かおうとしていた少女が振り返り、キイルに向かつて小さく手を振る。零れんばかりの小さな白い花弁が、少女の手の中ひそやかに揺れていた。

「これ、ありがとう」

キイルはそれに応えようとしたが、少女は微笑みを残したまま優雅に身を翻した。馬車へと乗り込んでいくその姿を、じつと眺めていた。

+

「アズノエル様とおっしゃるのでですよ」

馬車に戻った途端、ミシェルが満面の笑みで告げた。キイルは思わず眉をひそめたが、ミシェルは気にすることなく少女の素姓を告げる。

「アズノエル＝リネージュ・デイラ・ドートリッシュュ……。『城主エルディス卿のたつた一人の姫君でいらっしゃいます』

「弟がいるようだったが？」

「たしかに、あの少年もエルディス卿の御子でしうが、母君が平民の出であるとかで、ドートリッシュュの姓を与えられていないとことでござります。なんでも、亡き奥方の意向で城に引き取られたとか……。エルディス卿は御子にドートリッシュュの籍をお与えになろうとなさつたそうですが、一族の者の強い反対により、使用人として城でお暮らしのようです」

貴族は貴族同士、平民は平民同士でしか婚姻は許されない。また、王族も基本的に王族同士で婚姻を結ぶのが通例であり、父王が国内

の貴族であるギルベイド家とハーシュリオン家から妃を娶ったのは、両家がかつてのゴースティン王家という歴史と権威のある家柄であるからに他ならない。

貴族同士であっても、大貴族による下級貴族への蔑視は並々ならぬものがあり、家格の釣り合わない者同士の婚姻は難しい。貴族の嫡男が身分違いの恋人を囲い、その私生児を引き取る例は稀にあるが、ドートリッシュュのような気位の高い一族にそのような醜聞があることは、少々意外なことであった。

キイルが馬車の駆けていった方向に目をやると、城門へと向かっていく赤茶の馬車をわずかに望むことができた。

あの城から見下ろすアルティスの風景は、さぞ素晴らしいことだろつ。

馬車に乗り込んだキイルは、近衛騎兵に囲まれながらアルティスを後にした。

「そういえば、リリアーナ様がご結婚されるそうよ。キイル、あなたは知つていて？」

夕食の席で、キャサリー・ゼがキイルにそう切り出した。

リリアーナとは兄王の第一王女で、カレーナー・ナという双子の妹がいる。現在、キイルよりも三つ年上の十五歳であるが、容姿も性格も年齢以上に大人びた姫であった。

「たしか、リオールの王太子とでしたか？　話は聞いていましたが、あれは決定事項だったのですか？」

「陛下からいただいたお手紙にそう書かれていたの。けれど、あまり陛下は乗り気ではないご様子だわ。隣国とはいえ、よほどのことがない限りお会いになることもできませんものね」

一度他国に嫁いだ王女が祖國の地を踏むなどまずありえない。だからこそ兄王は、本来であれば外交の駒である一人の娘たちを他国に嫁がせることに難色を示していた。

ゴースティンはアレイシス大陸においてケーニヒスと肩を並べる大国であり、その王女が嫁ぎ先で粗略に扱われるなどまず考えられないが、軋轢の生じている国に嫁ぐとなればそうもいかない。

その点、リオールはゴースティンにとって属国に近い友好国である。服飾や食事等の文化はゴースティンの影響を色濃く受けており、宫廷における公用語もゴースティン語を用いている。リオールから

嫁いだレイリア妃は宫廷作法の細かさにこそ苦労させられたものの、ゴースティン王家に温かく迎え入れられたといつ。若くして亡くなつたが、夫からは熱烈に愛されて、幸せな結婚であつたことだろう。

「レオンハルト王子はレイリア妃の甥で、リリアーナの従兄ですから、理想の結婚相手だと思いますよ。隣国で大国とはいえ、ケーニヒスの王子に嫁がせるよりはよいと兄上も考えられてのことでは？」

「そうね……。陛下は王女様方のことは本当に可愛がつておいでだし、辛い思いなど決してさせたくはないとお考えなのでしょうね。ただ、リリアーナ様が嫁がれたらカレニーナ様はお寂しくなられるわね。とても仲の良い姉妹でらつしゃるもの」

双子の王女たちは快活で朗らかで、ドレスや髪飾り、靴に至るまでお揃いのものを身につけ、時折入れ替わつては廷臣たちをからかつてゐる。そんな年上の姪たちはキイルにとつて姉のようであり、姪たちとともに過ごすにつれて兄のことを父のようと思つようにもなつてゐた。ただし、周囲の者の話によれば、父と兄は正反対の気質をしていたらしいが。

「ところでキイル、オファンはどうでしたの？」

キイルはスープを掬つていた手を止め、微笑をキャサリーゼに向ける。

「母上のおつしやる通り、美しいところでしたよ。たしかにオファンとは雰囲気がまったく違いますね」

「以前ね、アルティス城に伺つたことがあるのよ。エルディス卿と奥方のアティリート様のお招きで」

「奥方は五年ほど前に亡くなられたのでは？」

「ええ。だからそれよりもっと前、私がセヴァンス郡に移ってきてすぐのことよ。ご夫妻は静かなお暮らしでしたけど、お幸せそうでしたわ。あなたと同い年の姫がいらしてね、とても可愛らしかったわ」

それが、今日エルド湖畔で会つたあの少女だ。  
いきなりこのような話をするなど、ミシェルがキャサリーゼになにか話したのではないだろうかと、キイルは怪しがる。  
キャサリーゼは不自然に黙り込んだキイルを気にかけることなく、話を続ける。

「オトワール王家とドートリッシュ家との間には過去の確執があるでしょう？ ですからお会いするまで教皇一族の方々には底の知れない恐ろしさを感じていたのだけれど、ご夫妻はとてもお優しくて、とても感激しましたわ」

「たしか、今から八代前のゴースティン王が時の教皇エルジヨ三世を弑したために、『教皇の呪い』がゴースティンに降りかかったのでしたか？」

「どいか愉快気に告げるキイルに、キャサリーゼは口に運ぼうとしたグラスを置き、咎めるように眉を寄せた。

「呪いだなんて、あなたまでそんなこと……」

「もちろん、私はそのようなもの信じておりません。ですが、叔父上はあの偶然を少々本気にしておられるようですね」

オトワール朝第八代国王の時代、長きにわたり王権に介入し続けた教会権力を排除するため、ゴースティン軍は教皇宮を包囲した。國軍と教皇軍は膠着状態が続いていたが、王の放った刺客がエルジエ三世の首を上げ、ゴースティン王が教皇領であつたエクシユールの支配権を手にするに至つたのである。

その内乱の直後、各地で信徒らの暴動が発生し、國中が乱れていったところ、天罰のように起こつた飢饉と疫病の蔓延により何万人もの死者を出し、暴動制圧のために軍を率いていた王太子までもが流行り病に倒れた……。

これらの置みかけるように降りかかった災いは、密かに“教皇の呪い”と呼ばれている。

“教皇の呪い”を恐れたオトワール王家の者は、ルドリア教会を排斥するのではなく国教として定め、王権のもとで手厚く保護するようになった。王家に関わる祭事が執り行われるガルバンヌ大聖堂は、三百年前より王家が教会に多額の寄進を行い、實に百年の歳月をかけて建築されたものである。

ドートリッシュュ一族に関しては、王権の支配下に置きつつも、様々な特権を付与してきた。たとえば教会の権力者として地位の保護しつつ、本家の当主に“セヴァンス侯”を叙爵し、俗人としての権力をも授けた。

現在、ドートリッシュュ家の者たちにはかつて王家を意のままに操つていたころのような権柄さはなく、王家に対しても従順であるが、ルドリア教信徒らにとつて彼らは依然として強い畏敬の対象である。特にハーシエリオン家は“教皇の呪い”によつて亡くなつた王太子の妹が降嫁しているため、ドートリッシュュ家に対して恐々とした思いを抱いている。一族には非常に信心深い人間が多く、聖職の道を志す者も後を絶たない。

「胸の内はわかりませんが、表向き、王家と教会は上手くやっています。王家とドートーリッシュの確執よりも、よほどギルベイドとハーショリオンの確執のほうが厄介でしょう？」

宮廷における両家の確執に散々苦しめられてきたキャサリーゼは、その話はしたくないとばかりに曖昧につなぎいた。

+

まだ夜が明けぬころ、ふと夢から目覚めたキイルは寝台を抜け出した。先ほどまで見ていた夢は、王宮におけるキイルの日常がつらつらと繰り返されるものであった。決して悪夢ではなかつたものの、次々に現れる教師たちや、目の前に積まれた本の山は、彼を酷く疲弊させた。

窓を開けて、バルコニーの手すりに寄りかかる。月は煌々と輝き、夜気は冷たい。手元に時計がないため時間がわからなかつたが、夜明けまではまだだいぶあるように思われた。

月明かりの中、人工的に作られた自然の風景を眼下に望む。

お父様がもうすぐお亡くなりになるの。

鈴の鳴るような声とともに、淡い陰の落ちる小さな顔が思ひ出された。

この湖からはね、強い魔力の波動を感じるの。

魔力の波動。

聞き慣れない言葉ではあったが、キイルにとつてあの少女の言葉はまったく受け入れがたいものではなかつた。

この大陸には、生まれながら魔道の力操ることのできる人間が稀に存在する。強い魔力を秘めた人間というのは血統によるものが大きいと考えられているが、国内には強い魔力を有する一族がいくつか存在しており、その筆頭がドートリツシュ家である。

教皇位廃止後、ドートリツシュ家は分家の一つに当主の座が移譲されたが、ゴースティン＝ルドリア教会においては依然としてこの一族の強い力を及ぼし続けている。ルドリア教会の司祭は魔道の力を操ることが資格条件とされており、ドートリツシュを始めとした教皇時代に権勢を誇つた司祭の子孫たちが教会の多数派となつている。

当然、王宮の祭事や公式礼拝を取りしきる富廷司祭たちも魔道を操ることができ、キイルは毎日のように司祭たちの操る力を目にしている。ゴースティンの人間は幼いころから魔道の力を身近なものとして受け入れているが、他国においては魔法を扱える人間を見る機会などないのだそうだ。

ミシェルは外務官で、これまでに近隣諸国を何か国も訪問しているため、他国におけるルドリア教会の司祭たちを多く目にしてきた。ミシェルによれば、他国においては司祭たる資格に魔道を操ることが必要とされているわけでもなく、礼拝において魔道の力が用いられることもないらしい。そのため、ゴースティンに留学や外遊に訪れた他国の貴族たちが、教会堂において司祭の力を目にした際、その驚きは並々ならぬものだといふ。

おそらく、あの少女も強い魔力を秘めた者なのだろう。かの教皇

エルジエ三世はなにやら強力な魔法を操り、司祭だけでなく王侯をも従わせていたと聞くが、晩年に精神を病み、様々な奇行で教会内を混乱に陥れたことから、狂王と揶揄されることもある。

そんな狂王の血を受け継いでいるあの少女から感じたのは、どこまでも清浄で柔らかな空気だった。思い起こすだけで、風のない湖面のような安らかさに包まれていく心地がした。

その三日後。

アルティス城主エルディス・ゴーティエ・ディラ・ドートリッシュの訃報がキイルの耳に届いた。

オファンとアルティスの距離はそれほど離れていない。ハーシュリオン別邸からアルティス城までならば、馬車で一時間もかかる。そのため、エルティス卿逝去の報はオファンにもすぐさま拡散していた。

その報を受けた二日後、キイルはキャサリーゼとともにアルティス城で行われるエルティスの葬儀に参列することになった。数日前と同じ道を馬車で駆けていた道中、キイルは教皇一族の権威の凄まじさを目の当たりにすることになった。

セヴァンスの民の嘆きは、まるでこの世の終わりかと言わんばかりである。民らはアルティス城の方角に向かって跪き、涙を流しながら鎮魂の祈りを捧げていた。

王族が他界しようとも、王都の民は泣き崩れたりなどしないだろうとキイルは思う。というのも、三代前の『ゴースティン王ルイス』ヴィジエは、無用の戦を隣国に仕掛けた結果、国家財政と人的・物的資源を疲弊させ、追い打ちをかけるように民に重税を課したため、ガルバンヌ大聖堂への葬列には民衆から罵声が浴びせられたという。それを国王直属の近衛兵たちが制しなかつたというのだから、宫廷においても王への不満は積もりに積もっていたということだ。

キイルは父王の死をまったく知らない。はたして、父の葬列はどうであったのだろうかと考えているうちに、視線の先には崖の上に高くそびえ立つ城が現れた。

先日は遠くから眺め見ることしか叶わなかつたアルティス城へ、

キイルは足を踏み入れた。七百年近く前に教皇の夏の離宮として建てられたこの城は、外観も内部も壮麗な教会のようだつたが、若き主を失つたことによる悲愴さが、あふれんばかりの厳かな空氣の中に別の色彩を添えていた。

キイルとキャサリー・ゼは案内されるままに、城内にある礼拝堂へと向かつた。重々しい円柱群の身廊を一人は進み、中央よりやや後ろの席に着く。

アルテイス城主エルディスは、教皇の末裔というだけで、教会権力は一切有していない。王太后と先王の王子が一貴族の葬儀になど訪れるべきではないのだが、敬虔なルドリア教徒であるキャサリーゼたつての願いにより、この私的な訪問が決行された。そのため、二人は王族としての身分を隠す必要があつた。

葬儀の参列者は、セヴァンスに住まう貴族や豪商たちのほか、国内各地で暮らすドートリッシュ一族の者たちであつた。分家の者は遠方に住んでいるが、今日の葬儀に参列しているといふことは、エルディスが危篤状態であることが事前に一族の耳に入つていたのだろう。先日ミシェルから聞き及んでいた通り、祭壇の近くにいる十数人の血族たちは、皆一様に亞麻色の髪を持ち、似たような顔立ちをしている。加えて、強い魔力を秘めているせいか、独特的の空気をその身にまとつていた。

壯年の司祭が棺の安置された祭壇へと進む。彼はドートリッシュ一族の当主コリウスで、ルドリア教会の最高位たる「主教」の地位にある。コリウスの後ろに控えている黒衣の司祭は、その嫡子クラウスである。

通常、聖職者に婚姻は認められていない。貞潔の誓いも立てるため、子をなすことも許されない。しかし、ドートリッシュ一族の司祭にはその血統維持のために婚姻の可能が特例として認められていて

る。

ユリウスは一族の当主だけがまうことの許された紫の天鷲絨のローブをまとい、紫水晶の埋め込まれた聖杖を手にしていた。

祭壇の前に立ち、祈りの言葉が唱えられると、眩い光が聖杖から放たれる。

王宮の礼拝堂で見るものと同じ、神聖なる淡い光。神の祝福と信徒らの祈りをつなぐこの光は、決して何人をも傷つけはしない。何年も病床にあつたエルディスの臨終は凄まじい苦しみようであつたという。死は、やつと彼に与えられた安息であつたことだろう。

アズノエルは祭壇にもつとも近い席に着いている。あの儂げだった少女が、少し俯き加減ながらも毅然と立ち、事の成り行きをじつと見守つていた。今日だけは特別に許されているのか、ベルチエはアズノエルの隣に並び、両手を強く組み合わせて祈りを捧げていた。

身廊に落ちる陽光は虹色を帶びていた。高窓にはドートリッシュの紋章である獅子と薔薇を描いたステンドグラスがはめ込まれている。獅子も薔薇も、王家を凌駕する権力を失くしたこの一族には不釣り合いなものであったが、紋章を通して降り注ぐ光は、聖なる力を有する彼らに相応しい莊厳な輝きを放つていた。

葬儀の後、キャサリーゼはユリウスのもとに向かつた。ユリウスは先王とキャサリーゼの結婚式を、そして先王の葬儀を執り行つた司祭でもあり、王太后であるキャサリーゼはなにかと積もる話もあるのだろう。

その間、キイルは静まり返つた城内をうろついていた。柱廊の端まで進み、城壁の外を見下ろしたとき、ゆるやかな坂道を下つていく喪服の少女が目に留まつた。供の者もつけずに出歩くのが日常化

しているのだろうかと、キイルが様子をうかがっていると、アズノエルは外に停めてあつた簡素な馬車に乗り込んでいった。明らかにこの城の馬車ではなかつた。

キイルはアズノエルの後を追いかけようと城を抜け出した。

アズノエルの行き先におおよその見当はついていた。強い魔力の波動が放たれているという、エルド湖だろう。

厩舎で鞍と鐙あぶみのついた馬を一頭借り、城門を飛び出した。エルド湖までは大まかな方向しかわからないが、城から見下ろした先に見えた湖へと己の勘だけを頼りに馬で駆け抜けた。

道なりに進んでいつた丘の上から湖畔を望む。そこに黒い人影を見つけ、口元に小さな笑みが浮かんだ。

キイルは馬から降り、後ろ姿へ向かつて小走りに駆けていく。その途中、かすかな聲音が耳をかすめ、思わず足を止めた。

(歌……?)

水の入つたグラスを弾いたような、透き通つた声だつた。紡がれる言葉に耳を澄ませてみると、それがゴースティンのものではないことに気づく。おそらく、司祭たちが儀礼の際に使う「古代語」であろう。ドートリッシュ族の者たちは屋敷の中では「古代語」で会話をするのだと宫廷司祭より聞き及んだことがある。

突然、歌が止んだ。

キイルが息をひそめて様子をうかがつていると、眩い赤い光がアズノエルから放たれ、赤く染まりゆく天上へと一筋の光が駆け昇つていつた。

(あれは、炎の魔法　　)

キイルが一步足を進めようとすると、アズノエルが振り返つた。

その顔に涙の跡はない。

「意外だつたな」

さりに近づき、口の端を上げる。

「てっきり、泣いているのかと思つたが？」

「もう、充分泣いてしまつたから……」

か細い声でアズノエルは呟いた。

既にアディリート夫人も亡くなつてゐる。いくら權威ある一族の娘であつたとしても、両親の後ろ盾をなくせば苦労するのは目に見えてゐる。なにより、アルティスという閉ざされた世界の城で、一人で暮らす孤独はいかばかりであるうか。

「これからどうするつもりなんだ？　お前が次代の城主になるのか？」

アズノエルはベールをふわりと揺らすよつて身を翻す。

「クラウスお兄様がね、エクシユールのお屋敷で一緒に暮らさないかって言ってくださつているの」

「お前に兄などいたのか？」

「本当のお兄様ではないの。……叔母様の子供で、私より七つ年上で、とっても優しくて頼りになる方よ」

アズノエルの説明を聞くまでもなく、キイルはクラウスのことを

よく知つていた。

クラウス＝リーゲン・ティイラ・ドートリッシュ……。ドートリッシュ本家の嫡男で、彼もまた、ルドリア教会の司祭となつてゐる。加えて宫廷司祭でもあるクラウスは、王宮での公式礼拝を取りしきつており、キイルはほぼ毎日のようにその姿を目にしているのだ。

水鳥が音を立てて空へと飛び立つていった。西から広がりゆく赤は、空の青を徐々に橙へと染め上げていく。

「もう戻られたほうがいいわ。一緒に来られている方が心配なさるでしょ？」

アズノエルの気遣わしげな言葉に、キイルはつなづくことができなかつた。

少女のやつれた頬に茜が差していく。今にも崩れそうな微笑を向かへられると、とてもこのままここを立ち去る「とはできなかつた。思わずキイルは言に募る。

「また、会えないか……？」

髪を煽る風とともに沈黙が訪れたが、ややあつて、アズノエルは小さく首を傾げながら薄らと笑みを浮かべる。

「それじゃあ、次は王都で？」

「あ、そうか。そういうことになるんだな……」

キイルのたゞたゞしい返答が可笑しかつたのか、アズノエルはさらに笑みを深くする。

「ねえ、あなたの名前はなんておっしゃるの？」

キイルは瞬時に顔を強張らせた。言わないわけにはいかないと思いつつも、名を告げることを強くためらっていた。

オトウール王家とドートリッシュ家との何百年にもわたる確執……。アズノエルの直系の先祖であるエルジエ三世を討つた子孫がキイルであるのだ。

アズノエルの薄いベールが風に舞い、まっすぐにキイルを見つめる翡翠の瞳が露わになつた。

その瞳から目をそらすことができず、キイルはおもむろに口を開く。

「キイル……。キイル＝ヴィジエ・ディラ・オトウール……」

アズノエルのさつと顔が曇る。黒いベールが彼女の心を表すように揺れ、翻つては、再び白い肌に影を落とした。

「王子様、だつたのね」

アズノエルが悲しそうに微笑んだために、キイルは思わず彼女と同じような顔を作つてしまつていた。

いざれわからることだつた。オトウールの家名を名乗らずとも、キイルという名だけで、それが誰なのかわかる者は多い。その容貌にしても、赤い波状毛や細い鼻梁、厚めの下唇といったオトウール王家の特徴を濃く宿していて、見る者が見れば王家の成員だと一目でわかる。

手を強く握りしめると、人差し指にはめた大きな指輪が食い込み、指間に痛みが走つた。その指輪には、王家の紋章である鷲が彫られている。紋章を隠すように、親指で指輪のレリーフをなぞり、深くため息を吐く。

いつそ偽名でも名乗ればよかつたのだろうかと逡巡していると、

アズノエルがキイルのほうへ歩を進めてきた。

柔らかな微笑に包まれた顔に、さらさらと亞麻糸のような髪がかかる。それは光に透け、きらきらと輝いていた。

「エクシユール宮殿に行つたら、王子様にお会いできるのかしら？」

キイルの目が大きく見開き、何度も瞬きを繰り返した。拒絶されなかつたことで緊張が解け、硬い表情がゆるゆると緩んでいく。

「ああ、クラウスとともに来ればいい」

陽が落ち始め、白い丘は赤く染まっていく。

キイルはシユーゼランの花を一輪摘み取り、アズノエルの前に差し出した。

そつと、白い小さな手が伸ばされる。かすかに触れ合つたその指先に、再会の約束が立てられた。

ゴースティン王国には、奇妙な王室法がある。

それは、現王の嫡子以外が立太子される場合、『現王に長らく王子が誕生しないこと』という条件を満たさなければならぬというものである。この王室法ができたのは百五十年前のことだ、その経緯は、既に立太子されていた王弟と庶出の王子との間で王位継承について諍いが起きたことによる。

かの王室法に従い、王弟であるキイルは十八になろうとする今日まで筆頭王位継承権者でありながら正式に立太子されることがなかつた。これまで常に不安定な地位に立たされてきたキイルであるが、外戚であるハーシュリオン家の働きかけにより、近々正式に立太子されることが決まつていた。

キイル自身は王座に執着しているわけなく、むしろ、兄王の外戚であるギルベイド家に対抗しようとするハーシュリオンに心底辟易している面もあつた。なにより、身軽な今の生活が阻害されることを不愉快にすら感じていた。

そんなときキイルの耳に飛び込んできたのが、兄王の妻の一人が身籠つているという恒例の醜聞であった。またか、と呆れを通り越して、失笑が漏れるばかりである。

アルト＝ヴィジエ王は、自分の御世における妃の座はレイリアだけだと言わんばかりに、この十八年、周囲の者がどれほど勧めようとも新たな妃を持とうとしなかつた。その代わりに数多くの妻を抱え、その妻との間に生まれた私生児は既に三十を超えるとされる。妻の子らはそのすべてが女子であるが、仮に男子であつたとしても、

諸外国の王室と同様にゴースティン王家もまた庶子に王位継承権はない、王の妾遊びがキイルの地位に影響を及ぼすことはない。

それでもキイルは兄王の妾遊びの惨状に、軽蔑するどころか怒りすら抱くようにもなつて。優秀な閣僚たちが国政を支えているため、王が直接執政せずともさほど問題は生じない。しかし、妃との間に子をなすという王にしかできない責務まで放り投げられては堪らない。

レイリア妃のために貞節を誓つならば、頑なに妃を娶らない理由にも理解を示せたが、これでは亡き妃への裏切りもいいところだろう。それほど潔癖な質ではないキイルであつても、兄王の放蕩ぶりに苛立ちを募らせていく日々であつた。

「エイルバードのい人生だなんて、わたくし私、砂糖の入つてい砂糖菓子のようなものだと思つの」

手紙を読んでいたカレーナがいきなりそつ口にした。彼女の手にあるのは、ドレスの仕立ての合間に届けられた婚約者からの恋文である。

「聞いてらっしゃるの、キイル」

「ちゃんと聞いていい。砂糖の入つてい砂糖菓子なのだらう？」

キイルがきちんとそのままを復唱すると、カレーナは満足したよつに純白の便箋の上に口づけを落とした。キイルはそんなカレーナの姿を苦笑まじりに見つめ、ため息を呑み込んだ。

姪のカレーナが結婚することになった。相手は、グレンヴィル伯爵家の若き当主エイルバード＝リオンである。

カレーナは二十一となる年まで婚約もしておらず、王は娘に結婚させるつもりがないのかと多くの者が思っていたが、王はカレーナの恋愛結婚をあつさりと認めた。リリアーナ王女が隣国のリオールに嫁いで五年余り経つが、王はいまだに半月に一度の割合でリリアーナ宛ての私書を送っている。リオール宮廷において「ゴースティン王の親馬鹿ぶりが嘲弄の的になつてゐるのではないかと懸念されるほどである。

グレンヴィル家は王家に忠実で、大臣や高官、上級将校らを多数輩出している家柄である。外国の王妃となつたリリアーナとは違い、今後もカレーナは宮廷を出入りし、王と会う機会も多いことだろう。手元に置いておきたいという思いから王がエイルバードとの結婚を認めたとしたなら、それほど納得のいく理由もなかつた。

年上の姪を姉のように慕つていたキイルにとって、カレーナの幸せは喜ばしいことであつたが、一つ気がかりなことがある。

アズノエルはカレーナの友人として宮廷に招かれ、カレーナの開くサロンに出向いたり、小さな音楽祭に参加していた。アズノエルの奏でるハープや、透き通つた声で唄い上げるアリアに、宮廷の人たちは感嘆を漏らしたものだった。

次第に、アズノエルは宮廷に顔を出す機会が増えていったが、その時間の半分ほどは、表向きカレーナと過ごしていふことになつてゐる。つまり、キイルはカレーナにアズノエルとの逢瀬の手引きを頼んでいたのだ。

しかし今後はカレーナを口実に会うことが叶わなくなる。そもそも、昨今キイルが引き受けねばならない政務の数が膨大になつており、自由な時間を取りこと自体、難しくもなつてゐた。

扉が静かに開かれる。

入室してきたアズノエルは薄紅色のタフタ生地のドレスをまとい、長い髪は高く結われ、ゆるやかに巻かれていた。

カレーナは机上に広げられたいくつもの綿織物に手に取りながら、アズノエルに向けて顔を綻ばせる。

「アズノエル、あなたはどれがいいと思つて？」

「カレーナ様にはそちらの赤いものがお似合いですわ」

「でも、花嫁といったら白でしょ？」

「婚礼の後の祝賀パーティーでのドレスで『白』いましょう？　お式のときだけ白いものをお召しになられればよろしいのですわ」

「それもそうね。ねえ見て、このニードルレースはとても美しいでしょ？　この生地に合わせるのよ」

肘掛け椅子に腰かけていたキイルは、そんな二人の微笑ましいやり取りを、頬杖をついて見つめていた。

普段のカレーナは朗らかではあるが思慮深く、むやみにはしあぐ質ではないのだが、式が近いせいか、かつてないほどに浮かれている。そして我儘にもなっている。新たに誂えようとしているドレスにしても、祝賀パーティーで着るものの中の一つが気に入らないといきなり言い始め、急遽別のものを仕立てることになったのだ。小鳥のさえずりのような喧騒の中、キイルの視線は、自然とアズノエル一人に向かっていく……。

先日、キイルは王太后のご機嫌伺いのため、数か月ぶりにセヴァンス郡オファンを訪れた。これはもう十年以上にわたり続いている恒例行事で、年々勝手のきかなくなるキイルにとつて唯一許されている自由な時間であった。そして、先日のセヴァンス訪問にはまた別の目的があつた。

オファンで一夜を明かしたキイルは、ハーシェリオン家の者を言いくるめ、数人の従僕とともにアルティスへと発つた。アズノエルは頻繁に王都とセヴァンスを行き来しているが、ちょうど彼女が所用によりアルティス城に滞在していたためである。

『アルティスには、昔から花嫁にこの花を贈る風習があるそうだな』

木陰に腰を下ろしたキイルは、ふと思い出したように呟いた。

城の中庭にはシユーゼランが一面に植えられているが、夏はこの花の咲く季節ではないので、青々とした草が茂っているだけである。

『幼いころ、私はなにも知らずにお前にシユーゼランを贈ってしまつた……。だが、もうすぐ花が咲いたら、私は改めてこの花をお前に贈りたい』

王都北のセヴァンス……。お忍びの貴族たちが集うこの地で二人が出会つたのは、今から六年近く前。彼らが十一になるやならずのころだった。

二人の親交は王都に戻つてからも続き、キイルがアズノエルとの未来を考えるようになるのに数年とかからなかつた。もしかしたら、エルド湖畔で摘んだシユーゼランを手渡したあのとき、既にそう考えていたのかもしれないとキイルは思う。

陽は落ち始め、ちよづきの日と同じようにあたりを赤い光が広がつていた。

遠くの空を眺めていたキイルが視線を斜めにやると、アズノエルの穏やかな笑みがそこにあった。そのまま口づけを落とそうとすると、小さな赤い唇がゆつたりと動く。

『私は、殿下のお妃にはなれませんわ』

アズノエルの言葉を耳にしたとき、キイルの喉からは呆けたような声が漏れた。彼女の言葉を信じることができなかつた。これまで愛しているとも伴侶にしたいとも殊更に口に出したことはなかつたが、自分たちの気持ちは同じであると疑つたことはなかつた。

『お前は、私の気持ちがわかつてているものと思つていたが?』

『ええ。ですから、いつかはお別れせねばならないと思つておりました』

『ふざけるな』

キイルが鋭利な声を放つても、アズノエルは穏やかな表情を崩さない。

『なぜだ?』

『私は、ドートリッシュの娘ですから』

『王家に匹敵するような権威のある家の娘であつても、王族の妃に相応しくないと?』

かつて、ゴースティン王族と臣下の貴族との婚姻は貴賤結婚として認められない時期があつた。その当時であつても、ハーシェリオ

ンやギルベイドのような君主の家系や、実質的に臣下とは言いがた  
いドーリッシュ家は、その例外とされていた。

今ではそのような決まりは廃止されており、時代が下るごとに王  
子が国内の貴族の娘を娶ることも容易となり、王女の降嫁先の選定  
もかなり柔軟になっていた。

だからこそキイルは、アズノエルとの結婚に障害があるなどと考  
えたこともなかつたのだ。

『もし私が殿下のお妃に相応しい者ならば、周囲の者が私を妃候補  
に挙げていらっしゃるはず……。ですが、そのようなことは決して  
ありえないことだ』『わこましょつ？ 私などを妃になつても、殿  
下にとつて有益どころか不利益にしかならないではありますか』

アズノエルの声は重々しく、キイルの反論を制するような空気を  
孕んでいたが、彼女の言葉に強い反発を抱くのは止められなかつた。  
『にとつて最愛の者を娶ることのなにが不利益であるとこうのだ  
らうか。

キイルは思わずアズノエルを睨みつけていたが、アズノエルはそ  
の強い視線を受け流すように柔い笑みを零す。

『今、殿下にはいくつもの縁談がござこましょつ？ その方々があ  
なたに相応しい方ですか』

『では、お前の相手として許されるのは誰だつてのだ？ 同じ一  
族の者か？』

『たしかに、そうすることを望んでいる者もあります。ですが、私  
は誰とも結婚をするつもりはございませんから』

キイルを絶句させることを言つておきながら、アズノエル

は笑みを絶やさない。澄んだ声で思い出を紡ぐ。

『私、初めて殿下にお会いしたときのこと、よく思い出しますの。そしてエクシユール宮殿でお会いしたときのことも……』

王都に移り住んだアズノエルは、しばしばクラウスとともにエクシユール宮へと出向いてくるようになった。ある日、キイルが礼拝堂の前を通りかかった際、クラウスの傍らに彼女がいた。クラウスを介して紹介された少女は、キイルに向けて、初めてお目にかかります、と告げた。アズノエルの悪戯っぽい目が愛らしくて、思わず顔が綻んだ。

あのときのことはキイルも忘れてなどいない。

『初めてお会いしたときからずっと、私は殿下のことをお慕い申しております。ですが、結ばれることのない相手だとずっと言い聞かせてきたのです。心が期待してしまわないように、いつかあなたを諦められるようにと』

キイルはアズノエルの肩を抱いて強く引き寄せた。それ以上、痛々しい拒絶の言葉を聞きたくなかった……。

カレーナと談笑していたアズノエルは、キイルの視線に気づいたのか、そつと目を伏せた。

机上に整然と並べられた宝飾品が、午後の陽光によりさらなる輝きを放っている。カレーナは一つ一つを取り、鏡の前で耳や首元に当てては、アズノエルの意見を聞いていた。

キイルはおもむろに立ち上がり、はしゃぐ一人のほうへと歩みを

進める。そのままアズノエルをどこかへ連れ出し、曖昧な言葉の真意を聞き出したかった。

これまでキイルはアズノエルに狂おしいほどの恋情を覚えたことはない。心を共有し、共に在ることができればそれでよかつたのだ。それが叶わなくなると思つたことを境に、彼女への執着は一気に増したように思えた。

憮然としたまま近づくキイルに、アズノエルの驚いたように目を見開いたが、その視線もすぐにそらされる。かすかに苛立ちを覚えたキイルがアズノエルの腕を掴もうとしたまさにそのとき、再び部屋の扉が開かれた。

「楽しそうだな、カレーナ。廊下にまでお前の声が響いておったぞ」

「まあ、お父様つたら」

艶然とした笑みを湛えたアルト＝ヴィジュ王がカレーナに歩み寄つた。その後方には、純白の仕着せの王直属の侍従らが控えている。

兄王は、金糸の刺繡がふんだんに施された煌びやかな長上着（ジユストコール）と、それに揃いの中衣を身につけ、長身をさらに際立たせるため、踵の高い赤い靴を履いている。オトワール王家の象徴である波打つ赤い髪は、背のあたりまで長く伸ばされ、深苔色のリボンで結わえられていた。

王とはいえ、四十ともなれば落ち着いた装いをするものだが、兄王には老いによる衰えがまったく見られず、艶めいた色香をまとう壯年の男には、軽薄なほどの華やかな意匠がよく似合つた。

王とカレーナは、アズノエルを巻き込んで談笑を始める。すぐ

近くにいるキイルは三人の話に加わらず、募る苛立ちを噛みしめていた。そのとき、まだ開かれたままの扉から、キイルの秘書官であるロベルト・ネイゲルが入室してきた。

ロベルトは王に一礼した後、恭しくキイルの前で頭を下げる。

「キイル殿下、デデュー公が先日の閣議報告をなさりたいとのことでござります。どうぞ、アイオーン離宮へお戻りを……」

キイルは思わず顔をしかめた。

ミシェルには、カレーナのもとを訪れる際には最低でも一時間は声をかけるなど厳命していたのだ。だが、先日キイルがアルティスにお忍びで訪れていたために、処理せねばならない政務が平時よりも滞っているのは事実である。

なにより、この部屋にはカレーナだけではなく、兄王と王の侍従がひしめいているため、アズノエルと二人きりの時間など作りようもない。最近はいつもこうなのだ。アズノエルとの静かな逢瀬を望もうにも、キイルの周囲は騒がしくなるばかりである。

鬱積を抱えながら、キイルはカレーナの私室を後にした。

キイルが王都を離れていた間、定例の軍議が開かれていた。その議事録といくつかの報告書をロベルトより手渡されたキイルは、急ぎ田を通していく。

「また、シベリーの暴動が発生したのだな……」

キイルは忌々しいとばかりに報告書を机上に投げ置いた。シベリーというのはゴースティン王国の西に帶状に広がる国家で、大国ケーニヒスの属国もある。ケーニヒスはシベリーを対ゴースティン国境防衛軍として組織化しているため、ゴースティンとシベリーの間では争いが絶えない。ケーニヒスより精度の高い小銃や砲が巡回のようになつてからは年々やっかいな存在となつていて、キイルは苛立ちまじりに告げる。

「いっそ、奴らを潰すというのも手か？」

「ですが殿下、それではケーニヒスと戦争にならかねません」

「わかつてゐる」

国境守備を拡大すべきなのだろう。今しばらくはそれで手を打つしかない。

手つ取り早いのはシベリーの宗主国であるケーニヒスと同盟を結ぶことであるが、六十年前にゴースティンとケーニヒス間で起つた戦争以来、両国の関係は冷え切つており、同盟を望むことは難しい。ちょうどカレーナと年の釣り合つ王子がケーニヒスにはいるが、兄王はケーニヒスの王族になど決してカレーナを嫁がせはし

ない。兄王は国益よりも私欲を優先する人間なのである。キイルとしても、あれほど幸せそうにしているカレーナを政治の駒として使うことは抵抗があった。

ケーニヒスとの不和の根源にあるのは、不要の戦を仕掛けた三代前のルイス＝ヴィジエ王である。キイルは己の先祖ながらルイス王に恨み事を言ってやりたい気分であった。葬列に罵声を浴びせた民衆の気持ちもよくわかるというものだ。

なにやら視線を感じてキイルが顔を上げると、そこには心底嬉しそうにキイルを見つめるロベルトの顔があった。

「……どうしたのだ？」

「……よいよキイル殿下が王太子となられるのでござりますね。あのよつな王室法のために殿下がこれまで肩身の狭い思いをされていたのかと思つて、まったくもつて腹立たしいことでござります」

キイルは曖昧な相槌を打つた。

ハーシュリオン一門の者が、キイルを王座につけることをどれほど強く望んできたか、キイルは知らないわけではない。それを煩わしく思うこともあつたが、政務に闘わるようになるにつれて、それが自分に与えられた当然の義務であると受け入れるようになつていた。

私情で義務を投げ出すなど恥ずべきことと思いながらも、割り切れない想いが今の彼はある。

「ロベルト。もし私が王になどなりたくないと言えば、お前はビリする？」

薄茶の瞳を瞬かせたロベルトは、声を立てて笑い始めた。

「それは、一体なんの冗談でござりますか？」

まつたくもつて冗談にしか聞こえないことだらう。ロベルトはキイルが十歳のときに宛がわれた三つ年上の学友である。彼は王立学院の神童として名を馳せており、大学教授らの推薦により、大貴族の子弟たちとともに宮廷に召された。それほど良い家柄ではないものの、優れた知性と深い忠誠心を有しており、キイルにとつてはもっとも信頼のおける臣下であり友人でもあった。キイルはあえてロベルトに問う。

「ならば、私がただの王弟であれば、お前が私に仕える価値はないということか？」

「決してそのような……。私はただ殿下ほど」ースティンの王に相応しい方はいらっしゃらないと……！」

「もうよい、少しからかっただけだ」

長年の友人であるロベルトであつても、キイルの真意を図ることはできないのだ。すべてを話せば、この生真面目な男は呆れ返るに違ひない。

キイルが苦笑を漏らすと、ロベルトは怪訝に眉をひそめる。

「デデュー公は、殿下が正式にアルト＝ヴィジエ陛下の後継となるよう、準備を進められておいでなのでございましょう？　なにかご不満があありますのですか？」

「いや、それが不満というわけではなく……」

そのとき、扉の外からキイルを離宮に呼び戻した男の声が届いた。キイルが憮然としたまま入室許可を「与えると、ミシェルは柔軟な笑みを湛えたまま執務机の前まで歩み寄った。それと同時にロベルトが一礼をし、執務室を退室していった。

ミシェルは執務机の上に散らばつた報告書や議事録にちらりと目を落とし、キイルへにこやかに笑いかける。

「お待たせいたしました。軍事の話はそれまでにしていただいて、本題に入らせていただきます」

「また、あの話か。次から次へと、よくも飽きぬことだ」

キイルはミシェルに毒づきながらも、ため息を押し殺した。

ミシェルが机上に並べられていく資料は政務に関わるものではない。目をそむけたくなるような内容の請願書の束のほうがマシだと思える代物である。もつとも、じきにキイルへ与えられる地位を考慮すれば、まったく政務と無関係とすることができない。

異質な王室法はここでも影響を及ぼしていた。

一国の王太子ともなれば、ほんの子供のころに婚約者が決まり、婚姻が可能な年齢に達すればただちに式を挙げるのが通例である。しかし王太子ではないキイルには、幾人かの婚約者候補はいたものの、正式に定められることはなかった。

アルト＝ヴィジェ王が頑なに再婚を拒んでいるのは諸外国でも有名であるが、他国の外務官たちも、まさかそれが十八年も継続するとは思っていなかつたことだろう。少なくとも五年ほど前までは、コースティン宮廷においても王はいずれ再婚するものと思われていたのだ。国王の従弟であるダラス公アンジェなど、いまだ熱心に新たな妃候補を王に勧めているほどである。アンジェは、レイリア妃

の容貌の特徴を持つ者を選び抜いては、王に引き合わせている。そのようなことをしては逆効果ではないのかとキイルには思えるが、ギルベイド家当主たるアンジェには王の継嗣がなんとしてでも必要なのだ。

ギルベイド一門の者たちが王の再婚に熱心な姿勢を貫いている以上、キイルの妃となつても王太子妃となれない可能性が依然としてある。もちろんゴースティン王族に嫁ぐということだけでも大変な誉れであり、王家の傍系一族となることを考えれば、たとえ王弟妃であつてもその地位は外交上、魅力的に映ることだろう。

それでも他国が二の足を踏んでいたのは、かつてのゴースティン王族であるギルベイド家とハーシュリオン家の宮廷闘争に巻き込まれることを懸念しているためである。何十年にもわたり続いてきたこの争いが大使を通じて諸外国の宮廷にも知れ渡つており、キイルの妃候補については正式に立太子されるまでは静観するつもりのようだった。

しかしこの半年ほど、キイルの周囲はそれまでの静けさを覆すほどに騒がしい。

キイルが思案に耽つている間もミシヨルは延々と花嫁候補についての話を続けている。

「私としましては、ファジール大公女ルイーザ様が殿下のお相手には望ましいと考えております。ファジール大公はケーニヒス王女を母君に持つ由緒正しいお血筋……。あちらのご意向としましても、殿下ならば望むべくもないとのことでございました」

以前から幾度も耳にしてきた名前であったが、まったく覚える気にならない。贈られた肖像画を目にしたこともあつたが、興味の持てない人間の顔などすぐに忘れてしまう。キイルの頭を巡るのは、

いかに叔父の勧める縁談を回避するかといふことだけであった。

「ファジール大公の娘、か……」

ファジール大公国はケーニヒスの構成国であるが、その領土はケーニヒス全土の三分の一を占め、大公家はケーニヒス王家の傍系一族である。ケーニヒスには年の見合う王女は分家筋を含めてもおらず、国益を最優先に考えるのならばファジール大公の娘ほど次期ゴースティン王に相応しい相手はない。

国益につながる相手ならば、美醜も人柄も二の次となる。正しい血筋と国益がゴースティン王妃に求められている条件であり、ましてや愛や恋など歯牙にかける必要もないものである。

亡き妃を熱愛し続けた兄王の場合が異例であつただけだが、カレーナまでも臣下と恋愛結婚を果たそうとしている今、キイルには欲が出てしまう。

「気が進まんな」

「ですが、そろそろ真剣にお考えいただきませんと。再来月には十八歳におなりなのですから」

兄王がレイリア妃と結婚したのが十九のときであった。王族に限らず貴族男子の半数程度が二十歳前後で妻を娶る。ロベルトも一年前に結婚し、今では娘が一人いる。

王族である以上、私情を優先させることは許されないが、キイルはこれまで自らの責務を放棄したり、私情を押し通したことなどない。むしろ、兄王が王の責務を放り出しだがために、キイルは王弟として十代前半から政務を任せってきたのだ。それが王族として当然の役割であると甘受してきたが、ひたすら愛と欲望に生きようとした

する兄を前にすれば、自分の妻となる相手を選ぶ自由ぐらいは当然あつてしかるべきだと思つようになつていた。

「……叔父上、私には妃にしたいと考えている娘が既にいるのだ」

ミシェルは弾かれたようにキイルを見つめる。

「この国の貴族の娘だ。誰かはまだ言えぬが」

「それゆえに、どの縁談をお勧めしても難色を示されていたのですか……」

キイルは先ほどとは一転して、無邪気に笑つて見せる。

「そうこうことだ。だからあなたに協力を頼みたい」

「しかし殿下、相手が誰か言えぬというのは、貴族といえども著しく家格が低いといつことでしょつか？」

「いや、むしろ王家に匹敵する家柄だ」

「まさか、ギルベイド家の娘」

「それならば、叔父上には頼まぬ。直接ダラス公にでも話すぞ」

「……ドーリッシュュードがいますか？」

キイルが微笑を浮かべると、ミシェルの顔が曇る。

「そ、それは……ギルベイドの娘を王妃に望むよりも難しいかと

「なぜだ？ たかが侯爵家だらう？」

「たかが侯爵家などと… あの家には王家が与えた称号など意味がありません！」

ミシェルは声を荒げた。彼の言い放った言葉には、強い私情が込められているようにキイルには感じられた。

ギルベイド家とハーシュリオン家、この二つの家にはオトワール家がゴースティン王家となつて後、王より公爵位が叙爵されているが、オトワール家よりも長い歴史と伝統を持つがゆえに、王より与えられた称号になど意味はないと両家の者は考えている。王家に従順で野心などないように見えるミシェルですら、デデュー公爵の称号よりもハーシュリオン家当主としての地位に価値があると思つているのだ。

ミシェルは咳払いを一つし、努めて冷静な声でキイルに問い合わせる。

「クラウス殿の従妹、アズノエル姫でございましょう？ トキエルディス卿の、たつた一人の姫君……」

「ああ」

「せついえば、幼いころにセヴァンスでお会いになられておりましたね。殿下は姉上のところによく行かれておりますが、もしやそのときにも……」

「ああ、オフアンへ行くついでにアルティスにも滞在したことがあ

る。だが、王太子となれば、そのような自由はきかなくなるだらう？　だから彼女のこととを正式に公表したい。無論、私の妃として

ミシェルは額に手のひらを当て、渋面を作る。

「あの者は教皇の一族ではありませんか。それも、あのエルジエ三世の直系筋……。教会権力を抑え込むどころか、增長させかねません」

「協力はできぬと？」

「恐れながら、いかに身分が釣り合おうとも、国益につながるお相手ではございません。もちろん、殿下がアズノエル姫をそれほどまで愛しておいでなら、なにも今後一切会うなどまでは申しません。ただし、ルイーザ大公女と婚姻は結んでいただいた上でのことになりますが」

「なにが言いたい？」

「なにも妃とせざるともよこではありませんか」

「叔父上……。あなたは私に、兄上のように妻を持ってと詠つゝもりなのか？」

ミシェルは口を噤んだままであったが、決して否定はしなかつた。むしろ、子供の駄々に呆れているというような目をしていた。

「……下がれ」

ミシェルはそれ以上なにも言わず、一礼の後、身を翻した。退室

していくミシルの背に、キイルは鋭利な声を投げつける。

「テテュー公、ここでの話、決して他言はするな」

一人になったキイルは、唇を噛みながら自問を繰り返した。

それほどに難しい相手なのか。自分ががわかつていなかつたのか。少なくとも、アズノエルは諦めているようだつた。

ふと、初めてキイルが素姓を明かしたときのアズノエルの顔が思い出された。落胆したような、寂しげな微笑……。

初めてお会いしたときから、私は殿下のことをお慕い申しておつました。けれど、結ばれることのない相手だとずっと言い聞かせてきたのです。

子供のときと同じようなアズノエルの顔が過ぎり、キイルは机の上に無造作に置かれていた書類を強く握りしめていた。

## 焦燥（2）（後書き）

### 【補足説明】

キイルは王弟であるため、王太子ではなく王太弟と呼ぶのが正確だそうです。

（立太子という言葉も立太弟となるのでしょうか？）

ですが、混乱を避けるためにあえて“王太子”という言葉で統一しています。

“東宮”“ドーファン”“ツヨサレーヴィチ”のように推定相続人に共通する称号を作るという方法もありましたが、それはそれでややこしくなりそうなのでやめました。

以上承ください。

「これはキイル殿下……。どうされたのですか？」

ふらりと本宮の礼拝堂を訪れたキイルを、長い黒髪の司祭が出迎えた。

ロジュ・サルファ。ルドリア教会においてドートリッシュと双璧をなすとされるサルファ家の当主である。

かつてドートリッシュの当主が「教皇」とされていた時代、サルファの一族は「大司教」の地位にある者を数多く輩出し、教皇のもつとも忠実なる臣下でもあった。だからこそ、ゴースティン王はサルファ家にもドートリッシュ家に準じる特権の付与を許した。教会内においても、彼らは高位に就く者が多く、信徒からの畏敬を集めの一族である。

しかし今ではドートリッシュ家とサルファ家は不和であり、このロジュとクラウスの仲も芳しいものではないといふ。

キイルはロジュをちらと見やり、ため息まじりに呟く。

「ドートリッシュやサルファは特殊な一族なのであらうな。聖職者でありながら、妻帯も子をなすことも許されておるのだから」

「たしかに特権とも言えるものですが、それが許されているからには義務や枷もござります。王家も、私どもと同じであると存じますか？」

「それは嫌味か？ その義務を放棄し特権に溺れているのが、この国の王ではないか」

「なにを焦つておいでなのです？」

ロジーの穢やかな声が耳にまとわりついてくる。キイルはそれほど信心深いわけではないが、聖職者の持つ独特の空氣に呑み込まれそうになる自分に気づいた。

ふと、本音を漏らす。

「私は、王にならねばならぬのか……？」

「アルト＝ヴィジエ陛下に、王子がいらっしゃいませんので、現状ではキイル殿下に王位が渡ることになります。あの王室法に基づいて立太子される以上、たとえ陛下に王子がお生まれになるようなことがあっても、あなたの地位が揺らぐことはございません」

少々の慰めを期待しての問いかけだったが、ロジーはキイルに容赦なく現状を叩きつけた。

慰めなど期待するだけ無駄であつたと思い直し、身を翻そつとしたキイルに、ロジーは静かに問いかける。

「殿下はご存じですか？ かの王室法をギルベイド家の者が制定した経緯について……」

「そのぐらい知つてはいる。凶々しい妻が、正嫡の王子を排斥し、己の庶出の子を王太子に据えたからだろう

キイルが苦々しく吐き捨てるべ、ロジーは微笑を返す。

「今の状況は、そのときと似ておりますね」

「なんだと？」

「もし、アルト＝ヴィジ＝陛下に男子がお産まれになれば、殿下を取り巻く状況は変わるかもしないということです。それがたとえ妾の子であつたとしても……」

なるほど、と得心しながらも、キイルの胸の底からは暗い感情が沸き上がる。

「そのようなもの……奇跡、というよりも絶望に近いな。信じてみるだけ、強い落胆を味わうだけではないか。第一、そなたも知っているだろう？　兄上に女子しか生まれないのは、次から次へと捨てられていく妾たちの呪いであると噂されていることを。どうせ、今度生まれるという妾の子もまた女だろう」

「こずれにしても、あなたは王となるべきお方でござります。様々なことにお迷いになるのは結構です。しかしながら、最終的に選ばれる道は決して間違つてはなりません。……それは許されぬことです」

キイルは眉を寄せた。一体、誰がそれを許さぬというのだと、抑えがたい苛立ちに火が灯つた。

薄笑みを湛えたままの司祭に一瞥をくれ、キイルはそのまま礼拝堂を後にした。

かの王室法の一文が制定された経緯は、今から五代前の王の御世

に遡る。

オトワール朝第十一代国王リュシャールには他国から迎えた妃がいたが、十人生まれた子のうち九人は王女で、たった一人の王子も夭折していた。妃は度重なる出産により病がちとなつており、さらなる子は望めないことから、王の異母弟リュシャンが王太子とされていた。

そんな中、王は多くの妾をはべらせ、幾人かの私生児を儲けるに至つていた。特に、男子を産んでいたギルベイド分家の娘は、妾でありながらまるで妃のごとく振舞つていた。王は、妾とその子イーヴを王宮に住まわせ、周囲の反対を押し切つてイーヴを認知までしていた。妃が亡くなつてから、その妾はイーヴを王子として扱うよう周囲に強要するようにもなつていた。

その数年後に王は病で崩御したが、王が臨終の際にその妾を後添いとすることに決め、宫廷司祭の立会いのもと婚姻証明書にまで署名していた。それにより、その妾は過去に遡つて亡き王の妃となり、庶子イーヴには王子の身分が与えられることとなつた。

それでもなお、王弟リュシャンが王位に就くのが筋であったが、結果として王位が渡つたのは五歳にもならないイーヴで、リュシャンは立太子されていたにもかかわらず廃位された。

その背景にはいくつかの要因があつた。

まず、王弟の母后はケーニヒスに取り込まれた小国の王女で、ゴースティンと母后の祖国はケーニヒスとの絡みで関係が悪化していきことである。加えてリュシャンが病弱であることも相まって、彼の立場は非常に弱いものとなつていた。さらに、当時の閣僚や高官の多くがギルベイド家に連なる大貴族で占められ、一門の権勢はかつてないほどに強まつており、後ろ盾の弱い王弟を表立つて庇える者がいなかつたのだ。

とはいって、あまりに品位を欠くこの王位継承問題は、廷臣はおろか民の反発をも招いた。王の寵を笠に着て、好き勝手に振舞い、贅沢三昧を繰り返したその妾の評判もまた地に落ちていた。

それゆえ、ひとまず場を収めようとして制定されたのがあの王室法であった。

元より、王弟と第一王子の間で王位継承に関する諍いが起つりやすいという歴史もあり、“現王に長らく王子が誕生しない”限り、王弟を正式に王太子と扱うことはできなくなつた。そして、一度正式に立太子された王子は、後に上位の王位継承権が現れてもその地位は覆されないといつとも同時に規定された。

もつとも、道理を曲げてまで即位させられた幼王イーグはわずか十歳で崩御し、廢太子と呼ばれたリュシャンがその跡を継いで第十三代国王となつた。つまり、キイルには、ギルベイドの血脈は流れていらない。そして現在、あの王室法は、ギルベイド家の者たちの首を絞めることになつていた。

+

翌日、キイルは側近に依頼していた報告書に目を通していくが、読み終わるとともにその書類を机上に放つた。

ロジエ・サルファの言うように、たしかに状況は似ている。妾の子であつたとしても、その妾を兄王の妃にさえすれば、その子が自動的に王太子となるのだ。

しかしたつた一つだけ、まったく異なることがある。それは決定

的な差異であると言つてもいい。

王の妻アイリーン・オルストン。

兄王と接する機会があるということは、せめて高位の官職に就いている貴族の娘だろうとキイルは考えていたが、それはまったくの逆であった。

いかんせん家格が低すぎる。それは下級貴族の中につてもなお下位に当たるような家の娘であった。名を聞いたとき、すぐに気づくべきであったのだろう。キイルは、オルストンという家名を一度として耳にしたことはなかったのだから。

アルト＝ヴィジュ王は以前、とある男爵夫人を妻にしていた。アイリーン・オルストンとは、その男爵夫人の侍女で、兄は妻の侍女に手を出したということになる。改めて、兄の女性の好みの広範囲さには驚かされるばかりであった。

妻の地位が著しく低いことは問題である。これでは、たとえ男子が誕生したとしても、その母を新たな王妃に据えるという計画自体が成り立たなくなる。百五十年前の王太子廃位劇は、妾上がりの妃の生家がギルベイドであったからこそ為せた暴挙であるのだ。

ゴースティン王の妻となり肩身の狭い思いをした妃は多いが、それはあくまで国家間の軋轢によるものであり、家格の低さゆえに冷遇された妃などいない。もしアイリーンを妃にと望むのであれば、ダラス公を始めとしたギルベイド家の者たちに賭けるしかないということだ。ハーシュリオン家の流れを組む王など誕生させないとう彼らの執念に……。

だが、はたして彼らが動いてくれるだろうか。

(私の真意を明かした上で、協力を仰ぐといつのもひとつ手だ。  
いや、それでは不審感を煽るだけであろうか……)

そこまで思つて、キイルは馬鹿らしさとばかりに笑みを浮かべる。この十八年間、妾との間に男子が生まれたことはない。三十を超える私生児がいながら、ただの一度としてないのだ。

奇跡としか言いようのないものに縋るうとしている自分が滑稽でしかなかつた。

（いっそ、私が王であればよかつたのだ……）

先王であるキイルの父、ヴィクトルは、ケーニヒス王女を妃にと望む周囲の反対を押し切り、ギルベイド家の娘オヴェリアを妃に据えた。

キイルが王となつた暁に、父と同じよつて、アズノエルを妃に据えることもできくなはない。しかし、兄王は壮健そのものであり、キイルが王位に就くなど何十年先になるかわからない。それまで自身を貫き通すなど許されないだろつ。今でさえ、これほどせつつかれていのだ。

加えて、アズノエル自身が妃になることを拒否している。教皇一族としての生まれた柵しがいみは、目に見えない形で彼女を縛りつけているのだろう。

せめて彼女がクラウスの妹であれば、ミシヨルもあれほど強く反対しなかつただろう。ドートリッシュ本家の者は教皇の直系でないこともあり、王家に従順で、忠実な臣下であると言つても過言ではない。

そんな甲斐のないことばかりを願うにつれて、キイルは自身を愚かしく、情けなく思いもした。

（もう、なにもかも遅すぎるのではないのだろうか……）

キイルは投げ放つた報告書を手元に引き寄せる。口の中で兄王の

妾の名を弦き、ため息を吐きながら瞳を閉じた。

彼に残された道は、倦い希望に縋ることだけであった。  
神が、弱き者に与えたもう奇跡を信じて……。

「オフアンへ？」

請願書に田を通していたキイルは、ミシェルの満面の笑顔を見上げた。

「はい、王太后陛下の別邸にて大規模な夜会が開かれる」とになっているのですが、ぜひ、殿下にも出でていただきたいと思いまして」

ミシェルからの申し出は急なものであつたが、これは毎年のことと言つてもよかつた。しばし考え込んだものの、キイルは一つ返事で了承した。

アイリーン・オルストンの子が生まれるまで、協力者もいないキイルにはろくに行動を起こせない。しばらくは政務に没頭するほかは時間を有効に潰す方法がなかつたのだ。

キイルは羽ペンを取り、カレーニー宛ての手紙を書いた。カレーニーのもとを訪れているであろうアズノエルに、急遽セヴァンスへ行くことになつた旨を伝えるためである。数時間後に届いたアズノエルの返事は、近日中にアルティスへと向かうといつものであつた。

（一体、私たちはいつまでこのようなことを続けていくのだろうか）

今、アズノエルは王宮にいる。近くにいるといふに会いに行くこともできない。逢瀬を約束した場所は、王都から一日以上かかるア

ルティスだ。

家柄の良い女性ほど、未婚のうちは恋人を持つべきではないという考え方がこの国には根強い。キイルは自分たちの想いが後ろ暗いものであるような扱いをされることが気に入らず、アズノエルとの関係を正式に公表したいと考えている。しかし、今はまだそれは叶わない。

一つ折りの白いカードをじっと眺める。アズノエルが返信のために寄こしたカードには、簡潔な文面が流麗な文字で書かれていた。せめてささやかな愛の言葉が添えてあれば、キイルの気持ちも多少は変わったことだろう。しかしアズノエルは誰かの目に触れることを恐れてか、必要最低限の言葉しか文面に表さなかつた。

キイルは今、一日が過ぎるのを遅く感じながらも、一日が過ぎていくのを強く恐れている。アズノエルに会いたいだけ願い、手にしたカードへそっと口づけた。

+

セヴァンスは避暑地としてよく知られているが、中でもこのオファンは王太后が居住しているために、多くの宮廷貴族たちが集う社交場となっており、保養シーズンともなれば、毎晩の夜会が開かれている。それゆえ、王太后の暮らすこのオファンの別邸は、諸外国でも密かに有名であった。

夜会の始まる前、引き会わせたい者がいるとのことで、ミシェルはキイルを控えの間へと連れていった。その部屋の中央には、四十

代の中ほどに見える黒髪の男がいた。堂々とした体躯に青灰色の礼装をまとい、余裕のある笑みを湛えてキヤサリーゼと言葉を交わしている。

「ファルス伯爵、よくいらっしゃった」

「テテュー公爵、お会いするのは一年ぶりだな。お変わりなくて安心いたした」

ミシェルが親しげに話す男は、外国の伯爵のようだつた。ミシェルはキイルのほうへ手を指し示し、にこやかに紹介する。

「先王の第一王子、キイル＝ヴィジエ殿下にござります」

「おお、王太子殿下にお会いできるとは……。あなた様の肖像を幾度か拝見したことがござりますが、父君のヴィクトル陛下の若かりしお姿に生き映しであると思つておりました」

「伯爵は、父と面識がおありか？」

「ええ、先王陛下とはもう三十年も前になりますが、エクシユール宮殿にお目にかかることがござります」

オファンを訪れる貴族は国内外問わず名のある者たちばかりだが、キイルはファルスという名を耳にしたことはない。おそらくは偽名だろう。オファンでは高貴な者が身分を隠すために偽名を用いたり、<sup>かつら</sup>鬘で変装したりする例が珍しくないのだ。

その意味ではキイルも素性を隠してよかつたのだが、ここに集まる者たちは国内外の要人ばかりである。親交を築いておくためにわざわざ出向いたのだから、王族としての地位は最大限利用するに限

るだろ？。

そう思つていた矢先、キイルのほづへ歩み寄つてきたミシェルが  
ファルス伯爵の素姓を告げる。

「あの方の本当のお名前は、カール＝フイオラ・ディル・ザイード  
とおつしやるのです」

「あれが、ファジールのカール大公……！」

「お忍びで外遊しておられるのですよ」

ミシェルはキイルの耳元でそつ囁いた。

「叔父上……」

思わず、呆れ声がキイルから漏れた。妃候補に上がつていたルイ  
・ザ大公女の件が真つ先につながつたためである。

カール大公は先代ファジール大公とケーニヒス王女との間に生ま  
れた。ケーニヒスはゴースティンと違い、女系男子の王位継承権を  
認めていたため、カールは第二位のケーニヒス王位継承権を有して  
いる。

近年、ケーニヒス国内の不協和音は頻繁に耳にする。元々ファジ  
ール地方は独立した国家であり、ケーニヒスと同君連合が形成され  
て百数十年が経つ今でも、ファジールはケーニヒスからの独立を図  
つているというのが外交筋の見解である。この状況においてゴース  
ティンと堅密な関係を築こうとするのは当然であろう。

キヤサリーゼと談笑しているカール大公に視線を戻すと、それに  
気づいたカールはキイルに軽く目礼した。

一見、低頭に思えるものの野心に燃える男の瞳だった。それはミシェルとも通じるものがある。きっと彼らは、単に利害だけでなく、互いに通ずるものがあるからこそ親交が深いのだろう。

王となるうとなるまいと、キイルは国政を担う者として祖国の益について考えねばならない立場である。ミシェルはそれをわからせるために、キイルをここへ連れてきたのだろうか。

ここしばらくのキイルの振舞いは子供が自棄を起こしているように見え、それをミシェルは懸念していたのかもしれない。キイルは冷静を失いつつあった自分を恥じ、今夜は自ら引受けられた責務を果たそうと思った。

ハーリエリオン別邸での夜会は午後六時から始まつた。

キイルは事前に主要な招待客についてミシェルから聞き及んでいたが、ミシェルの口から、キイルが会いたくないと思っている人物の名は出てこなかつた。キイルはそれにより安心し切つており、顔なじみの招待客らに声をかけ、愛想を振りまいっていた。

そんな中、流麗な所作でお辞儀する女性にキイルは瞠目する。初めて会う人物であったが、それが誰なのかキイルは一目で気づくことができた。

その女性の身につけているドレスは、ケーニヒス流のものである。ゴースティン宮廷で見られるものとほぼ同じ作りであるものの、赤や黒、金といった重厚な色が多く使われており、フリルも少なく、堅苦しい印象を与える意匠である。ファジールはケーニヒスの影響が強いため、ほぼすべての文化がケーニヒスのもので揃えられているのだ。

「カール大公の娘、ルイーザにござります。以後、お見知りおきを」

ちらと見ただけの肖像画の中の少女が、鮮明によみがえってきたかのようであつた。

キイルは落胆から込み上げてくる乾いた笑いをなんとか呑み込む。

「……あなたは、偽名を使われぬのか？」

ルイーザは面食らつたように黒い瞳を瞬かせたが、すぐに艶然と笑む。

「ええ、偽名だなんてすぐにボロが出てしまいそうですもの。父のよつに上手く使い分けるだなんて、私には無理ですわ」

普通はそうだろう、とキイルは苦笑する。

ルイーザが来ていることをキイルが知れば、この夜会から逃げるとしてもミシェルは思ったのだろうか。そのようなことができるはずもないのだから、事前に知らせておいてくれればよいのにと、叔父を恨めしく思つた。

一人の会話が途切れたころ、楽団が新たな曲を奏で始める。王宮の夜会では必ずと言つていいほど演奏される定番のワルツだった。

「王太子様、一曲お相手いただけませんかしら？」

「ええ、もちろん」

誘いには素直に受けた。というよりも、通常、キイルから誘わなければならぬものであつた。ルイーザ大公女がこの夜会に出席しているのは、キイルと引き合わせるためのものだつたのだから。差し出されたルイーザの手を厳かに取り、キイルは中央へと進み

出た。

変に期待をされても困るが、かといって無下にあしらひ」となどできはしない。相手はファジールの大公女である。キイルは微笑を浮かべ、穏やかな口調で問う。

「ルイーザ殿、ゴースティンにお来しになるのは初めてでいらっしゃるのか?」

「ええ。父はある通りですけれど、私はファジールの領土内から出ることさえ今まで」「ござこませんでした。オファンは美しいといふですのね。貴族たちがお忍びで集つといふのもわかりますわ」

「たしかにオファンも美しいが、アルティスには叶わぬ」

「存じておりますわ。」ここに来る途中に立ち寄りましたの。特に、崖の上にそびえ立つあの白亜のお城の素晴らしいこと……。殿下はアルティスにはよく行かれますの?」

「そうだな。あそこは幼いころの思い出の地だ」

二人の婚約話が進んでいることを知っている招待客たちは、好奇に満ちた視線を向けてくる。曲が終わると同時に、キイルは周囲の目から逃れるようにルイーザを伴つてテラスへと出た。

手すりにもたれるキイルの背に、ルイーザのおもねるよつな声が届く。

「王太子様はいつまでここにいらっしゃるの?」

「今週中には王都へ戻るつもりだ」

「政務がお忙しくいらっしゃるのね。父が言つておりましたわ。キル殿下は政務のすべてを取り仕切つておられると」

「すべて、といふわけではないが、私にしかこなせぬ政務もある。それゆえに忙しいのだ。たとえば、私にとつてはこの夜会も政務の一部に過ぎぬ」

あなたもそうだろう、とキイルが笑いかけると、ルイーザは顔色を変えた。

「……ずいぶんと、冷たい」とおっしゃるのね

傷ついた、という風ではなく、どこか安堵したようにルイーザは呟いた。

泣かれでもすれば、言葉を取り繕いもしただろうが、そんなものは不要の気遣いだったようだ。あの父に、この娘あり、と言つたところだらう。ルイーザの立ち位置を知つたキイルは、清々しさを覚えた。

ルイーザは少し顎を上げてキイルを見る。

「私がオファンまで出向いてきたのはあなたにお会いするためですわ。けれど、あなたは私になど興味がおありではないようですね」

「どうやら、叔父があなたの父君になにか余計なことを言つたようだな」

ミシェルはこの夜会のために、お忍びの外遊を好むカール大公だけでなく、箱入りの大公女までを巻き込んだ。ここまでやるからに

は、ミーショルも相当焦っているところなのだ。それほどアズノエルのことが気に入らないのかと思つと、キイルの胸の奥にじわじわと苛立ちが湧き起つてくる。

「ルイーザ殿、あなたは「ロースティンの王妃になりたいのか？ それとも私の妻に？」

「その二つに違ひなどござりますの？ まさか、恋愛感情の有無だなんておっしゃるのかしら？」

「そうだと言えば？」

「あなたには王族である資格などないと思つだけですわ」

キイルは手すりから身を乗り出すようにして笑つた。先ほど感じた苛立ちもどこかに吹き飛んでいた。深い敬意と多くの称賛に包まれて育つたキイルには、姪の王女たちにでさえ、ここまで辛辣な物言いをされたことはなかつたのだ。

いつまでも笑い続けるキイルの様子に気を悪くしたのか、ルイーザは細い眉を吊り上げ、声をどがらせる。

「私は、今夜初めてあなたにお会いして、あなたのことは好きでも嫌いでもありません。ただ、結婚相手としては他の誰よりも魅力的だというだけです。……我がファジール大公国にとつてあなたほどの有益なお相手などおりませんから」

その反応に、キイルはますますルイーザを好ましく思つた。国家のための結婚に対し、ここまで割り切ることができる彼女が羨ましかつた。同時に、ルイーザの言つようによつて自分には王族たる資格も覚悟もないのだろうという氣になつていた。

「殿下には恋人がいらっしゃると伺つておりますわ。それが少々厄介なお相手であることも」

「ああ。私は彼女以外を妃に据えるつもりがないのだが、周囲の反対に遭い、困り果てている。ここ最近は、いつそ臣籍に下ることができればと願うばかりの日々なのだ」

「あなたは間違つておられますわ。王族といつものは、その生き死にすら個人のものではなく、ただ、国の繁栄のためだけに血肉を捧げるべき存在よ。それにもかかわらず、愛だの恋だのにかけて、義務を投げ出されるというの? もし王族同士の結婚にも恋愛感情を抱く必要があるというのならば、それは国益につながる相手との間に抱くべきものだと私は考えますわ」

「……残念だな」

怒りに燃えるルイーザの瞳を見つめ、キイルは苦笑を漏らす。

「私がもつと早くにあなたと出会つていれば、あなたを愛することができたかもしがね。あなたは、そのような感情など必要ないと考えているかもしがねが……」

身体を反転させ、手すりに背を預ける。

「さつきの質問だが、私の真意はこうだ。……私は王になるつもりはない。あなたが『ースティン王妃の地位をお望みなら、私との結婚は回避されたほうがよい』

「あの、おっしゃつてこる意味が……」

「私はまだ王太子ではない。あなたはそれを『存じか?』

ルイーザは弾かれたように田を見開く。

「ゴースティンには少々変わった王室法がある。それにより、王弟である私はまだ立太子されていない。私は宮廷において、“王太子”ではなく“筆頭王位繼承権者”という持つて回った呼び方をされている」

「ですが、それでもあなたが王位を継がれるのは確実ではないの? だって、先王陛下には他に王子がいらっしゃらないし、アルト＝ヴィジエ陛下にだって王女しかいらっしゃらないわ」

「ああ、もう少しで私が王太子となるのは確実になるだろ? 何事もなればな」

「な、なにをなさるおつもりなの?」

「まだなにもする気はない。今しばらくは信じてみるだけだ」

キイルは夏の星座が輝く夜空を見つめ、祈るよつて呟く。

「……奇跡を」

細い指に操られた炎が淡い輝きを放ち、夜空へと吸い込まれていく。

それは、柔らかな夢の心地に似ている。

「美しいな」

「えつ……？」

「お前の操る炎だ。私が火などを贊美する気になるのは、お前が生み出すものだからだろ？」

アズノエルは螺旋状に浮かび上がる炎を消し、はにかんだ笑みを見せて俯いた。その様子を、キイルは微笑ましげに見つめる。

「魔道の力は、神と人とのつなぐ精霊の力を借りしているもの……。ですから、あまり不用意に使つてはいけないです。もし、このようなところをクラウスお兄様に見られたら叱られてしましますわ」

一年前にドートリッシュ本家の当主の座に就いたクラウスは、現在ルドリア教会最高位の主教となつていて、彼は国王の信任厚く、若くして宮廷司祭長の地位にある。

キイルはエクシユール宮でクラウスと昔からよく顔を合わせるが、実直という言葉があれほど似合つはいないだろ？と思つていて。

少々堅苦しさを覚える男ではあるが、そういった生真面目さはアズノエルを思わせるもので、好意的に思っていた。

キイルは立ち上がりうとするアズノエルの手を掴み、いきおいよく引き寄せた。顎に指をかけ、素早く唇を合わせる。

「魔道の力を使っているところよりも、いじつしているところを見られるほうが叱られるのではないか？」

アズノエルの手がわずかにキイルの肩を押したが、彼女の形ばかりの抵抗にはもう慣れていた。儂い抵抗を、花弁を摘み取るように崩していく。

夜のアルティス城はあまりに静かだ。

アズノエルが王都へと移り住んでから、この城には必要最低限の使用者しか置かれていない。一人がいるテラスはアズノエルの私室につながっており、ここには許可なく誰も入ることはできない。

そのせいで、二人の逢瀬は日毎に大胆になっていく。それに伴い、彼らの間に漂う退廃の匂いは日々濃くなっていたが、墮落への道を留めているのはアズノエルの慎み深さのせいであった。

アズノエルは六年前にエクシユールの本邸で暮らすようになり、クラウスについて宮廷を出入りしているものの、なにも夜会や観劇にばかり興じているわけでもない。カレーナの誘いでサロンに入りするほかは宮廷に出向くこともほとんどなく、余暇はドートリッシュュの寄付により立てられた救貧院や病院を訪れ、病人の世話をしたり、子らに本を読み聞かせたりしている。頻繁にアルティスに来ている理由も同様であった。

「知っているか？ 兄上の妾がもうすぐ子を産むらしい」

ふいにキイルはそう切り出した。既にその話を聞き及んでいたためか、アズノエルは特に驚きはしなかった。

「どうせまた女だらうがな。妾との間に何十人もの子が生まれはしたが、そのすべてが女ばかり……。王位継承権を持たぬ男子が生まれたところで私にはなんの関係もないのだが、あまりに女ばかりが生まれるせいで、次々に捨てられていく妾の呪いだなどと言われている。実際、兄上の放蕩ぶりに神がお怒りなのやもしけぬ。……私も、の方には少々怒りを感じている」

ろくに神に敬意を払っていないくせにこのよつなことを口にする自分が可笑しくて、キイルからは自然と笑いが込み上げていった。それをアズノエルが咎める。

「陛下は慈悲深くお優しい方です。そのようなことを申されではいけませんわ」

「ああ、私にとつても良い兄だ。王でさえなれば、私はあの方に悪意を抱くことはなかつたであらうな。王には向かぬどご自分で言つておられたが、いつそ、楽師にでもなられればよいのだ。兄上もそのほうが本望だらう」

「よくベルージャを奏でていらつしゃいますね。私もいくつか楽器を嗜んでおりますが、あのような音は出せませんわ」

「なにを言つ。お前のハープは見事なものだ。多くの者が、あの音色に聴き惚れている」

キイルはアズノエルを腕の中に納めたまま、ぼんやりと夜空を見上げる。

彼の胸には不安ばかりが募っていた。もしかしたら、今こいつして彼女を抱いていることさえも夢幻ではないのかといつ正体の知れぬ恐れに……。

「……お前と暮らせればどうぞよこかとこつも思つ

腕に力を込め、アズノエルの耳元でさわやぐ。

「私が王となれば、この城に似せた新しい離宮を造ろう。庭園も、お前が気に入るようにならえよ。そうだな、エルド湖畔のシューゼランを庭に移植させようか」

腕の中のアズノエルはなにも言葉を返さない。身体を離し、キイルはアズノエルの顔をのぞき込んでみたが、瞳は固く閉じられていた。あのような戯言を口にしてみても、アズノエルを困らせるだけのことと、また、キイル自身も虚しさが募るばかりであった。

懇願するように問ひ。

「もし兄上に王子がおられれば、つまり、私が臣籍に下ることが容易であれば、私の妻になることを望んでくれたか？」

「……叶わぬ願いとわかつていても、やう望んでしまったと思います」

そう呟いたアズノエルは、キイルの服の袖をきゅっと握った。その仕草があまりに愛おしく、華奢な肩を掴む手に力がこもった。薄闇の中、キイルは密かに口角を上げる。

「ならば、私と賭けをしないか？」

キイルはアズノエルの手を取り、その滑らかな甲に唇を這わせる。

「もし、もうすぐ生まれる妾の子が男子なら、私はその子に王籍を与え、王太子とすべく尽力しよう。そうすれば私は臣籍に下り、お前を娶ることが」

キイルが言い終わるのを待たず、アズノエルは彼の手を強く放つた。

「そのようなお戯れを！ あなたはご自分の立場をわかつていらっしゃるのですか！」

キイルは低く笑いながら彼女の手を引き戻す。

「もし生まれたのが女なら、私には他に取りうる手がなくなるのだ。私は別に王になどなりたいわけではない。ましてや、お前を失つてまで得たい地位ではない。近ごろ周囲の者が妃を娶れと煩く責め立ててくる。私はお前以外を伴侶とする気はないといつのこと……」

現王の実弟と国内屈指の名家の娘……。その一つの肩書は決して不釣り合いなものではないはずなのだ。三百年近くも昔の禍根を引きずり、その子孫である者たちが引き裂かれねばならないなど馬鹿げている。

それゆえ、王妃でなければよいのだろうと、キイルはアズノエルに問い合わせたが、彼女の返事は色好いものではなかつた。

「そのようなもの、賭けでもなんでもありませんわ」

「私が次期王の地位にある限り、お前は私の妻にはなつてくれないのだろう？ だが、私はお前を妾などにする気はない。もしお前が

望むのならば、私は王族としての地位すら捨てる覚悟がある

「なんという馬鹿げたことを」

「馬鹿げているが不可能ではない。前例があるのだ。今から百五十  
年も前のことだが……」

キイルはアズノエルに奇妙な王室法が制定された経緯を話し、不  
敵に笑いかける。

「その妾が子を産むのは、ちょうど私が十八となる前なのだそうだ。  
なにやら運命めいたものを感じはせぬか？」

「キイル殿下……。私は、あなたに約束された輝かしい未来が失わ  
れることを望んでなどおりません」

「これはお前のためではなく、私自身のためなのだ。もし、妾の子  
が女であつたならば神に見放されたと思い、私は己の運命を受け入  
れよう。しかし、私の願いが聞き入れられたなら、神の与えられた  
奇跡と思い、私はお前を娶るために全力をつくそう」

怒りからか、恐れからか、アズノエルはわずかに震えていた。キ  
イルはその細い肩を抱き、込み上がるやるせなさを逃すように小さ  
く息を吐いた。

（どれほど愛の言葉を口にしようと、アズノエルにとつては愛の証  
明にならないのだろうか……）

キイルはアズノエルの耳の後ろに手を差し入れ、長い髪を後ろに  
梳き上げた。柔らかな長い髪を口元にやり、軽く口づけを落とす。

「少しは喜んでくれないか？ それほどまでに、私はお前を愛しているところ」となのだから

「私も殿下を愛しておりますわ。だからこそ、身を引かねばならぬのだと」

なにも言つなどばかりに、キイルはアズノエルの唇を塞ぐ。唇を開かせ、舌先で歯列をなぞり、柔らかな舌を絡め取る。甘い吐息が漏れると、キイルは細い腰に腕を回し、強く引き寄せた。もつと求めてくれればいいと思いつつも、アズノエルにそれを期待するのは無駄なことであつたと気づく。

深く絡み合つていた唇を離し、キイルは少し息の乱れた声でアズノエルに語りかける。

「レイリア妃が亡くなつてから一ヶ月あまり経つて私が生まれた。兄上は、自分の責務を放棄する言い訳を私の存在に求めたのだ」

「殿下もまた、その責務を投げ出し、別の者に背負わせるおつもりなのですか？」

「別にかまわぬだろ？ オルストン家は貴族と言えど平民と変わらないような家柄だ。そんな家に生まれた者が、ゴースティンにおける最大の栄誉を手に入れることができる。そのなにが

」

「誰もが栄誉をほしがるわけではございません。殿下のなさうつとしていることは、かつてアルト＝ヴィジエ陛下がなされたことと同じではありませんか。ご自分の責務を、生まれたばかりの御子に…。その御子が、いざれ殿下に同じことを思われるようになれば、どうなるのです」

「せうだな、お前の言ひことももつともだ。ならば私は、その子の補佐に心血を注げ。臣籍に下ろすとも、兄上のよつに政を棄てるよつな」とはせぬ。だから私を信じてくれ」

もつとも愛する者へ誠実であるつとするために、キイルは不実な言葉を口にする。

「お前を娶ることが叶わずとも、私は決して自分の隣に他の女を並ばせはせぬ。……なにがあるつて、私にはお前だけだ」

キイルはアズノエルを妾になどする気はない。それは嘘偽りのない彼の本音であったが、もし正式に立太子されれば、必ず妃を娶らねばならなくなる。その相手は、もうほぼ決まつたも同然だつた。

他の誰かを妃に迎えたキイルは、アズノエルを妾として手元に留め置くことになるのだつて。兄と同じような道を歩もうとしつつある自分に失望しつつも、もはや綺麗事だけで生きていいくつもりもなく、不実な言葉を口にしても良心の呵責など感じはしなかつた。

熱を分け合つよう指を絡め、己の中の眞実に忠実であるつと誓い、ひたすら彼女の愛をくつた。

+

かくして、獅子宮の日、二十三日。  
キイルの願望の一つは叶つた。  
アイリーン・オルストンは男児を出産した。



賭け（後書き）

【補足説明】

獅子宮の月＝八月

処女宮の月、二日。

キイルの成人の儀とともに、十八の生誕日を祝う夜会が開かれた。

ゴースティンにおいて貴族の成人年齢は男が十七、女が十五であるが、王族は男女ともに十八で、成人の儀の際に称号とともに王領の一部を王より賜る。王女も王子と同様であるが、成人前に嫁ぐ者が多いため称号と王領を賜ることは少なく、また、他家へ嫁ぐ際は王籍とともに一切を返上する必要があり、終生その称号が維持される例はほとんどない。

キイルに授けられた称号は“クラヴィー工公”で、これまで王弟の中でもつとも年長者に授けられることが多いものであった。クラヴィー工公を名乗った王族で王太子となつた者は幾人かいるが、あの王室法が制定されて後は一度もない。

「クラヴィー工公殿下、本田は真におめでとうございます」

ハーシェリオン一門の者たちがキイルの周りに群がり、次々に祝いの口上を述べた。

既に多くの公務や政務に携わってきたキイルは、今になつて成人扱いされようとなにかが変わるわけでもない。また、今日から呼ばれることになる称号にも特に関心は持てなかつた。

もしキイルがあの王室法に則つて立太子されるとすれば、その儀式はまた別のものであり、王太子となればクラヴィー工公という称号で呼ばれなくなるのだ。

現状からすれば、年内にキイルはアルト＝ヴィジエ王の後継として“王太子”となることが宣言されることになる。その際の式典や夜会には外国の要人も多く招待され、その規模も今回の比ではないだろう。

（問題は、いかにその日を先延ばしにできるかだな……）

キイルは控えめに広間を見渡し、用当ての人物を探した。アズノエルが夜会に出てくることは滅多にないが、今夜はクラウスとともにこの宴に参加している。

ドートリッシュの司祭は半分俗人のようなものであるため、クラウスはいつもの司祭服ではなく、長上着に中衣、脚衣といった宮廷服に身を包んでいる。

淡い色が良く似合うアズノエルは、藤色の絹縫子地のドレスをまとい、招待客の貴婦人らと微笑を交わしていた。

その近くの一際華やかな集団にはカレーナがいる。彼女は鮮やかな赤い髪が良く映える緑色のドレスを身につけ、夫であるエイルバードとともに取り巻きたちと談笑している。

半月前、カレーナとエイルバードの挙式がガルバンヌ大聖堂にて執り行われた。国内で王族の挙式が行われたのは先王と王太后キヤサリーゼ以来のことと、第二王女と伯爵の挙式としては非常に盛大なものとなつた。加えて、その祝賀パーティーが挙式から七日間にわたり王宮で開催されたが、それは親馬鹿と揶揄される王の計らいであった。

キイルの生誕祭であるこの夜会は、その祝賀パーティーの数日後に開催されたものである。上等な装いをした宮廷貴族たちの中には、連日の徹夜で疲れ切つた顔を、無理やり化粧で隠している者も珍しくなかつた。

突然、甲高い歓声が上がり、キイルはその方向に目を馳せる。

兄王が楽団に混じり、得意のベルージャを披露しようとしているところだった。王のこのような振舞いは今夜に限ったことではない。王がまだ王太子であった少年のころから、夜会において奔放な振舞いをすることが常であったという。

楽団の周囲には取り巻きの貴婦人たちが群がり、おもねるような視線を王に投げかけていた。一体、あの中の何人が王の妾であったのだろうかと、キイルは苦笑気味に見つめていた。

王が加わって新たな曲が演奏され始めたころ、キイルの傍に控えていたミシェルがその場を離れた。キイルが侍従から勧められたワイングラスを受け取り、それを口にしようとしたとき、ダラス公アンジェが恭しく姿を見せた。アンジェは柔らかさなど微塵も感じられない峻険な顔立ちをしており、王とよく似た色合いの青い瞳は、常に酷薄さを湛えている。

「ダラス公、そなたも私に祝いの言葉を述べに来たのか？」

「はい、本日は真におめでとうございます。……クラヴィー工公殿  
下」

アンジェの威圧的な声で新たな称号を呼ばれても、キイルは不快感を覚えるばかりであった。まるで、終生その名で呼ばれればよいと言いたげに思えた。

アンジェは先王の最初の妃オヴェリアの甥で、王とは従弟に当たる。年齢は王と三つほどしか違わず、幼いころから王と親しくしていたと聞くが、彼らが主従を越えた友人関係にあるなど誰も思っていない。アンジェにとつて王はもっとも有用な手駒にすぎないのだ。そんな心裡が彼の言動の端々からにじみ出ている。

「近ジョ、テデュー公は殿下のお妃選びに奔走されているようでございますね。なんでも、ファジールのルイーザ大公女で決まりそうだとか……」

「正式に決まったわけではない。ファジール大公女は単なる妃候補の一人だ。あちらはゴースティン王太子としての私に、娘を嫁がせたいとお考えのようだからな」

琥珀色の発泡ワインの入ったグラスを口に運びながら、キイルはそつけなく答えた。

キイルとアンジェは図らずも田舎を同じくしているが、互いにその手を取り合つことはありえない。キイルにとってアンジェとは、有能すぎるがゆえに動かすことのできない駒である。それを苦々しく思う気持ちはキイルの中にあつたが、考えるだけ無駄なことと早々に頭の中から追い出した。

広間の右手を見やつた後、キイルはアンジェに意味ありげな笑みを向ける。

「幼いころ、私はよく思つたものだ。あの、はねつかえりの姪が女王にでもなれば、さぞや面白いことになつたであらうとな」

他国においては、王女や女系王族にも王位繼承権を与えている例はある。ゴースティンも王室法を変更して女王を認めてしまえば、カレニーナが王位を継ぐことができた。

ハーシェリオン一門が閣僚や高官の座を独占しつつある昨今においても、アンジェは法務大臣の座に就いており、その役職に留まらない権勢を国政において誇つている。そんなアンジェの権力を最大限に活用すれば、キイルにとっての面白い事態は容易に達成されたことだらう。

エイルバードと腕を組むカレーナに皿をやつたアンジョは、探るような視線をキイルに返す。

「そういえば、殿下のお耳に入つておりますか？ アルト＝ヴィジエ王の妾が男子をお産みになられたとか」

「ああ、もちろん聞き及んでいる。これで妾の呪いなどないと証明されたわけだな。……さぞ、そなたにとつては無念であつたことだろう。もしさイリーン殿が妃であれば、ギルベイド家の流れを汲む王太子誕生となつたのだからな」

キイルが予想通り、アイリーン・オルストンの産んだ王の子について、宮廷において表立つて話題に上ることはなかつた。

カレーナの婚儀と祝賀パーティーの最中の出来事であつたため、華やかな話題のほうへ多くの者の目が向くのが当然である。そもそも、妾が王の子を産むなど王家にとつて醜聞でしかなく、王女の結婚という慶事の真つ只中にあえて出す話ではないのだ。

たとえ産まれたのが男子であろうとも、現段階ではただの私生児であり、オルストンのよつた下級貴族の者が王家に対し野心を抱くことも考えられない。実際のところ、王は妾との子を認知することなく、子らは一定の年齢に達すれば修道院に遣られている。先日生まれた子もいすれ同じ運命を辿ると思われている。だからミシェルもこの件に関しては歯牙にもかけていない。

「せうそ、かつてレイリア妃の死産なさつた御子は男子であつたとか。この度お産まれになつた御子には、兄上もなんらかの愛情をお示しになるやもしけぬな」

キイルが薄く笑むと、アンジョはわずかに眉を寄せた。それを見

咎めたキイルはさりに笑みを深く刻み、アンジェに背を向けた。

キイルの弁を、アンジェは嫌みだとでも思つてゐることだらう。所詮、この男に自分の胸の内などわかるはずがないとキイルは思つた。同時に、この世の誰にも理解できるはずがないのだと自嘲した。正嫡の王弟自ら、妾の子に王位を譲り渡そうと画策しているなど正氣の沙汰ではない。しかし、キイルにはそれ以外に有用な手が思いつかなかつたのだ。

胸をかきむしるような焦燥は、狂奔する恋情によるものか、それとも喪失への恐怖によるもののかわからない。ただ、一刻も早くこのような煩わしい感情から解放されたいと願つていた。

+

連日の夜会の幕は夜明けとともに下ろされ、その翌々日にはキイルの生活は依然と変わらぬものに戻つた。

午前十一時から数時間わたり外国の使臣らと引見を行い、午後三時からは定例の閣議に出席した。そして閣議終了後、キイルは王の私室へと向かつてゐる。閣議の内容を兄王に伝えるのは、五年前よりキイルの務めとなつてゐる。

王の私室のある回廊を曲がると、高く響く弦楽器の音色が聞こえた。兄王がいつものようにベルージャを奏でているのだろう。

政治に無関心である王は、楽器の演奏や観劇、茶会などに興じることで一日を過ごす。その甲斐あつてか、王のベルージャの腕前は卓越しており、一流の楽師と比べてもなんら遜色を取らないものと

なっていた。

それまで滑らかに奏でられていた弦の音が、時折途絶え始める。キイルは不審に思いながらも侍従の案内で奥の間にまで進んだ。長椅子に腰かけた兄王は、ベルージャを脇に抱え、羽ペンを手に取つた。円卓には五線譜が数枚散らばつており、今は練習をしていたわけではなく作曲をしていたのだと知る。

かまわず、キイルは兄王に呼びかける。

「兄上、午後の閣議決定の報告でござりますが……」

「ああ、そんなものはよい」

五線譜の上に滑らかに音符を描いていく。羽ペンを持つ手を止めることもなく、柔らかな声で答える。

「やのよのなものを報告されても、余には理解できぬのでな

キイルは畳然としたが、そんな呆れも次第に怒りへと変貌していく。

「それはつまり、今後も報告は不要であるといふことじょうか?」

明らかに非難の色を漂わせる声色であつたにもかかわらず、王はまるで気にかけることはなく、もう一度ベルージャを抱え直した。

ベルージャはファジールの西に位置するルザーリといつ國から一百年ほど前にゴースティンに持ち込まれた。六つの弦を持つこの楽器は、元はもっと低い音色であったが、ゴースティンに渡つてから何度も改良され、莊厳で高い音色を奏でるものとなつた。夜会だけでなく、教会堂における礼拝の際にも用いられる代表的な楽器である。

る。

ゆつたりとした旋律が室内に響き渡る。当然だが、キイルには聴いたことのない曲であった。演奏だけでなく作曲の才能もあるのだと思えるほど、心を癒してくれそうな纖細な旋律を王の指が弾き出している。

しかし、今このよつたな音色を聴いても、キイルの心はなぜか立つばかりである。そんなキイルの傷にさりに爪を立てるのは、兄王の無神経な言葉であった。

「余もそなたのように政治の才に恵まれておればな」

キイルは、手にしていた報告書の束を深い皺が寄るほど強く握りしめ、努めて冷静な声を返す。

「失礼ながら兄上、このよつたことは才能などといつものでないかと存じます」

「やつこつことを言つておるのではない」

兄王が軽薄な言葉を纺ぐことに、弾き出される音色が一層高く鳴る。

「人の上に立つ者の器量と言おつか……。ともかく余は、昔から王には向かぬと多くの者たちから言われてきたのだ。余のあまりの不甲斐なさに父上も困つておられてな、母上が亡くなられて十五年も経つてお前の母を後添いとしたのも、先を憂えるお気持ちがあつたからであろう。お前が生まれたとき、父上はたいそうお喜びであつた」

「でしたら、兄上も新たな妃を娶られてはいかがですか？」

思わず、キイルから冷やかな声が放たれた。王はそれに驚いたのか、ベルージヤを奏でる指を不自然に止めた。

兄に対し、ましてや王に對してならば、あまりに失礼な態度であつた。だというのに、王はキイルに向けてゆつたりと微笑んだ。そんな兄王のなよやかで優雅な眼差しは、キイルの苛立ちすら呑み込み、その心を酷く揺さぶつた。

悲しみと困惑を含んだ、慈愛に溢れてさえ見える青い瞳……。兄の秀麗な顔があまりにも優しい色合いを浮かべるとき、キイルはいたたまれなくなる。王であり、親ほど年の離れた兄でもある人物と対峙しているというのに、なぜ、無抵抗の人間を前にしているかのような気分にさせられるのか、と。

「余は、早くお前が王になればよいと思つている。ケーニヒス王のよつに、譲位ができればよいのだがな」

「国王の譲位が可能となるよう王室法を変えるように言つたところで、あの法務大臣は聞き入れそうにもありませんがね」

「仕方あるまい。アンジュは王家にとつて忠実な家臣ではないのだから。あれが余に仕えておるのも、ギルベイドの流れを汲む王であるからといつだけのこと。裏を返せば、お前に辛く当たるのも

「王太后を宮廷から追い出したのも、ハーシュリオン家出身の妃であつたからでしたね」

キイルはすぐなくそつ言い放つた。

父を論<sup>あげいふ</sup>うことに抵抗はあつたが、ギルベイドとハーシュリオンから妃を娶ることに同意したのは王として失策もいいところだと思つ

ていた。あの一つの権門は、王女の降嫁先にならばまだしも、妃を娶る家柄ではない。己の存在を否定することになるが、母キヤサリーゼとは子をなすべきではなかつた。既に結婚した王太子がいた以上、余計な火種を持ち込みかねなかつたのだから。

そして、もし自分がいなければ兄は王としての責務を放り出さなかつたのではないか、ともキイルは考えていた。

「王としての責務を果たされたいというのであれば、せめて兄上にしかできぬことに目を向けられてはどうでしょう？ いくら才能に恵まれていようと、芸術にばかり打ち込むなど、ゴースティン王のされることではありませんので」

兄王はその一言には堪えたようで、思案の末、重いため息を吐いた。

「新たな妃、か……。正直なところ、これまでまったく再婚を考えなかつたわけではないのだ。お前の立場を危うくするのではないかと思えば、一の足を踏んでしまつてな。そうだな、お前が正式に余の後継となつた後ならば、妃を娶ると約束しよう」

「まさか、兄上には誰かお心に決めた方がおられたのですか？」

弟への気遣いを放蕩生活の言い訳にされた気がして、キイルは少々気を悪くした。しかし、あれほど頑なに再婚を拒み、貴婦人たちを使い捨ててきた王に誰か想う人がいるということには驚きを隠せなかつた。

キイルの立太子後に、という条件は気に入らないものの、これはキイルにとって光明が差したかに思える流れであつた。しかるべき身分の女性ならば、下級貴族の妻を妃に据え、私生児を王太子にするよりもよほど正攻法である。廷臣らの余計な批判に晒されること

もないだろう。

「兄上、なぜそのことを言つてくださらなかつたのですか。そもそも、私にはそのような気遣いは無用です。私は、なにも王になりたかつたわけではないのですから……」

キイルがそう告げたとき、兄王は薄く笑つた。それは今までキイルが目にしたことのない、どこか冷やかを孕んでいるものだつた。

手駒（後書き）

【補足説明】

処女宮の月＝九月

キイルの生誕祝賀の宴より一週間、久々にエクシユール宮殿に伺候したアズノエルは、本宮の礼拝堂で静かに祈りを捧げていた。彼女にとつての祈りとは、なんらかの願いを捧げるという類のものではなく、ただ、気を落ち着かせるためのものにすぎない。それは子供のときから変わらない習慣のようなものである。

ここ最近、アズノエルの頭を支配していたのは、キイルにより持ちかけられた“賭け”のことであつた。

王の子が誕生して以来、つまり、あの一方的な賭けに負けてからというもの、アズノエルはキイルと二人きりで会つていない。カレーナの援護が期待できなくなつた以上、政務に忙しいキイルと会う機会などなかなか持てないが、今日こそ彼と話し合わねばならぬいと思い、王宮に出向いたのだ。もしキイルが本気ならば、アズノエルは彼の軽拳を止めねばならない。迷つていては手遅れになつてしまつ。

それにもかかわらず、アズノエルはキイルと会う気になれなかつた。心にもない別れの言葉をキイルの前で口にしなければならないと思うと、心が倦み果てていくようだつた。

後ろから近づく足音に、アズノエルははっと双眸を開く。

「なにをしているのだ？」

艶のある甘い声だつた。ゆっくりと身を翻したアズノエルの目に映るのは、長い波状毛をなびかせる壯年の男だつた。

「礼拝堂にいる者にかける言葉ではなかつたな。……実は、先ほどからずっとそなたの後ろ姿を眺めていた。ずいぶんと熱心に祈つていたようだが、なにか心の疼きを抱えているのか？」

「いえ。なんでもございません、陛下」

「そのように沈んだ顔を余の前で見せたことなどないだろう。その憂いを秘めた美しい顔……なにかに似てていると思えば、宗教画の天使のようではないか」

「そのようなこと……」

アズノエルが口ごもつたのは、同じ言葉をキイルからも言われたためである。

目を閉じて聞く王の声は、少しキイルを思わせるものがある。目を開けて見る王の風貌は、キイルの面影を偲ばせている。オトウル王家が五百年以上続く古い血筋であるがゆえに、髪や目の中だけなく細く高い鼻梁や下唇の形など、直系の人間は男女ともによく似ている。

王の中にキイルの姿を見出すかのように、アズノエルは呆けた目で一点を見つめていた。徐々に、その輪郭がぼやけていき、愛しい人の顔が浮かび上がる。それにより、アズノエルの中の疼痛は増していった。

アズノエルはその場に立ち尽くしていたが、王は一人の間の距離をつめていった。アズノエルの腰まで伸びた亞麻色の髪を指に絡めながら、耳元で囁く。

「アズノエルよ……。そなたの憂色を、余が取り除くことはできぬのだろうか？」

髪を絡めたままの王の指はアズノエルの肩に触れた。その手が次第に滑り落とされ、胸の膨らみをなぞり始める。アズノエルはとつさに身を引こうとしたが、わずかに眉を寄せる以外なにもできなかつた。王の囁いた声は、真綿で作られたこだわ束具のようだつた。柔らかで、滑らかで、それでいてわずかな動きすら戒めるかのように強く絡みついていく。

「余の妃レイリアは、物静かで控え目で、いつまでも向かい合い、語らつていていたいと思える娘であった。レイリアを亡くしてからの八年……その代わりをずっと求めてきたが、余の周りに群がつている者はいずれもその代わりにはならなかつた。あの者たちでは一時の慰めにはなるが、すぐに冴え冴えとした虚しさに襲われてしまつ。余は虚無が恐ろしいのだ……」

手は既に腰へと回り、強引に抱きすくめよつとする。

「余は、そなたを愛してもよいだらうか？」

アズノエルは呆然としていたが、唇を噛みしめ、王に非難の目を向けた。それは彼女にとつて精一杯の抗議を込めたものだつたが、なぜか王は微笑んだ。

柔和さに彩られた青い瞳は、多くの愛妾たちに向けられているものどれほども変わらないだらう。それに気づいた途端、アズノエルは王に対し激しい嫌悪を抱いた。その顔つきを、ほんの一瞬でもキイルになぞらえてしまつた自身に対しても同様だつた。

「……お放しください」

無駄だとわかつていながらも、そう言わずにいられなかつた。

予想に違わず、王はアズノエルの拒絶を意に介してなどいなかつた。必死に顔をそむけようとするアズノエルの後頭部を掴んだ王は、互いの鼻先が触れ合うまで顔を近づけた。

田の前にいるこの男は、見紛うことなく、愛しい恋人の姿ではない。なにもかもが違う別個の存在であり、触れられても恐怖と嫌悪しか感じない。

そんなアズノエルを嘲笑おうといふのが、重ねられた唇は幼子をあやすかのように優しいものだった。

「これまで余は望むもののすべてを手に入ってきた。だが、ただひとつ、失つたものだけは還つてこなかつた。ずっと、それを取り戻したいと考えていた。……もし、そなたが余の愛を受け入れてくれるのならば、失われたものがやつとこの手に」

王はその先の言葉を継ぐことができなかつた。

アズノエルが渾身の力を込めて王を突き飛ばしたのだ。彼女にとつて、それ以上は耐えられるものではなかつた。

一步身を引いた王は驚きで田を見開いていたが、それ以上にアズノエルは取り乱しており、早まりすぎた鼓動により田眩すら覚えていた。

「お許しを　！」

叫ぶように声を発すると、アズノエルは振り返ることなく礼拝堂を走り去つた。

高く響く足音が自分のものだと気づいたとき、王が追いかけこなかつたことを知つた。それでも彼女は走るのをやめられなかつた。

柱廊を駆け抜け、離宮の庭園にある噴水まで辿り着く。踵の高い靴を履いている上に、普段走り慣れていないため、疲れた脚が絡み、

柔らかな草地の上へと身体が投げ出された。

深く息を吐き、呼吸を整えながら、身体をゆっくりと起こす。がくがくと震える脚に力を込めて立ち上がり、噴水の縁に腰を下ろした。眩いほどに煌めく陽の光を浴びながら空を見つめていると、自身の惨めさが増していくようだった。頭上から降りかかる水飛沫は、薄らとにじみ始めた涙をほんの少しき消してくれた。

陽が徐々に雲の中へと隠れていき、毒々しい煌めきは消えていく。アズノエルの心は徐々に平静を取り戻しつつあつたが、それを裏切るかのように黒い影が忍び寄る。

はつと強張らせた顔を上げると、全身を白装束で包んだ国王の侍従数人が立ち並んでいた。先頭に立つ侍従は、まったく色を浮かべない表情のまま、静かに告げる。

「国王陛下がお待ちでござります」

アズノエルは胸の前で組んだ指に、強い祈りを込めた。

今の彼女には、ほんの少し先の未来を想像することさえできなかつた。ただ、真っ暗な闇の中に足を踏み入れていく以外、自分には道が残されていないのだと知つた。

+

無表情の侍従たちが、隙のない所作で長い回廊を突き進んでいく。彼らはアズノエルが再び逃げ出すことを案じているのか、前後左右

を取り囲んでいる。それは一見して異様な光景であったが、幸か不幸か、この回廊には滅多に人が通らない。

侍従たちの白一色の仕着せは聖職者を思わせるが、これほどまでに人間らしさを感じさせない姿は、まるで覆面を被った処刑人のようでもあった。

アズノエルを部屋の奥まで通すと、白い侍従たちは恭しく礼をして退室していく。

おそらく彼らはいつものように扉の前に立つたままでいるのだろう。礼拝堂でのときのように王を振り切って逃げることはできない。なにより、『一ステイン王からの呼び出しに応じながら、許可なく退室するなどできるはずもない。

アズノエルは扉のほうを恨めしくうががっていたが、全身にまとわりつくような甘い声が耳に届く。

「先ほどは驚かせてすまなかつたな。少し、一人で話をしたいと思つただけなのだ」

「私とお話し、ですか……？」

どれほど声を震わせないように努めて、アズノエルは自分の歯の根が合っていないかのように思えた。恐る恐る見上げた先には、とてつもないほどに優しい笑みを湛える男がいる。

「愛してもよいかと、お前に訊いただろ?」

王の酷薄な問いに、アズノエルの肩がびくりと揺れる。

「余は、もう誰かを愛することはないだろ?」と思つていた。それは

頑なな誓いであつたと言つたまづがよいだろつか……。新たな妃を求める周囲の言葉に耳を傾けてこなかつたのも、余がその者たちを愛す気がなかつたからだ。愛せもせぬ者を妃に据えたところで、不要な空虚が満ちていくに違ひないのでな

「なぜ、そのようなお話を私にされるのですか？」

アズノエルは、やつとの思いで言葉を返した。それは意味のない問いかけであつたが、その先に続く王の言葉を聞きたくなかったのだ。

「お前にだけは、他の妾のような扱いをしたくはないからだ」

王の青く澄んだ瞳が細められ、アズノエルの前に奇妙な暗さが降り落ちる。

「余は、お前が傍にいてくれて、他愛ない言葉を交わしていられるだけでよいと思っていたのだ。しかし、それは己の願望を必死に押し留めていただけだつたのだろう……」

王はおもむろにアズノエルの頬に手を伸ばし、横髪を滑らせるように触れた。

「お前の、髪や肌に触れたいと思つことさえ罪深いと感じていた」

王の腕がアズノエルの腰に回り、もう片方の手は耳や頬を緩く撫でる。

「よくよく思い起こしてみれば、余には望んで手に入らぬものなどないのだ。そのことに気づいたとき、ずっと心に落ちていた暗い影

が取り扱われていくなじみの心地がした。今はどこか晴れやかな気分だ

アズノエルはなにも言えず、ただ、身体を強張らせることしかできなかつた、王はその華奢な体躯を腕の中に抱え込む。

「わかつてゐるのだ。お前の心が余にあるはずはない。それでも愛することを止めることはできぬ。許してくれ……」

悲痛な謝罪を告げた王の唇がアズノエルに重なる。アズノエルは顔をそむけようとしたが、王の手がアズノエルの後頭部を強く掴み、彼女をぐいと手前へ引き寄せた。その衝撃で開いた唇の隙間へと柔らかな舌が差し込まれ、逃げる舌を執拗に絡み取つた。

鼓動が激しく打ちつけ、恐怖が全身を駆け巡る。

力が抜けていくアズノエルの身体は、長椅子の上に倒された。そのときやつと唇が離され、胸を安堵がかすめたのも束の間、すぐさま王の舌先がアズノエルの首筋を這い始めた。知らずのうちに捲れ上がつていたドレスの裾へ、王の手が忍び込んでくる。アズノエルは抗おうと王の腕に手をかけたが、その手首は容易く掴み取られ、長椅子の背に押しつけられた。

「つ……」

それほど痛みがあつたわけではないが、強い衝撃に思わず声が漏れた。

王の瞳が悲しげに瞬く。手首を掴んでいた手をすぐに離し、すまぬと耳元で囁くとともに、アズノエルの膝の裏に腕を回して一気に抱き上げた。

視界が急に高くなり、身体が不安定に浮かんだため、アズノエル

は王の腕にしがみついてしまった。裸足の爪先が王の歩調に合わせて揺れている。履いていた華奢な靴はどこかに脱げ落ちてしまっていた。

「降ろしてくださいませっ！ どうか、陛下 」

すぐにそこから逃れようと、アズノエルは身をよじらせた。王がどこに向かおうとしているのか、考えるまでもないことだった。寝台の天蓋は、大国の王者に相応しく絢爛とした金の装飾が施され、そこから垂らされた絹の帳は、濃い朱色にオトウール王家の鷲の紋章が金糸で刺繡されている。それを目にしたアズノエルはひゅつと息を呑んだ。高まりすぎた鼓動のせいで、呼吸が喉元で絡まつたのだ。

王は朱色の帳を強く払いのけ、アズノエルを抱えたまま寝台の中へと押し入った。

寝台の上に横たえられたアズノエルは、反射的に身体を起こしそうとしたが、王がその肩を掴んで敷布の上に柔らかく押し倒した。再び、口腔内を激しく弄られていく。

広い寝台の中には薔薇の香りが漂っていたが、アズノエルはその匂いをほとんど吸い込むことができなかつた。次第に、小さな唇の端からどちらのものとも知れない唾液が伝つていつたが、王はそれを舌で舐め取り、啄ばむような口づけを落とし、唇を軽く吸い上げた。その感触が、アズノエルの肌をざわりと粟立たせ、さらに震えを強くした。

それでも王は気に留めることはない。アズノエルの胸元のリボンを一気に解き、細かく留められている鈿<sup>ボタ</sup>を次々に外して、ドレスを脱がせていった。

王の手つきは決して乱暴なものではない。むしろアズノエルのほ

うが、相手が王であることを失念するほど混乱しており、力加減などしていない。だというのに王の腕の中から逃れることは叶わなかつた。

王の手が背に回るのがわかり、アズノエルは辛うじて自由になつて、いる片手で王の肩を強く押し上げた。どうかお放しください、と何度も叫んだ。その声には涙も混じつていた。

王はその小さな手を引き剥がし、指を絡めながら骨ばつた手の中に握り込む。

「すまぬが、止めるつもりはない」

突然、身体がふつと軽くなる。

アズノエルが驚きから目を開けると、コルセットの紐がゆるやかに解かれていた。紐の緩んだコルセットの釦は容易に外れ、アズノエルの胸からするりと剥がされていく。

露わになつた乳房に王の手が伸び、整えられた爪先が乳房の先端に触れ、間断なく刺激が与えられる。アズノエルは強く目を閉じてそれに耐えていたが、再び唇を吸われる感覺に、さらに身を固くした。愛撫に長けた手が胸や腰、内腿を這いざり回るように動いていつても、強張つた身体がそれに応えることはなかつた。

アズノエルは王の腕の中でなすがままにされたくはなかつたが、なりふり構わず抗い続けることもできなかつた。抵抗など、するだけ無駄だと彼女にはわかっていた。出口は塞がれ、どこにも逃げ場はない。王はアズノエルが望んでいないことをわかつていて行為に及んでいる。王にはアズノエルの心を考慮する余地はなく、またその必要もないのだ。

厚い帳に囲まれた寝台の中は薄闇に包まれている。

下肢にしどけなく絡みついていた薄いレースの下着がずり下ろさ

れていくと、柔らかな敷布の上に投げ出された、一糸まとわぬ白い肌が淡く浮かび上がった。

アズノエルは羞恥から手で必死に身体を隠そうとしたが、そんな初心な反応すら楽しむかのように、王は目を細めた。王の瞳は、一見いつもの穏やかさを宿していたが、獲物を捕食する猛禽類を思わせる鋭さが見え隠れしていた。彼もまた、黒鷲を紋章に戴くオトウール王家の人間であるのだと、貫かれるような視線に晒されながらアズノエルは思い知つていた。

柔い胸をなぞっていた手が徐々に内股へと伸び、その中心に触れる。アズノエルはとっさに膝を閉じようとしたが、王の身体がその間に押し入り、儂い抵抗を封じた。

両膝の裏を掴まれ、脚を大きく広げさせられる。

王はアズノエルの耳朵を舐め上げ、熱い吐息とともに甘い声を注ぐ。

「愛している……」

自身の姿を目に映したくなくて、アズノエルは固く瞳を閉じた。貫かれ、搖さぶられるたびに、悲鳴とも呻きともつかない声が喉から漏れだが、唇を噛みしめ、必死にそれを耐えた。涙が目尻から耳へと流れしていく。不規則に乱れる息が帳の内側に広がる。苦痛に喘ぐ肉体を捨て去りたいと願つうちに、アズノエルの意識は薄闇の中に溶けていった。

アイリーン・オルストンが男子を産んでから半月が過ぎた。カレーニナの婚儀や、キイルの生誕祭もつづがなく行われたことにより、宫廷は少々静かになっていた。これまでキイルはろくに身動きが取れなかつたが、手駒を動かし始めるにはちょうど良い頃合いであると考えていた。

「陛下、今なんと……」

キイルが王の私室へと足を踏み入れようとしたとき、クラウスの狼狽した声が届いた。クラウスはまだ二十代半ばながら非常に沈着で、権威に臆することもない人物である。そんな男がうろたえる姿など、なかなか見かけることはできない。

どうせまた兄が無理を言つているのだろうと、キイルは特に気に留める事もなく奥へと進んでいった。

「陛下、そればかりは私は同意しかねます。どうぞ、お考え直しを！」

クラウスの声はますます乱れた。

これまでクラウスは王の妾遊びについて節度と誠実さを持つよう何度も諫言してきた。王の周囲の人間にはそのようなことを口にする者はおらず、散々王の好きにさせている。だが、クラウスはその立場上、そしてその性格上、王の軽挙妄動を見過さすことができないでいたのだ。

キイルはくすりと笑いながら、一人の会話に割り込む。

「また新たな妾を抱えようともいうのですか、兄上。つい先日力レーナが結婚したばかりなのですから、少しお控えになられたほうがよろしいのです?」

「そう意地の悪いことを言つててくれるな、キイルよ」

“病的な女狂い”とも揶揄されるアルト＝ヴィジエ王であるが、実際のところ、王自身が望んで女たちを囲つていたことは少ない。大半の妾たちは出世を企む者たちにより送り込まれており、王は単なる礼儀のつもりで擦り寄つてくる女たちを手当たり次第抱いていたという側面もあった。しかし王は妾たちに無心されるがままに官位を与えることはせず、むしろそのようなことがあればすぐにその妾を打ち捨てていた。

だからこそ、これまでキイルは王の色事に一切口を出しきこなかつたのだ。

「まあ、兄上のお好きになされればよろしいでしょう。クラウス殿もそう曰くじらを立てずともよいのです? じのよつなこと、今に始まつたことではありますまい。……それよりも兄上、少々お話をじょうぞいます」

クラウスは王に一礼し、退室しようとしたが、キイルはそれを呼び止めた。

「この件は、ぜひクラウス殿にも聞いていただきたい

「一体どうしたというのだ?」

王は憮然としたまま、頭を抱えるような仕草で頬杖をついた。キイルはそんな王の近くへと微笑を湛えて歩み寄る。

「先日お生まれになつた兄上の御子の」とドレアが言つた。あの者に王籍を下さるはどつつかと私は考へてゐるのです」

「また、その話か」

「また、とは?」

「アンジェだ。アイリーンの子を正式に王家に迎え入れよと申してきおつた。……キイルよ、まさかお前までそのようなことを申すとはな」

既にアンジェの働きかけがあつたこと知り、キイルは無表情を装いながらも、あまりの抜け目のなさに感服していた。

王が新たに妃に迎えようとしていることをアンジェはまだ知らない。もしあの男がそれを知れば、キイルには思いもつかないような手段で強硬に事を推し進めてくれるに違ひない。キイルの立太子時期についても、大幅な猶予を求めてくるだろう。目的が一致している以上、キイルはこれまで毛嫌いしてきたあの男の執念を利用してやううと考へていた。

「キイルよ、先日も申したが、余はお前がゴースティン王となればよ」と考へてゐる。ようやくお前も成人したことであるし、一刻も早くお前を正式に余の後継としたい」

「私も先日、兄上にこう申し上げました。早く妃を娶られてはいかがか、と。そして、一刻も早く世継ぎを儲けていただきたい。これ以上、妾遊びなどなさるべきではありません。あれではレイリア様に対する冒瀧ではありませんか」

「お妻を引き合間に連れ、王は眉間の皺を深く刻む。

「しかし、お前が王位に就くことを望んでいる者は多い。お前も、これまで私の跡を継ぐべく心血を注いできたではないか？」

「兄上の跡を継ぐためではござりません。王族として、当然の役目を果たしていただけのことになります。それに、私が王位を継ぐことを望んでおらぬ者も、望む者と同程度にいるのですよ。兄上もご存知でしょ？」

キイルが事前に用意していた返答をすると、王はうなざつしたよう深深く息を吐いた。

キイルが王位に就くことにより、ギルベイド家とハーシュリオン家の対立が激化するのは避けられない。既に王家はハーシュリオン相手にろくに手を出せないでいる。特にキイルが実権を握るようになつてからは、ハーシュリオン出身の閣僚や軍幹部の数が数倍に膨れ上がつている状態なのだ。

もちろんキイルは、外戚の便宜を図ろうなど考えておらず、デデュー公を始めとした優秀な閣僚たちを優遇しているだけのことである。縁故による高官の登用がまかり通つているのは事実だが、無能な者に不相応な地位を与えることに同意した覚えもない。

ただし、これ以上ハーシュリオンの力が強くなることは、オトウール王家にとって弊害でしかないのも一つの側面としてある。ギルベイドもハーシュリオンも、オトウール王家にとつて忠実な家臣ではあり得ない。キイルが王族としての立場を優先するのなら、王位を辞退することでギルベイド家に恩を売つておき、自らが王の摂政として立つほうが全方面に対し納まりがつくと考えていた。

「外戚の駒となり、背後の力に突き動かされるなど、ゴースティンの王族としてあるべき姿ではございません。私はオトワール王家の一員として最良の道を熟慮した結果、私は兄上の御子を王太子とすべきであると考えているのです。もちろん、私はこれまで通り政務に携わり、兄上の摂政を務めるとしましょう。そのほうがギルベイド家、ハーシュリオン家双方ともにおとなしくなるのではないかと」

「……すまぬ、余が政治の才に恵まれなかつたばかりにお前には苦労ばかりをかける。だが、その話とはまた別だ。余には別に妃に迎えたい者があるのだ。クラウスよ、先ほどの話、やはり承服してはもらえぬか？」

そこでやつと、キイルは自らの思い違いに気づくに至つた。クラウスがあれほど反対するからには、兄王がまた妻をはぐらかすとしているのだと早合点していたのだ。

王がクラウスの許可を求めているのは、婚姻にあたつて富廷司祭長であり主教でもあるクラウスの執り成しが必要であると考えてのことなのだろう。しかし、これほどクラウスが反対するとなれば、また著しく家格の低い者であるのだろうか。もしそうならば、家柄に難があろうとも既に男子を産んだアイリーンを据えるほうがキイルにとつては好都合である。

「兄上が先日おっしゃつていた方のことでしょうか？ 身分の釣り合つ者ならば、アイリーン殿を差し置いて王妃となられてもかまわないと思いますが」

キイルの言葉に、クラウスの顔が強張る。キイルがその意味を知

るのではなくクラウスの言葉を待つた後のことであった。

「もちろん身分は申し分ない。ドートリッシュの娘なのだから。のう、クラウス、」

キイルから、すうっと血の気が引いていった。

恐る恐る王のほうを見やると、王は先ほどまでの不満顔から一転して、朗らかな顔をキイルへ向ける。

「クラウスの従妹のアズノエルだ。カレーナと親しくしておったゆえ、お前もよく知つておるう？ まるで天使のように慈愛に満ちた娘だ」

曖昧に言葉を濁したまま、キイルは俯いた。

なんとか平静であるうとしたが、身体はその意思に反した動きばかりを見せた。目線は波のように揺らめき、指先は小刻みに震えていた。

クラウスは焦りの色を強めながら、王へと必死に告げる。

「アズノエルはあまりに世間知らずで、王妃となるような器ではございません。どうかお考え直しください！」

その訴えを平然と黙殺し、王はキイルに問う。

「キイルよ、どう思つ？ お前はレイリアのことを知らぬだらうが、アズノエルはレイリアに少し似ておるのだ。顔立ちとくよりも顔つきといったほうがよいか……。とにかく、言葉を交わすだけで心の空白を埋めてくれるような心地がいたす。もう一年も前からずっと気にかけていたのだ。そうだな、もしかアズノエルが妃となるなら

ば、余は今後一切の妾を持たぬとそなたに誓つてもよい

クラウスもキイルも絶句した。移り気の激しい王の言葉とは思えぬものだった。

キイルは、兄が妾たちにレイリア妃の面影を求めていたことは知っていたが、まさかその丞先がアズノエルに向くとは思っていなかつた。キイルは亡き妃の肖像を何枚も目にしてきたが、あの黒髪碧眼の艶然とした美女とアズノエルが似ているなどと一度も思ったことはない。

クラウスは引きつった表情のまま、恐る恐る王に問いかける。

「あの、アズノエル本人は、なんと書いてあるのでしょうか？」

「まだ妃に望んでいることは告げていない。あれの性格では、そう簡単に応じてはくれぬだろうと思つてな……」

王は目を細め、クラウスに酷薄な視線を向ける。

「命令だ。アズノエルを説得してくれ。そして近いうちに余のもとへ連れて来るよ。……あれと言葉を交わしているときが、もつとも心が落ち着くのだ」

王の説得に敗北したキイルとクラウスは、揃つて王の部屋を退室した。一人はしばらく無言のまま回廊を歩いていたが、やがてクラウスが重い口を開く。

「陛下があれほど執着されるなどお珍しいことです。アズノエルがレイリア様に似ているとおっしゃつておられましたが、それほど似ておるのでしょうか……？」

少なくとも、あの一人の顔はまったく似ていない。これまでアンジェが王の前に連れてきた女たちの中には、はつとするほど似ている者もいたのだ。それに目もくれず、なぜアズノエルだというのだろうか。

たしかに王が語ったように、アズノエルは言葉を交わすだけで心が満たされていくような柔らかい空気を持つている。あれほど深い慈愛を見せる者をキイルは知らない。華美に過ぎる容貌とは不釣り合いなほど、兄王は柔弱な気質である。それを思えば、アズノエルに惹かれたとしても不自然ではなかつた。

「クラウス殿、まさか兄の申す通りにアズノエルを差し出されるおつもりなのか？　あのよつな横暴を甘受すると？」

「もちろん、多方面への影響を考えれば当家の娘と王族との婚姻など認めるべきではないでしょう。ですが、もはや我らは一貴族に過ぎませぬ。王命なれば、無碍にはねつけるわけにはいかぬというのが現状でして……」

王に理解を示すようなクラウスの言葉は、キイルにもどかしさを与えた。

クラウスはアズノエルのことをとても大事にしており、本来であれば、なんとか王の軽挙を止めようとするはずである。しかし王は一年以上もアズノエルのことを想い続けており、今後一切妾を持たない今まで言い放ったのだ。王があそこまで本気だと知った以上、クラウスの固い心が揺らぐのも無理はないのだろう。

自分自身への気休めのようこ、元通り、キイルは言葉を吐き捨てた。

「兄上はもう妾は持たぬと言つておられたが、そのようなもの、信ずるだけの価値はない。どうせ、またすぐに田移りされるに決まつている」

それを聞いたクラウスは、険しい顔を崩さぬまま、肩を落とす。

「キイル殿下にこのよつなことを申し上げるのは心苦しいのですが、我がドートリッシュ家は永く続く司祭の家系ゆえ、今さら王家の縁戚となりその命脈を保とうなどという考えはございません。逆に、我が家が王家と関わることで、昨今の教会内の勢力争いに影響を及ぼすことを懸念しておる次第です。そもそも、アズノエルはとても富廷で渡り合つていけるような気性は持ち合わせておりませんし、私はあの子を王家に嫁がせるべきではないと考えております。殿下、どうか陛下を」説得していただけないでしょつか……」

王家に嫁がせるべきではないというクラウスの言葉は、キイルの胸にずつしりと压しかかった。しかし、同時に、アズノエルがあれほど妃となることを拒んだ理由も理解できた。

クラウスはゴースティンの貴族としてではなく、ルドリア教会の

権力者としての立場を重視した結果、王家との密接な関わりを避けようと考えているのだろう。

教会の高位司祭らが王族や有力貴族と結びつきを持つことは、司祭の合議により運営されている教会の規律を乱しかねない。既に教会内には俗権力の介入による腐敗が起こっており、クラウスはそれを必死に糺さんとしている。そんな彼の事情をアズノエルもまた共有しているのだ。

「殿下も、この件には反対なのでござこましょう？ なんら国益につながらぬ妃など、ゴースティン王に相応しくないと思われるのは当然でござります。家格に問題があろうとも、王の子をお産みになつたアイリーン殿のほうが良いと思われるのは当然のこと……。なにより、王家が教皇一族とつながりを持つことを不快に思われるのは当然ですし」

「別にそのようなことが不快なわけではない。ドートリッシュュの人間こそ、オトウール王家を憎んでいるのではないか？」

「たしかに、分家の者の中には、王家を快く思つておらぬ者もござります。ただ、『狂王』と揶揄された教皇エルジエ三世については国王軍が討たずとも、別の誰かが討つたであろうとも言われております。晩年精神を害し、悪魔的儀式に手を染め、一部の司教らと麻薬に溺れてすらいたと云々聞くほど……。ですから、王家を恨むようなことはいたしておつません」

「クラウス殿の考えはよくわかつた。いずれにせよ、これ以上兄上の勝手を許せば、廷臣はおろか民の不満も募る一方であろう。アイリーン殿を妃にするほうが王家にとつて好都合なのだ。私に力になれることならばなんでもいたそう

「そのようにお心を碎いていただき、感謝の言葉も「やれこません」

「感謝など必要ない。貴公はいつも兄に親身に接しておられるところの」と、いのうなことになってしまったすまないと思つてこる」

キイルは自分の発する言葉のひとつひとつがあまりに空々しいと感じていた。

これは兄王のためでも、クラウスのためでも、アズノエルのためでもない。ただ、ひたすら自身のためであつた。

「どうして、アズノエルは今どうしているのだ？」こに最近、王宮で姿を見かけぬが

カレーナは、降嫁した後も夫とともに宮廷への出入りはしている。その際にアズノエルを伴つてきてほしいとキイルはカレーナにそれとなく伝えていた。しかし、それが果たされたことは一度もない。

「ずっと屋敷に引きこもつておるのです。少々体調を崩しておるせいか、沈みがちで……。どことなく王宮に出向くことを避けているようにも見えましたが、まさかこんなことになつては……」

「兄上が妃に望んでいると、アズノエルは知つてはいるのか？」

「陛下の話を聞く限りにおいては、まだ知らぬという」とでしたが、陛下のお気持ちは知つておるのでしょ。説得を、と陛下が言われる以上、真に失礼ながら嫌がつておるとこつ」とドジョウ

つまり、アズノエルは兄王の想いを知つており、王からの寵愛を受けることを避けるべく、王宮に出てきていないので。

「一体、あの一人の間にどのような接点があったといったのだろうか。先ほどの兄の様子を思い出すたび、キイルの心は激しくざわついていく。

「まあ、それは当然の反応だな。百を超える妾を持つと言われる王に求婚されて喜べるのは、財と権力にしか興味のない者であつて、まともな娘なら王命であろうと拒むに違いない」

「陛下は、今後一切の妾は持たぬと言わされておりましたが……」

「あのような戯言を信じられるなど、宮廷にはあなたほど人の良い御仁はおらぬだらうな」

キイルは表面こそ余裕を保っていたが、募る焦りを抑えられないでいた。

キイルにはクラウスしか頼りになる者はいないといつてのうて、クラウスがこのように及び腰になつていては王の説得が難しくなる。ギルベイド家にしても、下級貴族の妾の子を王太子に据える労力を考えれば、ドートリッシュの娘を王妃に据え、王子誕生を待つほうを選ぶだらう。

いくら考えてみても、キイルには良策が浮かばなかつた。

その翌日、王がアズノエル・ドートリッシュを妃に望んでいると

、いつ噂が王宮を駆け巡つていた。

十八年もの間、妃を娶ろうとしなかつた王がドートリッシュの娘を妃に望んでいる……。宫廷はこの話題で持ちきりとなつていた。ほんの数日前まで、廷臣たちはアルト＝ヴィジエ王になんの期待もかけていなかつた。キイルが成人を迎へ、正式に立太子されようとしている今、これまでの曖昧な立場に白黒をつけようとする者が増えていた。すなわち、口和見的な貴族の多数が、ギルベイド家よりもハーシュリオン家にこいつとしていたところだつたのだ。王の再婚問題は、それを一変させるには充分であった。

「あの者たちは私の心情をどのように理解しておるのだろうな？ 決して、わからぬはずがないだろ。叔父上、あなたはどう理解している？」

キイルはなんとか怒りを抑えていたが、あたりには張りつめた空気が漂つた。

「国益につながらぬ相手ではなかつたのか？」

執務机の正面に立つテュードヨー公ミシェルは、ためらいがちに口を開く。

「しかし、王が望まれているとなれば」

「私がどれほど望んでも叶えられぬものであつても、王でありますれば、さしたる問題ではないらしいな」

「殿下、どうかお静まりを……」

「私は極めて冷静だが?」

キイルの半ば自棄を起したような返答に、ミシールは嘆息しつつも、嫌みなほど冷静な声で言い募る。

「それでは、このように失礼かと存じますが、ルイーザ大公女とのご結婚、真剣にお考えいただけませんか?」

「本当に、このよつなどきにだな」

キイルは荒々しく椅子の背にもたれかかり、肘掛けを強く握りしめた。

「……不愉快だ」

部屋の外が騒がしくなり、なにか言い争つような声が聞こえたと思つたら、突然扉がいきおいよく開いた。

鮮やかな青緑色のドレスを翻すカレーニーナが、キイルの執務室に飛び込んできた。白い頬は興奮から紅潮し、息も乱れている。父親とよく似た端麗な顔を硬く強張らせ、キイルをきつと睨んだ。

「どうした、カレーニーナ」

「あなた、よくも落ち着いていられるものね。これは一体どういうことなのー。どうしてお父様がアズノエルを妃にだなんて……」

「そんなに理由を知りたければ、直接、父君のところへ行つてお訊ねしてきたりどうだ? 私にも、なにがどうなつているのかわから

ない」

キイルは冷たく言い捨てた。怒るカレーナを前にしていふと、キイルの昂ぶつた感情は急速に萎えていった。

顔色一つ変えないキイルの態度に、カレーナはますます苛立ち、細い眉をさらに吊り上げる。

「あなたはこれまでお父様の妾遊びについて一切口を出されませんでしたけど、今度のことにも口を出すつもりはないとなつしゃるの？」

「今度のことは妾遊びではないのでな。ゆえに私には口が出せない。それぐらいわかれ」

「ですけど、ほり……。教皇一族の娘を王妃にするのは好ましくないとか、説得を……」

「そして、私の妻とするにも不都合になるといつわけだな。そのようなことを言つたところで、自分自身の首を絞めるだけのことだ」

悄然とするカレーナを前にして、キイルの萎えた怒りは自己嫌悪となつて自身の前に降り積もつていつた。両手の指を組み合わせ、その間に額を押しつける。

「……すまない。今、ずいぶんと気が立つていい」

「ええ、そのようね」

カレーナは呆れと安堵の入りまじった声で応えた。彼女はいつも平静さを取り戻しつつあったが、キイルの心は荒れたままで、

屈ぐ気配もなかつた。

「とりあえず、私、お父様とお話ししてくるわ」

「なにを話す氣だ？」

「アズノエルのことを諦めてくださいよ、お願い申し上げてくるのよ」

「やめる、そんなことしても無駄だ」

「そうでござります、カレーナ様。そもそも、アズノエル嬢と殿下が特別な関係にあることが知られてもすれば、大変なことになります」

控えていたミシェルが、やつと口を挟んだ。その言葉を受けて、キイルは強い後悔を噛みしめることとなつた。

昨日、なぜ兄王の目の前でアズノエルは長年の恋人で、彼女を愛し、その生涯をともに生きるのは自分なのだと、宣言できなかつたのだろうか。王がアズノエルを妃に望んでいることがこれほど広まつてしまつた後では、名乗りを上げることはできない。互いの立場を考慮し、懸命に秘匿し続けてきたツケが、今、最悪の形で回つてきついていた。

「殿下、そろそろ閣議の時刻でござりますので……」

机上的一点を睨みつけていたキイルは、ミシェルに促されて席を立つた。物言いたげに見上げるカレーナに、顔をそむけながらため息まじりに告げる。

「……兄上に余計なことは言つな」

+

本宮二階に設けられた閣議室は、全体として焦げ茶を基調とした、落ち着いた小部屋である。中央の会議机には、青灰色の絹地に金糸の織り込まれたクロスが掛けられており、それが室内に唯一の華を添えている。王の趣味により年々華美になりゆく本宮であるが、この閣議室が依然として清貧さを保つてはいるのは、王の興味がこの部屋に向けられることがないためであつた。

本日の議題はいくつもあるが、採決に緊急を要するものではない。そのため、キイルが予測していた通り、王の再婚話が最重要案件として扱われている。それと並行して議論されているのがキイルの立太子問題だが、この場の主導権を握るのは、法務大臣で王の従弟であるダラス公アンジェである。

「王室法」十五条一項の“現王に長らく王子が誕生しないこと”という文言についてだが、その期間について明記がされているわけではない。キイル殿下が王族としての成人年齢である十八におなりであつても、ただちに立太子せねばならないということではない

「ダラス公、そなたは恥を恥とも思わぬのか……！　あの王室法を制定したのはそなたの先祖ではないか！」

アンジェのあまりに身勝手な弁に呆気に取られていたミシェルであつたが、気を取り直したように声を荒げた。ミシェルが激昂する

と、アンジェはゆつたりと含み笑いを漏らす。

「そもそも、アルト＝ヴィジェ陛下には王位に就かれて以後、妃がおられなかつたのだ。王子が長らく誕生しなかつたのは当然ではないか？ 現状をあの法に当てはめるのは、いささか無理があると私は考えていたのが……。どうやら、デテュー公は一刻も早いキイル殿下の立太子を期待されておつたゆえ、少々先走り過ぎておられたようだ」

ミシェルは珍しく顔を朱に染めていた。アンジェは愉悦の視線をミシェルに向け、自らの正当性を殊更に主張し始める。

「ゴースティン王国において、女子及び女系王族に王位繼承権を与えておらぬのは、他国の王族による王位繼承を主張されることを防ぐためのものである。また、王の終身制を設けているのは、王位の篡奪を防ぎ、王権を安定させるためのものに他ならない。アルト＝ヴィジェ陛下がご壮健であられる今、原則を捻じ曲げてまで嫡子以外の者を後継に指定せねばならぬ必然性はないと私は考えている」

キイルは口を挟むことはなく、じつと成り行きを見つめていた。アンジェのあまりの面の皮の厚さに、怒りも呆れも通り越し、尊敬すら覚えていた。

強かで逞しい。じつと機会をうかがうことができる辛抱強さ。その機会を逃さない眼力。正攻法を用いるほうが間違つているのではないかという気にさせる。さすがは、かつてのゴースティン王家の流れを汲むだけのことはある。

キイルはハーシュリオンの権勢がこれ以上強まるることは王家のためにならぬと考えていたが、ギルベイド家に介入させる危険はハーシュリオンの非ではなかつたことに、今さらながら気づくに至つた。

アルト＝ヴィジエ王がこのギルベイド一族の血を濃く引く者であることを、キイルはしおりちゅつ忘れてしまつ。キイルの記憶の中に、アンジェを思われるような兄の姿はない。ただ快樂に興じるしか能のない、王と呼ぶに値しない存在であると思つてきた。

しかし、兄もまたギルベイドの血族であり、それ以上にゴースティンの王でもあつたのだ。

クラウスに命を下したときに見せた瞳の奥にのぞかせた冷たい光……。

今までの柔弱で軽薄な姿は、周囲を欺くための擬態だったのではないのかとさえキイルには思えた。それと同じものをクラウスも感じたのだろう。だからクラウスはあれほどに弱腰になつたのだ。

閣議は、一時間もしないうちに閉幕した。議題への決着がついたわけではない。アンジェは閣僚たちの反対を覆すことはできず、膠着状態に陥つたというだけのことである。それにもかかわらず、アンジェにはいさかの焦りも見られなかつた。

アンジェは悠然と立ち上がり、退室しようとしたところ、扉の前にはカレーナの姿があつた。

降嫁したとはいえ、ほんの少し前まで王女であつたカレーナへの敬意が失われることはない。アンジェは恭しく頭を下げ、カレーナが言葉をかけるのを待つた。

「アンジェ、ずいぶんと嬉しそうね」

「これはカレーナ様。グレンヴィル伯爵とはお幸せそつでなによりでござります。そのせいでしょうか、陛下譲りの美貌はますます輝かんばかり……。美の女神もかくやとこうお美しさでござります

ね

「お世辞は結構よ」

カレーナはぴしゃりと言い放ち、顎をそびやかせてアンジエを斜めに見やる。

「“外交の役にも立たなかつた王女”の幸せなど、あなたにどうはどうでもよろしいのではなくて？」

「まさか、そのようなことは……。それどころか私はカレーナ様に感謝しているのです」

「感謝ですつて？」

「ええ。陛下が再婚をお考えいただけたのも、すべて、カレーナ様がアズノエル嬢を宮廷に召していただいたおかげでござります。私がいかにレイリア様の面影を宿された令嬢をお勧めしましても、首を縊に振つていただけなかつたというのに……。さすがはカレーナ様、陛下のお好みをよく存じであられる」

「あなたはなんてことを……！　私はそんなつもりでの子と親しくしていたのではないわ！　第一、アズノエルには」

「カレーナ、よせ」

キイルは見かねてカレーナを制した。いつものカレーナならば、このように声を荒げるとはしない。アンジエの言葉によほど腹に据えかねてのことなのだろうが、冷静さを失つた彼女が余計なことを口走るのをキイルは恐れた。

キイルが立ち上がると、アンジエは先ほどの閣議で見せていたものと同じ笑みをキイルに向け、当てこするよつた物言いをする。

「陛下がおつしやるにま、カレーナ様のサロンでよくお食いになつていて、音楽のお話をされていくうちに、アズノエル嬢にお惹かれになつたよつてござりますよ。殿下もお食いする機会は多かつたのではと思いますが、陛下のお食持ちにお食づきになられませんでしたか?」

「……まつたく、氣づかなかつたな」

平静を装おうとしたキイルだが、その声が引きつっていることに気づいた。アズノエルとの関係をアンジエが知つてゐるのではないか、と彼は焦りを覚えた。今の自分の姿がアンジエにとつてどのように映つてゐるのかと考えることが、キイルにわずかな落ち着きを『』えていた。

「アズノエル嬢は教皇一族の出であるために、王妃になどすれば教会権力を增長させることにつながるのでは、という懸念を『デデュー』公はお持ちのようです。しかし、私はむしろ教会権力を抱き込むことができるのではないかと考えております。かつてとは違い、いまヤルドリア教会は王家の従属組織なのですから」

キイルは撫然として黙り込んだが、アンジエが意味ありげに笑む。

「……もしや殿下は“教皇の呪い”などといつものを信じておられるのですか?」

「まさか。呪いなど馬鹿馬鹿しいものだ」

一人の様子をうかがっていたミシェルが、遠慮がちにキイルに近づく。アンジェはキイルに形だけは礼を尽くすと言わんばかりに一礼し、身を翻した。

キイルはこめかみのあたりに強い疼きを覚えた。苛立ちを押し留めようとすればするほどその痛みは強さを増していった。

隣に立つミシェルに小声で問つ。

「デテュー公、本日の予定は？」

キイルの意図をはかりかねたのか、ミシェルは即答しなかつた。キイルは語氣を強めて再度問う。

「……私の身は自由になるのかと聞いている

「殿下、なにを……」

「少し出かけたい。だから、あなたに手引きを頼みたい」

「の身は、己の意思で自由にならないものである。ならば心はどうかとキイルは考えるが、自嘲が即座に思考を遮つた。肉体と精神を切り離して考えるなどあまりに滑稽なことだつた。

キイルはアズノエルと会い、その存在に触れ合つことができなければ、心が満たされることはないと思っていた。離れることが耐えられないと思ったからこそ、彼は愚かな策に手を染めようとしたのだ。

その策が失われた今、キイルにできることはたつた一つ。自身の想いが何者にも踏み荒らされることのない聖域でありたいと願うことだけであった。



キイルはミシェルとともにドートリッシュ本邸へと向かった。

キイルの容貌は目立つが、王家の象徴とも言える赤い髪を隠せば大抵のことはなんとかなる。なるべく目立たぬよう、この国ではもつともありふれた栗毛の馬<sup>かつら</sup>を選んだ。<sup>ジユストコール</sup>長上着と中衣も色合<sup>ウェスト</sup>いの落ち着いた、装飾の少ないものを用意させた。華美さはなくとも生地は上質の絹で織られており、見る者が見れば一流の仕立てであるとわかるが、要は、遠目に目立たなければよいのである。

ドートリッシュ本邸は、三百年前までは教皇宮と呼ばれていた。王都に数多くある貴族の邸宅とはまるで趣が違い、アルティス城とよく似た壮麗な白亜の外観で、天に伸びる何百本の小塔と何千体もの彫像で飾られた外壁は圧巻である。

広大な敷地の一角には聖堂があり、それは一般にも開放される。一般、といつても平民が訪れるることは稀で、ほとんどが大貴族ばかりである。特に信心深いハーシュリオン家の者はこの聖堂をよく訪れている。ハーシュリオン家の馬車で乗り入れれば、不審がられることもない。

聖堂を訪問する礼拝客のために設けられた門を馬車がくぐる。石畳の上を歩いていた十五、六に見える少年が馬車のほうへと目を向けた。数年ぶりに目にするベルチエであつた。

馬車がベルチエの近くにまで寄ると、キイルは、車の窓を開け放つた。髪のせいで印象が違つて見えたのか、キイルと気づいていなイベルチエは不思議そうに目を瞬かせていた。

「……久しいな、ベルチエ」

「キイル殿下……！」

声でやつとキイルに気がついたベルチエは慌てふためいていた。キイルはベルチエを馬車に近寄らせ、アズノエルの居場所を聞いただす。

「姫様は聖堂にいらっしゃいます」

「今、聖堂に他の者は？」

「誰もおつません」

ベルチエの返事を聞くと同時に立ち上がったキイルの耳元に、殿下、ミシェルの気遣わしげな声が届く。

「どうか、慎重にお動きになつてください」

ミシェルがそう諫言する。

今、宫廷中が王とアズノエルの話題で持ち切りとなつてゐるのだ。その最中、キイルがアズノエルと一人で会いなどすればどうなるか、キイルにも考えつかないわけではなかつた。

キイルはミシェルを無視するように馬車から降り立ち、ベルチエの耳元で告げる。

「見張つていろ。決して誰も入れるな」

その返事を待つこともなく、キイルは足早に聖堂の中へと踏み入つた。

キイルが重厚な櫻の扉を乱暴に開け放つと、祭壇の前に跪く小柄な女性が背後を見やつた。

栗毛の髪をおもむろに外すと、鮮やかな赤い髪が現れる。乱れた前髪を搔き上げると、アズノエルはふらりと立ち上がり、ぼんやりとキイルを見つめた。

キイルはそびえ立つ石柱に囲まれた身廊を進み、アズノエルの近くまで歩み寄ると、彼女の肩をいきおいよく掴んだ。

「兄上とはよく会つのか？」

アズノエルは翡翠の瞳を見開いた。そんな彼女の反応は、キイルの感情を荒立たせた。

棘のある声で、忙しなく問い合わせる。

「王宮にいれば顔を合わせることもあるだろつ。だが、長い時間語り合つことなどあるのか？ なんのためだ？」

抑えようとしても治まらない怒りがキイルを苛み、アズノエルの肩を掴む手には自然と力がこもつていつた。

アズノエルは怯えたような、それでいて強い意志を持つた瞳をキイルに向ける。

「陛下とは、お会いすれば言葉を交わすこともございました。ですが、ただそれだけのことです……」

「たつたそれだけのことで、なぜ、あそこまで兄上がお前に執着す

「やのよつな」と、私のほつがお訊きしたいぐりこです。」

彼女のものは思えない金切り声に、キイルは気圧されたとともに、少し冷静さを取り戻し始めた。すまない、と呟きながらキイルは手の力を緩める。

「兄上は、お前を妾ではなく、妃にと所望されている。それは知っているのか?」

「陛下は、私を……妾のような扱いはしないとおっしゃつていましが、どうしてそんな……」

アズノエルは信じられないといつよつに首を振り、か細い声で途切れがちに言葉を紡いだ。

おそらく、彼女は王の前でもいのよつな顔を見せたのだろう。兄王は、四十を過ぎたとはい、かつて絶世の美と謳われた容色を持つ。貴族の娘たちは親子ほど年が離れていようとも、妾にと望まれば、たちまちに頬を上氣させ、うつとりとした視線を向ける。自分が拒まるなど、あの兄王は知らないのだ。これほどまでの執着を見せるのは、決してアズノエルがレイリア妃を思わせるからだけではないのだろう。

手に入らぬと思えばこそ、強く欲するようになるのはキイルも同じなのだ。

「兄上にとつて女というのは、使い捨ての駒にすぎない。義姉上の虚像をいつまでも崇拝し続け、過去の幻影に囚われ続けている。まるで病氣だ」

「それは、存じております」

アズノエルの、どこか諦めたような声は痛々しかった。キイルは彼女の背に回した手を自分のほうに引き寄せ、壊れものを扱うようにそっと包み込んだ。

「この件、クラウス殿は反対の」様子だ。兄上にもはつきりと申し上げていた。そして私にもなんとか王を説得してくれと懇願された

「クラウスお兄様が……」

「お前は私にどうしてほしい？　私は、お前を兄上に渡す気はない」

あの賭けを持ちかけたとき、キイルは王座を捨てる強い覚悟があつたわけではなかった。本当に男子が生まれるなど思つておらず、仮に生まれたとしても万事が自分の思い通りになるわけがないと諦めを覚えていたのだ。

それでもキイルには自身の気持ちに折り合いをつけることができなかつた。もつとも大事にしたいと思っていたアズノエルを、これまで散々糞み続けた妾という存在に落とし込むことが耐えられなかつたのだ。

しかし今、キイルはあの戯言のような賭けの代償をなんとしてでも払つつもりだつた。自らに約束された未来を本気で捨てようといふ気にさえなつていた。激情に駆られ、我を通そうとするなどキイルの立場では許されないが、幼いころからの想いが叶わぬかもしれないと、焦りが、平静さを奪い去つていた。

アズノエルの心を知りたかったのだ。言葉でも、態度でも、どんな形でもかまわなかつた。ただ、慰めが欲しかつた。それが、自ら

を奮い立たせる雰囲気になると思つていた。

「私が望むことは、キイル様が王位に就かれる」というやうこまゆ

アズノエルが澄んだ声で告げた答えは、キイルの望んでいるものとはまるで違つた。

キイルは唇を歪め、冷淡に問つ。

「それで、お前はどうするのだ？」

アズノエルは固く目を閉じ、なにも答えなかつた。キイルは言葉を待ちながら、じつと彼女の閉じられた瞳を見つめていた。次第に、睫毛の隙間から涙がにじんでいく。

悔しさに震える声で、キイルは問つ。

「……兄上の妃ならばよくて、私の妃は嫌か？」

指で涙を拭い、その濡れた指先で、アズノエルの唇をなぞつた。そして、朝露に濡れた花弁のような唇に、自身の乾いた唇を押し当てようとしたが、アズノエルは顔をそむけ、キイルの腕の中で暴れた。

「このようならどうでもやめだせー…」

「では、私にどうしてこうのだー！」

キイルの声は聖堂内に鋭く響き渡つた。その咆哮は、声を放つたキイル自身をいたたまれなくさせた。アズノエルに深く執着するがゆえに浅ましくなる自身を、おそれおそれと見せつけられたような気がしたのだ。

俯いたまま、弱々しく呟く。

「兄上にお前とのことをお話ししよう」と呟く。

「それはなりません」

アズノエルのためらひのない返事は、キイルの中にある秘めた迷いを強く刺激した。

親子ほど歳が離れているためか、キイルにとつては甘い兄だった。少々失礼な振舞いをしても咎められはしない。望むものは与えられる。キイルの苛立ちにまったく気づいていない無神経さを恨めしく思いつつも、無償で愛を傾けてくるあの憐れな兄を、憎むことなどできなかつた。

この件は、初めて兄の怒りに触れるかもしれないと思えば、強い抵抗を覚えた。その正体は、まぎれもなく恐怖であるのだろう。

「兄上の隣に立つお前を、もつとも王座に近い場所から眺めていろと言つのか？　お前は私に王になれと言つが、いずれお前が王子でも産もうものなら、私は……なに一つとして手に入れることが叶わなくなるな……」

喉元に込み上げる熱いものを押し殺そつと、奥歯を強く噛みしめ、キイルは歪な笑みをアズノエルに向けた。

「共に逃げてくれるか？」

キイルが言い終わらないうちに、アズノエルは首を横に振つた。キイルは唇に薄い笑みを象つたまま、苦々しく呟く。

「お前は残酷だな。いや、一番残酷なのは兄上だな。の方は、私

たちを苦しめてくる自覚すらないのだから

細い腰を抱き、耳へ、頬へ、そして唇に口づけを落とした。今度は拒まれなかつたことに安堵したが、どんどん胸の空虚が広がつていく心地がした。

アズノエルがどのように思つていよつとも、彼女が心のままにそれを口に出すことは許されない。キイルにしても、今の自分の拳動がどれほど良識を欠くもののか頭の中では理解していた。王が見始めた娘をこうして腕の中に抱いていること自体、表沙汰になればただではすまないものだ。その身分いかんによつては投獄されても文句は言えない。王弟という立場を持つてしてでもなんらかの処罰が与えられることだらう。

「あの賭けは殿下の勝ちでしたわ。ですが、それは奇跡でもなんでもございません。あなたの身を破滅に導くよつなものを、どうして奇跡と呼ぶことができるでしょつか

「そうだな。これが神の与えられた奇跡だというのなら、なぜ私がここまで苦しめられなければならぬのかわからぬ」

互いの意思だけでなんとかなるものではない。移り気な王がいつものように心変わりをしない限り、二人の運命は変わらない。

病的な女狂いと罵られる兄王に対し、キイルは憐れみすら抱いていた。亡き妃の代わりとなる者が兄を癒してくれればよいとも思つていた。しかし今回ばかりは、その病が悪化してくれればよいと思つていた。愛するのはレイリアだけであるのだと、別の者を愛そうとするなどどうかしていたのだと、兄王がいつもの軽薄さを見せることをただひたすら祈つていた。

（はたして、このような願いを神は聞き届けてくださるのだろうか

……）

キイルは祭壇に目をやりながら、憐い嘲笑を零した。

+

強い西田がキイルの青褪めた頬を照らす。

心は燃えるようだつた。この赤い感情は怒りであり、嫉妬でもあつたが、激しく燃え上るたびに冷たい灰が胸の奥に降り積もつていつた。

規則正しく石段を叩く足音が聞こえる。聖堂を後にしようとしたキイルの前に、黒い祭服をまとつたクラウスが現れた。彼の表情は硬く、暗い。訝しがりだキイルがふらりと石段の下に目をやると、佇立しているベルチエの姿が目に入つた。キイルと目が合つと、ベルチエは決まりが悪そうに顔を伏せた。

クラウスは、静かな声でキイルに問う。

「デデュー公とともにいらしたのですね？」

キイルは栗毛の髪を手にしたままであることに気づいたが、誰かに自分の姿を見られようとも構わないといつもいつな気分になつた。

黙り込んだまま、クラウスに視線だけを返す。

「殿下、あなたは別の者を王太子に据えようとされてこられるようですが

が、恐れながら私は反対にいざります

「そなたもアズノエルと同じことを言つのだな。いや、アズノエルだけでなく、私の周囲の者は皆、そう言つに違ひない」

「それは皆が、あなたに期待を抱いているところにいざります」

「勝手な期待だ」

キイルは語氣を強めてクラウスを睨みつけたが、クラウスは穏やかでありながら強い意思のこもった視線をキイルへ向けた。

「やはり、王位を放棄されようとしていらっしゃったのですね。急にあのようなことを言い出されたので奇妙に思つていたのですが、一体なぜそのようなことを？」

キイルに訊ねつつも、クラウスはおおよそのことに感づいているようであった。少なくとも、先ほどキイルがアズノエルと会つていたことは知つている。足止めをしていたベルチエが黙秘していたとしても、クラウスは愚鈍な男ではない。彼はキイルの事情を察した上で、諭そうとしているのだ。キイルの行いはまったく愚かなもので、決して許されることではないのだと。

「クラウス殿……。通常、司祭には婚姻が認められていないだろう？　我が国に限らず、他国のルドリア教会も同様であるそうだが」

「はい。ドートリッシュとサルファは血統の維持のために特別に婚姻が認められております。もちろん、それでも婚姻せぬ者も珍しくありませんが」

「それではもし、他の同祭たちが誰かを愛したときはどうするのだ？　愛する者を諦めるのか、それとも、同祭であることを諦めるのか？」

キイルは俯いたまま問いを重ねたが、クラウスはキイルにその先を促すかのように、なにも言わない。

「もし、同祭であることを諦めた者を曰いたとき、そなたはどう思つのだ？　愚かだと嘆くのか、哀れだと心を痛めるのか……」

あまりの悔しさからキイルは言葉をつまらせ、感情のままに熱くなる瞳をクラウスに向けた。

「クラウス……。私を、助けてくれないか？」

頼む、とかされた声で、縋るよつて告げる。  
クラウスはすべてを悟つたのだろう。怒るでもなく、哀れむでもなく、ただ静かな眼差しをキイルへ向けていた。

## すれ違う願い（1）

ルドリア教会の最高位に位置づけられている聖堂は、ゴースティン王都エクシユール中部にあるフェルダ大聖堂である。建設が開始されたのが今から一千年も前のことであり、かつて教皇座が置かれていたという権威ゆえに、国内外から多数の巡礼者が訪れている。聖堂には修道院が隣接しており、アズノエルはその中の女子修道院をしばしば訪れていた。アズノエルは聖職者ではないが敬虔な信徒であり、修道院長とは親交が深かつた。院長は古代語と教会史の研究者であるが、アズノエルはアルティス城に保管されている貴重な文献を自ら写本して図書館に寄贈したり、文献の解釈について論じ合つこともあつた。

修道院長との恒例の会見の後、アズノエルはフェルダ大聖堂において長い祈りを捧げていた。夏は既に去つたが、夕刻までは陽が燐々（さんさん）と薔薇窓から降り注いでおり、沈みゆく陽であつても、いまだ強い光を放つていた。

アズノエルは赤い西日を横顔に受けながら、西の尖塔の螺旋階段を上つていた。自分の足音が不気味に木霊するのを感じながら、最上階にまで辿り着いた。登り切るころには、あたりは薄らと闇に包まれ始めていた。

地上よりも強く吹きつける風が、アズノエルの身体中に巻きつく。乱れる長い髪を気にかけることもなく、薄い目蓋を通して流れゆく時間を感じていた。徐々に闇が深まっていく。

アズノエルは意を決したように石壁の手すりから身を乗り出し、

眼下を見下ろす。その先は一面の真つ暗闇で、見つめているだけでその中へと吸い込まれていくようだつた。ただ、アズノエルが今いる場所も先の見えない暗闇の中であるため、どこに行こうと大差はなかつた。

暗闇の中から、この数日の記憶が浮き上がりしていく。王により与えられた苦痛でしかない愛は、ことじことくアズノエルを打ちひしがせていた。

もともとアズノエルは、王に対し悪感情を抱いているわけではなかつた。政治を棄て、快樂に耽溺する一面については、どうあっても敬うことなどできはしない。

ただ、あらゆることに恵まれてゐるはずの王が時折見せる寂しげな表情……。それは誰かに救いを求めてゐるようにも見えるものだつた。また、傲慢な振舞いが許される立場でありながら、王は決して人を疑わず、悪く思わず、愛情だけを傾けようとしていた。だからこそ、荒廃しているように見える王の精神の中に、秘められた美しいものを見出したいと思つていた。

許してくれ……。

その悲痛な声を思い出すたびに涙が零れた。

抑えつけられた四肢は、真綿で包まれた拘束具をつけられているようだつた。耳に直接注がれる甘い声は悲哀に彩られていた。身体を強張らせ、すべてを拒否しようとしても、心からずたずたに引き千切られていつた。

不自然に開かれた身体は悲鳴を上げていたが、抱きしめる手が、肌の上を這う指が、あまりにも優し過ぎた。それは、決して彼女の望むものではなかつた。

嗚咽が漏れる。

震える唇を噛みしめながら、キイルとクラウスのことを想つた。幼くして父母を亡くしたアズノエルをずっと支えてくれたのがクラウスだった。愛し愛される喜びを与えてくれたのがキイルだつた。いつまでもこのままの関係が続くはずがないと思っていたが、それでもいつか見た夢のような未来を切望せずにはいられなかつた。どうあっても、断ち切られる以外の道しか残されていない今、それを願うことすら罪であるように思えた。

アズノエルは深く息を吐き、田を開じた。そのまま手すりから身を乗り出し、運命の赴くままに身を任せようとしていた。

「聖堂を血で汚す氣ですか？」

胸を射抜く鋭利な声だつた。

石壁に触れる手が大きく揺れ、アズノエルは振り返る。角灯の明かりに浮かびあがるのは、黒い祭服を着た若い男の姿だつた。

「ロジエ様……」

「どうしました？ そのような軽率な振舞い、あなたらしくありますね」

アズノエルはその場に座り込み、ロジエを見上げた。ロジエは壁に取り付けられた台座に角灯を置き、アズノエルの近くまで進んだ。突然震え出した口元を、アズノエルは両手で覆つた。

「も、申し訳ありません……」

「……最近、あなたの様子がおかしいので気になつていたのですよ。それにしても、なぜこのようなことを……。なにがあつたのか、話してごらんなさい。あなたの力になれることがあるかもしません

から

そう告げてロジェは腰を落とした。

ふわりと包み込むような声と、なにもかもを見透かすような視線に、張りつめていた硬質な空気が氷解していく。誰にも言えない闇色に渦巻いた想いは、四方に拡散していくように、アズノエルの唇から溢れ出した。

これまで、アズノエルとロジェの間には深い親交があつたわけではない。むしろクラウスとロジェが教会内の方針について意見を対立させることが多く、そのせいでアズノエルはロジェとはあまり関わらぬようにしていたほどだつた。

とはいって、ロジェ自身の人格に非難されるところがあるとアズノエルは思っていない。教会内においてクラウスと匹敵する強い権力を有しているにもかかわらず、彼はいつも穏やかな笑みを浮かべ、静かに佇んでいた。今、アズノエルに見せる顔もそれと同じものだ。

ロジェは、時折嗚咽を漏らすアズノエルの背を撫でる以外は、相槌を打つこともなく、なにも言葉を発しなかつた。平静さを欠いたアズノエルの言葉は、あちらこちらに彷徨い、また、聞き取れなくなるほどにか細くなることもあつたが、それでもロジェは根気よく話を聞いていた。

アズノエルが話しあがめたとき、ロジェはゆっくりと口を開く。

「そのようなことが……。こしづらくキイル殿下もなにかに思い悩まれている」と様子でしたが、あなたのことだったのですね」

王宮でのキイルの様子はアズノエルにはわからないが、見る者が見れば、キイルにはなんらかの奇矯な振舞いが見られたということなのだろう。昨日、いきなりドートリッシュュ本邸の聖堂へとやつて

きたことにして、冷静な彼の振舞いと思えないものであった。

「しかし、いつまでも隠しておけることではないでしょう。せめてクラウス卿にお話ししてみては？」

アズノエルは何度も強く首を振った。この件に関して、アズノエルは決してクラウスに頼つてはいけないと思っていた。

クラウスは宫廷にはこびる面従腹背の貴族たちとは違い、オトウール王家に敬意は払いながらも、不必要に関わるうとはせず、おもねることは一切してこなかつた。それは、王権に対し、教会が常に中立であらねばならないという彼の信念によるものだつた。かつて強い魔力を秘めた司祭たちが俗権力に介入し、政を思いのままに操つていたという歴史があるからこそ、その中核にあつたドートリッシュの人は決して王家と深く関わつてはならないのだとクラウスはよく語つていた。アズノエルはそんなクラウスの清廉さを尊敬していたからこそ、ドートリッシュの娘である自分がキイルと恋仲にあることさえ告げることができないでいた。

「ロジエ様のおっしゃつていることはわかります。ですが、クラウスお兄様にこれ以上」迷惑はかけられません……。あの方を、失望させたくないのです」

「それならば少し冷静におなりなさい。あなたが妃となることを厭い、死を選んだとなれば、クラウス卿は王への反逆に問われかねませんよ。実際にはあの王がクラウス卿を罰するなど考えられませんが、遺された卿は批判の矢面に立たされることになるのですから」

「……ロジエ様、私はどうすればよいのでしょうか？」

「あなたはどうされたいのです？」

ロジエから即座に問い合わせられ、アズノエルは言葉につまつた。

「なぜ、キイル殿下とお逃げにならないのです？ 王族として、王太子としての地位を失つたあの方に価値はありませんか？」

アズノエルは涙に濡れた顔を振り上げ、必死に言い募る。

「そんなことありません！ 殿下が共に逃げようとおっしゃつてくださったとき、私、とても嬉しかったのです。ですが、あの方はこの国に必要な方なのです。決して、失われてはいけないのです。…人が生まれながらになんらかの使命を有しているというのなら、あの方は王となるべき方です」

「そうですね……。私もそう思います」

「ですから、私のためにあの方がなにかを捨てられることがあってはならないのです。あの方が生まれながらに『えられ』ているものは、なにひとつ、私情でお捨てになつてはいけません」

次期王として、これまでキイルがどれだけ多くのことを求められ、それに応えるべくどれほど腐心してきたのかアズノエルは知つている。そして、実際にはアズノエルが知つている以上にキイルは骨を折つてきたに違いないのだ。

兄上の隣に立つお前を、もつとも王座に近い場所から眺めて  
いふと言つのか？

お前は私に王になれと言つが、いずれお前が王子でも産もう  
ものなら、私は……なに一つとして手に入れることが叶わなくなる

な……。

胸を抉られるような声がよみがえり、アズノエルは身を固くする。キイルをあれほど苦しめているものが、自身であることは疑いようがなかつた。少しでも長く彼の傍にいることができればと願い、別れを先延ばしにしたことが、『今』を招いてしまつたのだ。

だからもう、アズノエルは甘い夢など見てはいなかつた。今からでも手に入れることのできる幸福があるとすれば、キイルの名誉を守り通すということだけだと思った。そのためにも、決して王の妃になどなるわけにはいかない。これ以上、キイルを裏切ることだけはできないのだ。

「ロジー様。私は、司祭の叙階を受けることは可能でしょうか」

ゴースティン＝ルドリア教会において、強い魔力を有する司祭たちは権威の象徴とされている。誰もが手にすることのできない力だからこそ、司祭たちは珍重され、その聖域に踏み込むことは王権をもつてしても許されないとされている。

アズノエルの意図を察したのだろう。ロジーはうなだれたままのアズノエルの肩に手を置き、顔を覗き込む。

「王は、あなたを無理やり還俗なさつても妃にと望まれるかもしれませんよ」

「私を妃とすることを、すべての方が賛同されているわけではないでしょ、還俗させてまで妃にするとなれば、周囲の方々が陛下をお止めになるはずです。陛下が私を妃に望まれる以前に、私が司祭の叙階を受けることが教会内で決まつっていたとすれば、王命であるうと拒むことができるのではありませんか？」

「たしかに、それはもっとも有用な手でしょう。ですが、クラウス卿がなんとおっしゃるか……」

「以前、司祭になることを認めてほしいと話したことがあるですが、お兄様には反対されてしまいました。ただ、あのときと今では事情が違いますし、聞き入れてくださるかもしれません。ですからどうかご助力をお願いします、ロジー様……」

これさえ叶えば、すべてが終わるとアズノエルは思っていた。  
後はただ、キイルへの想いを忘れることができればいい。元々結ばれるはずのない相手だったのだから、永劫の別れであろうと受け入れなければならないのだと自分に言い聞かせていた。

## すれ違う願い（2）

ゴースティン＝ルドリア教会は、三か月に一度、国内の司祭をフレルダ大聖堂に集めて定例会議が行われる。教義や運営方針について話し合われた今日の会議は滞りなく閉幕したかに見えたが、会議を取りしきるゝ総議長の地位にあるロジエ・サルファにより、別の議案が提起され、急遽、上級聖職者であるゝ高位司祭のみがその場に残された。

「私は、アズノエル＝リネージュ殿に高位司祭の資格を与えるべきと考えているのです」

ロジエがそう告げた途端、ざわりと会議場に波が立つた。総議長席の隣に腰かけているクラウスは、いきなりなにを言い出すのかと、ロジエの横顔を睨むように見やつた。

高位司祭の一人がためらいがちに口を開く。

「たしかにアズノエル殿の有されている魔力は類まれなものと聞き及んでいます。しかし、このようなことをされてよろしいのですか？」

司祭たちの困惑したような視線がクラウスとロジエに注がれる。アズノエルは正式に王の婚約者と決まつてはいないが、王がアズノエルを妃に望んでいるという話は王都に住まう貴族の間に広がってしまっている。この状況でアズノエルを司祭にしようとするなど、彼らが訝しく感じるのは当然だった。

数か月前、司祭になるために取り計らつてほしいとアズノエルが申し出たが、クラウスはそれに同意しなかつた。ルドリア教会の内部は宮廷以上に権謀術数うごめく悪の巣で、司祭たちは稀有力を有するがゆえに傲慢な考え方を持つ者が多い。アズノエルが敬虔な信徒であるからこそ、教会権力の中核に関わらせるべきではないとクラウスは考えていた。

ざわめく議場を見渡し、クラウスはため息を呑み込む。

主教はこの場においてもっとも強い発言力を有しているが、クラウスがどのような発言をしようとも私情を挟んでいるようにしか見えないだろう。

迷った挙げ句、あえて王のことには触れずに意見を述べる。

「たしかに、アズノエルの有している力は高位司祭の叙階を受けるに相応しいものであるかも知れない。ただ、俗人であつた者をいきなり上級聖職者に叙するというのには抵抗がある。一旦は修道女として一定期間の修業を積むべきではないかと私は考える」

クラウスが言い終わるやいなや、ロジエが淡々と反駁する。

「クラウス主教の言われる通り、大抵、修道士や修道女であつた者が司祭の叙階を受けるのが通例です。私や主教ですらそうだったのでしたからね。ですが、まったく前例のないことではありませんし、国内外から強い魔力を有する者を集め、彼らを同士とすることは私たちの責務です。なにぶん、他国に比べ司祭の数がまるで足らないのですから」

ゴースティン＝ルドリア教会は三百年前より王家の支配下に置かれたが、それに伴い、他国のルドリア教会とは異なる組織系統を有するようになった。その最大の原因は、魔道の力を操れることが司

祭叙階の条件に課されていいるためである。

現在、上級聖職者とされる「高位司祭」の叙階を受けていいる者は二十名ほどであり、その中には最高位とされる「主教」も含まれる。その他の「下位司祭」は約一百名であるが、四千万に達せんとするゴースティンの人口から考えれば、一百数十名しか聖職者がいないというのはあまりに過小である。

当然、すべての教区に司祭が行き渡つてはいない。日々の礼典を取りしきるために、修道士と修道女の一派に対し礼典執行の資格を特別に付与することで、聖職者の不足を補う形となつてゐる。ゴースティン国内だけでなく周辺諸国からかき集めても、約二十名しか高位司祭がいない現状を踏まえれば、一人でも多く聖職に就く資格のある者を獲得したいと考えるのは当然であった。

一旦、アズノエルの叙階を認めるという方針で話が進められることがとなつたが、合議の終了後、クラウスはロジエだけを会議場に残して人払いをした。

隣り合つた席に着くロジエに背を向けるようにクラウスは立ち上がり、窓の外を見つめながら口を開く。その言葉の端々にはロジエを非難する響きが見え隠れしていた。

「サルファ司祭、あなたは以前からあの子を司祭にさせたがつていようだが、なぜいきなりあのような提案を合議にかけたりなどされたのだ？」

「先ほども申しましたが、教会組織を盤石なものとするため、最高部を統括する聖職者の数を維持していかねばならないからです。私がさすれば、なぜあなたが反対されるのか理解できません」

ロジエは棘の含んだ言葉をさりにクラウスへと向ける。

「そもそも、強い魔力を有する継嗣を儲ける」ことが私たちの義務ではありますか。我々に特例が認められているのも、高位司祭の半数がドートリッシュとサルファの縁者で占められているがゆえのこと……。それにもかかわらず、ドートリッシュはあえて婚姻せぬ者が多いですが。そういえば、コリウス卿はあなたとアズノエルとの婚姻を望んでいたと聞きましたが？」

「父はそのつもりでアズノエルを本邸に引き取ったようだが、私にそのつもりはない。そして、あの子を教会になど関わらせるつもりもない」

「だとしても、本人が望んでいるとなれば、それを却下する理由などないではありませんか。実を申しますと、先日アズノエルから頼まれたのですよ。司祭になることを認めてもらえるよう、クラウス卿に説得をお願いしたいと」

クラウスは振り返り、微笑を顔に貼りつけたロジエをねめつけた。

「王が妃にと望んでいること、そして、キイル殿下とのことに歎み、酷く思いつめていたのです。……あの西塔から飛び降りようとするほどに」

ロジエの長い指が、窓から見える尖塔を指し示す。その方向に目をやつたクラウスからは、たちまち血の気が引いていった。

そんなクラウスを追い立てるよつて、ロジエはゆつたりとした口調で酷薄な言葉を紡ぐ。

「王の妃となることを厭つて命を断つなどすれば、クラウス卿が王

に罰せられかねない、そう諭すと、アズノエルは踏み止まりました。だからこそ、私はアズノエルの願いは叶えてやりたいと思うのです」

「アズノエルの望み？」

「キイル殿下が次期王になられることだそうです。殿下は、王にアズノエルを渡すぐらいならば、王位を棄てて共に逃げるとまでもおっしゃつたそうです。そんな殿下の軽挙を止めなければならぬ」とアズノエルは考へていて「アズノエルは考へていて」

「のために、司祭になろうとしていると……？」

クラウスは額に手をやり、壁によろめく身体をあずけた。  
こんなことになるならば、数か月前の時点ではアズノエルを叙階させておけばよかつたとクラウスは自分を責めた。高位司祭の組員で構成される合議での決定事項は、ゴースティンの国内法に優位し、慣例上、王命であっても覆すことの許されないとされている。つまり、アズノエルを司祭にしてしまえば、彼女を妃に望む王の申し出を断るための強固な盾となつたかもしれないのだ。

「一か月ほど前だつたでしょか。キイル殿下が、自分は王にならねばならないのか、と私に訊いてこられました。悩んでおられるのは、結婚のことだと容易に想像がつきます。その相手がアズノエルだとは思いませんでしたがね」

「キイル殿下は、陛下の『落胤を王太子に据えよ』とまでされていました。そして、自らは摄政となるつもりであると……。しかし、アズノエルと共に出来するなどと、本当にあの殿下が言われたのか？」

「キイル殿下は非常に優秀な方でいらっしゃいますが、やはりまだ

お若い……。あの方がゴースティン王族であるうとするのならば、確実に選ばねばならない道があつたはずなのですが、それを完全に見失つておられます。手遅れにならなければよいのですが

クラウスの中に、助けてほしいと懇願するキイルの姿が過ぎつた。キイルはその身に抱えているものを、その意思によつて棄てることなどできない。それは彼自身が一番わかつてゐるはずだというのに、アズノエルのために誠実であるうとするあまり、自ら身を破滅させる方向へと突き進んでいる。

「あなたに王命をはねつけるだけの権力があれば、このよつな事態にはならなかつたでしょ？」

ロジエが冷笑まじりに告げ、クラウスを見上げる。

「かつてドートリッシュは国王ですら平伏した権門であつたというのに、ゴースティンの一貴族の地位に貶めてしまつたのはあなた方歴代の当主たちでしょう。今の本家の家系は五百年以上も前に教皇筋より分かたれた家の子孫……。かつて神の代理とも呼ばれた一族の誇りをお持ちでなくとも無理はありませんがね」

血統の維持に執着していないクラウスであつても、今の本家が馬の骨だと言わんばかりの弁には、いやせか氣が立つた。その苛立ちを抑え、再びロジエに背を向ける。

「アズノエルの司祭叙階の件は保留する。今しばらくは、陛下の説得を試みたい」

「あの王になにを言おうと無駄なことでは？ 王が翻意なさるのなら、とつぶにされてゐるでしょ？」

クラウスはロジエの言葉を黙殺した。まだ、王の説得を諦めることができなかつたのだ。

アズノエルが聖職に就くことを望んだ理由が、単に王妃となることを厭つたためであるならば、クラウスは王の不興を買つてでも教会の合議決定を盾にアズノエルを司祭としたことだろつ。しかし、キイルのためだと知つた今、アズノエルの望みを叶えるわけにはいかないと思つた。

クラウスは、アズノエルが一生キイルに会わないうつもりでいることを悟つた。両親を早くに亡くした薄幸の少女の幸せを願えば、このような悲しい選択をさせたくなかつた。王がアズノエルを妃とすることを諦めさえすれば、たとえキイルの妃となることは叶わずとも、一人の想いが無残に散らされる必要はない。彼らが幸せになる道はまだ残されているはずだと思つからこそ、クラウスは今一度王に翻意を促したかつた。

夕刻の公式礼拝が行われた後、クラウスは王の侍従とともに王の私室へと向かつた。クラウスが謁見を申し出るまでもなく、王がクラウスに話があるので、白い侍従たちがクラウスの前へと現れた。

侍従たちが案内したのは、謁見の間ではなく王の私室であった。天井まで伸びた窓の前に王は立つており、クラウスが入室するとともに王が口を開いた。

「アズノエルはどうしておるのだ？ 余のもとへ連れてくるよう申しつけておつたであら」

王はクラウスに背を向けており、その表情を読み取ることはできない。しかしその声はどこか愉悦を含んだものであった。

王の出方を探るために、クラウスはあえて合議の件を持ち出す。

「本日行われた高位司祭の合議により、アズノエルは高位司祭の叙階を受けることとなりました」

王が振り返り、咎めるような視線をクラウスに向けた。クラウスは王に毅然とした態度を保つたまま、さらに言葉を続ける。

「司祭となるのは修道女としての誓願を立てて後のことになりますが、これは本人の強い希望でもあります。ですから陛下、婚姻の件はどうか辞退させていただきたく……」

「ダートリッシュの司祭は特別に婚姻が認められていたらどう？『司祭のまま妻に娶つてもかまわぬのではないか？』

王があまりにも淡々と言葉を紡いだため、クラウスは呆気にとられた。

聖職者を俗界の最高権力者の妻に据えることに問題がないと、この王は本気で考へているのだろうか。この王に常識など通用しないとクラウスは改めて思い直し、決然と問い合わせる。

「なぜ、陛下はそれほどまでアズノエルにこだわられるのですか？」

「愛しているからだ」

王の即答に、クラウスは吐き出しかけたため息を呑み込む。それならば、十八年間も独身を通そうとしたのは一体なんだつたというのか。なぜ妾でなくあえて妃にと望むのか。

クラウスは王に翻意を促そうと出向いてきたわけだが、呆れや怒りのほか、諦念までが沸き起こり、クラウスから言葉を奪つていた。

「クラウス、そなたも近々結婚するのだったな。ダートリッシュ分家の者とだつたか？」

「きなり自身の話題を振られ、王の意図が読めないクラウスは曖昧にうなづく。

「そなたは、妻となるやの娘を愛しているのか？」

「……それはもちろん、大事にせねばならないと思つております。彼女は私の従妹に当たる者で、かねてより婚約を交わしておりまし

たから「

王の哄笑が室内に響き渡り、クラウスの声を遮った。王は肩を震わせ、束ねていらない長い髪をゆるやかに揺らしていた。濃い睫毛に彩られた豪奢な瞳がクラウスへと向けられる。

「まったく、そなたは本当に面白い男だ。それを冗談ではなく本気で申しているのだからな。……余は、そのようなことを訊きたかったのではない。そなたは、狂おしいほどの恋情を胸に抱えたことはないのか？ それがわからぬのであれば、このような話をそなたにしても意味のないことだ」

クラウスはドートリッシュ本家の嫡子として、生まれたときからその行く末は定められていた。本家人間は血統の維持が義務であるため、当主でありながら自分の意思のみで婚姻相手を定めることはできない。これまでクラウスは、その身に課せられた責務を当然のように受け入れ、また、抗うこともしてこなかつた。己のすべてを棄ててでも、なにかを手に入れたいという衝動に駆られたことなど一度もなく、愛や恋を選択の価値判断に加えることの意味もわからなかつた。王がその胸の内を語つたとしても、クラウスにそれを理解するのは難しいことであつただろう。

クラウスは途方にくれながらも、さらに説得を続けよつとする。

「陛下、アズノエルには他に想つ方がいたよつでござります。……私は、詳しいことは存じませんが」

王の澄んだ青い瞳に暗い影が過ぎる。クラウスは潔い始めた不穏な空気に、思わず視線をそらした。

王は含み笑いをしながら、クラウスをぞつとせせるような冷たい

声で言い放つ。

「誰を想つていてもよい。余は、アズノエルに愛されようなどと思つてはおらぬ。……ただ、この腕の中にあるべきだ」

王の私室を後にしたクラウスは、侍従の目も気にせずに大きく肩を落とし、何度もなるかわからないため息を吐いた。

ロジンの言うように、教会が王権と真っ向から対立できるだけの力を失くし、それを何百年も甘受してきたことが今へとつながつているように思えた。

### 「クラウス殿」

背後から呼びかけられたクラウスが慌てて振り返ると、そこにはキイルの姿があった。

### 「兄上のお心は変わらぬか?」

絞り出すような声で問いかけるキイルの顔は、ほんの一か月ほど前、生誕祭の折に見かけた面影はなかつた。才氣あふれるキイルが、日に日に憔悴の色を強めているのは痛ましい限りである。

「いっそ、あれを連れて逃げようと思つが……そなた、どう思つ?」

聰明なキイルの言葉とは思えなかつた。

いつものキイルは、華やかでありながらも、どこか冷やかさを忍ばせた空氣をまとつており、まさに彼の怜俐な気質を現していたも

のだが、それがすっかり削げ落ちてしまっているかに見えた。

「殿下、どうか早まつた真似はなさいませぬよつ……」

クラウスがたしなめるような声をかけたが、キイルは一笑しながら顔をそむけた。

「私の縁談が決まりそうだ。そこに私の意思はないが、叔父上が強硬に進めている……。遅くとも今年中に正式な婚約が交わされるだろ？」「うう

デデュー公ミシエルは、キイルの気持ちを知っているのだろう。キイルの後見人であるミシエルとしては、なにか取り返しのつかないことが起ころる前に、キイルの身辺を固めたいと思うのは当然である。

「そのほうが殿下のためにはよろしいかと存じます」

クラウスは苦笑の思いでそう告げた。ミシエルの強硬策は却つてキイルを追いつめているかに思えたが、実際のところ、クラウスには取りうる手がないのだ。

キイルは、忠告など聞く耳持たずという素振りでクラウスに微笑みかける。

「今からでも暗愚である振りをしてみるというのも手か？ 利用価値のない王弟になど、誰も見向きもしなくなるであろう？」

抑え切れぬ自嘲を吐き出したキイルは、片手で顔を覆い、くつくつと喉を鳴らす。

「いや、それでは駄目だな。ますます兄上に妃を娶り、王子を儲けよとの声が大きくなるだけのこと……」

あらゆるものに恵まれ、周囲の者から多大な期待をかけられてきた先王の第一王子……。

クラウスはアルト＝ヴィジエ王とキイルはまるで似たところが多いとクラウスは思っていたが、ある一つの局面に立たされた今、正反対であつたはずの兄と弟が奇妙に思えるほどに重なり合っていた。クラウスは少年期の王についてまったく知らないが、レイリア妃の死があれほどまで彼を変えたのだろうか。このままではキイルまでもが同じ道を辿りはしないかと、その行く先を憂える気持ちが募った。

「近いうちに、彼女と会つ機会を作つてはくれないだらうか

キイルの懇願に、クラウスは即答することはできなかつた。どうすることがアズノエルとキイルにとつて幸せであり、最善の策であるのか、クラウスにはわからない。キイルをアズノエルに会わせることは困難ではあるものの、まったく策がないわけではない。

しかし、一度や一度会つたところで彼らの中でなにが変わることうのか。

一人は想い合つてはいても、その願いは、既にすれ違つてしまつているのだ。

「あの子に会つて、どうなるおつもりなのです」

一つの恋を諦めさせること、課せられた責務を認識させること。それが今、クラウスの為すべきことだろう。決して、アズノエルに会わせる」となどではない。キイルを眞の意味で助けようと思つうであれば、彼の軽挙に加担などしてはならないのだ。

キイルは、アルト＝ヴィジエ王の負債を背負わされてきた犠牲者であるとも言える。だからこそ、彼はこれほどまで頑なになつているのだろう。快樂に耽溺する王が、最愛の娘を奪う……。今まで王に対して降り積もつていた不満が爆発したとしても不思議はなかつた。なんとか自棄を起こさずにいるのはキイルの誇り高さゆえだと思われるが、それがいつまで続くかわからない。

「別になにも……。ただ、会いたいだけだ」

そう呟いたキイルは陶然としているかに見え、クラウスは底の知れぬ恐怖を覚えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4114s/>

---

いつかあの場所で

2011年11月26日16時55分発行